
M大写真部副部長の喧騒

柏木杏花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M大写真部副部長の喧騒

【Nコード】

N0777Z

【作者名】

柏木杏花

【あらすじ】

M大写真部。ここは個性が強すぎる後輩が、むやみやたらと集まってくるサークル。絶世の美女にしか見えない一年男子とその彼女。その彼女の辛辣な女友達。ブログの女王に、鉄道マニアの撮り鉄。こんな写真部の副部長を、なぜか平凡きわまりない俺がつとめている。いろいろあるけど、それなりに平和にやってきた。だがある日、俺に許嫁が湧いて出た。しかもその許嫁が小学生ってなんでなんだよ！俺は自慢じゃないけど十歳年下より、十歳年上の方がいいんだよ。こういう価値観って十年後も二十年後も、変わらないと思っ

てるのに！ そんな事情で、婚約解消という名のハッピーエンドに、いざ突き進む…つもりだったんだけど……。イマドキの草食男子、松浦惣介のだいたいドタコメ。ちょっとラブコメ。話が進んで、徐々に恋愛っぽくなってきている気がしましたので、ジャンルをコメディーから恋愛に変更しました。軽くて楽しい話がお好みの方は、お試しください。

第一話

突然の婚約話

「惣介、ちよつと惣介」

「はあ？ なに？」

その日、土曜日の午後だというのに、珍しく家でゴロゴロしてたのが悪かったのか、晩ごはんを作ってるお袋にからまれた。

俺は松浦惣介。^{まつうらそうすけ}M大経済学部三年、写真部副部長。他に特筆すべき事柄は、あいにく持ち合わせていない。

自分で言うのも虚しいが、どこにでもいる普通の大学生だ。

「いい若者がだらだらと鬱陶しいわね。あんた、つきあってる彼女とか、いないの？」

「いないよ」

リビングのソファアに寝そべり、雑誌に目を落としたまま、俺は生返事だ。彼女がいたら、土曜に家でゴロゴロしてるわけがない。

平和だ。平穏だ。平凡だ。

子どもの頃から住み慣れた住宅街の一戸建て。夕飯の準備にいそしむ母親から多少からまれたとしても、どつてことはない。

この日はM大の学祭が終わって最初の土曜日だ。副部長という名ばかりの肩書のせいで、写真展ではメインで働いてきたから、家でこんなのにんびりするのも久しぶりだった。

もっとも今夜は写真部の打ち上げコンパだから、夕方には出かけるのだが。

「情けないわね。せっかくひとが、そこそこイケメンに産んであげたつてのに、覇気がないつたら……」

「覇気がないのは、まあ認める。万事無難つてのは、俺の個性なんだよな。無難が個性つてのはちょっと変か。」

「だいたい、イケメンにそこそこつて付けてる時点で、産んだ本人も息子を平均点だと評価してるつてことだ。親の欲目つてのはないのかな。」

「まあでも、ちょうどいいわ」

「なにが？」

「実はあんた、許嫁がいるのよ」

「はあ~~~~~?」

平凡な俺の、平凡な人生は、こんなひと言で転がり始めた。

許嫁……?」

「許嫁つて、もしかして、もしかしなくても、婚約者みたいなもんだよな? みたいというより、そのものなんだろうけど、いきなり許嫁の存在を突きつけられた男なんて、この程度は取り乱すだろう。それにしたつて、この平成のご時世に、結婚相手を親が決めるなんて、一般庶民があり得るの? あり得ないよなあ。」

「母さん、それ、なんの冗談?」

手に持っていた雑誌をテーブルの上に放り出して、俺は座り直した。対面式のシンクで料理の下ごしらえの手を休めることなく、お袋は平静を保っている。

「冗談なんかじゃないわよ。どうせあんたのことだから、だれが相手でもたいして変わらないんでしょう。ならいいじゃない」

「違うないわけないだろ。なに言ってるんだよ。だいたい、俺まだ大学生なんだから、結婚なんてあり得ないし……」

「だれがいますぐ結婚しろなんて言ったのよ。婚約よ」

そんなに違わないだろ。いますぐか、あとかの違いじゃないか。

「とにかく、相手くらい自分で探すから、許嫁とか完全に却下だからね」

「ものすごく可愛い子なのよ。気にならない？」

「ならない」

「ほら、それよ」

それって、なんだよ。勝ち誇ったみたいに、ふんぞり返って。

「普通、年頃の男子大学生が、許嫁がいて、その子が可愛いって訊けば、どんな子が気になるはずじゃない。それが間髪入れずに気にならないって言い切るのは、おかしいわよ。異常よ。非常識よ」

「非常識なのは母さんだろ。だいたい、万が一『気になる』とか言

「つたら、一気になだれ込んで結納の日取りは……とか決めかねないじゃないか」

「そんなトラップに引っかかるほど、俺も伊達に二十一年間、お袋の息子をしてはいないんだ。」

「……まさか惣介、あんたホモか不能じゃないでしょうね」

「言うに事欠いて、なんて推測をしゃがるかな、このおかんは。」

「で、どっちなの？ 白状しなさい」

「ちょっと待て。なんで二者択一なんだよ。」

「どっちも違います！」

「いい加減、怒鳴りたくなってきたが、あいにくチャイムが鳴ったので、俺は気を削がれた。」

「惣介、出てよ。いま手が離せないわ」

「今夜のおかずはハンバーグか餃子なんだろうな。お袋の手が、ひき肉の油でテカテカに光っていた。」

第一話

突然の婚約話（後書き）

はじめまして。お読みいただいて、ありがとうございます。

もう少し煮詰めてから投稿したかったのですが、結局、見切り発車です。

できるだけ、2、3日以内に更新していきたいのですが、途中で止まるかも（<|>、）

4日以上間が空くときは、活動報告でお知らせします。

久しぶりのコメディイですけど、読んだ人がコメディイのジャンルに入れてくださるのか、妙に不安な船出です。

お気づきのことなどありましたら、教えていただけると嬉しいです。明日も更新予定です。

第二話

なんで許嫁が小学生なんだよ！

俺は頭を掻き毟りながら、不承不承、玄関に向かった。扶養家族の分際は盛大に辛い。ドアを開けると、待っていたのは斜め向かいに住む女の子だった。

学年は確か、小学五年生だったよな。いまどき、ませた子も多い中で、小柄でおさげなもんだから、年より幼く見える。

「凜ちゃん、どうしたの？」

「雄介くんいる？」

雄介は俺の弟だ。二歳年下で、四月からF大に通っている。大学生に小学生が『くん』づけで呼んだりするんだが、凜は俺にも『惣介くん』だ。これは、凜の親が俺ら兄弟をそう呼ぶからである。小さい子どもは、親の呼び方をそのまま真似するからな。

呼び方が変わるの、中学に行って、部活とかしてからなんだろうなあと、俺は思ってる。べつにいまの呼び名も嫌じゃないし、構わないんだけど。

生まれたときから知ってるし、家族の延長みたいな存在だ。

「いま、バイトに行ってるよ」

「そっかあ。残念」

「どっかしたの？」

「算数の宿題、わかんないところあるから、教えてもらいたかったの」

そういえば雄介が、ときどき、凜の勉強みてるって言ってたな。

「俺でよかったら、みてあげようか？」

「いいの？」

「いいよ。どっ？」

教科書が出てくるのかと思えば、凜が手にしているのは小学五年生のドリルだった。なんとも懐かしい代物だ。裏返すと『しょう野りん』と小学生らしい文字で名前が書かれてある。まだ習っていない漢字はひらがなだから、庄野凜とは書けないらしい。

わからないという問題を指差されて、俺は唖った。時間と距離の応用問題だ。これは確かにちよつとややこしい。少なくとも、紙に図を書いてあげないと、わかるようには説明できない。

こんな玄関先で机なんかあるわけないし、やっかいだな。そんなことで思案していると、お袋がエプロンで手を拭きながら出てきた。

「惣介、どなただったの……あら、凜ちゃん。ああ、宿題しに来たのね。あいにく雄介は留守だけど、惣介でもどうにかなると思うし、上がって教えてもらいなさい」

「母さん、F大よりM大の方が偏差値、上なんだけど……」

「自分で問題を解くのと、ひとに教えるのは別よ。あんたは苦労もせずに理解しちゃうから、わからない気持ちかわからないのよ」

さすが母親。案外、鋭い。実際俺は、理解が早いと言われている。苦手な教科もないが、得意な教科もない。

雄介は苦労して理解する奴だから、一度身に着けた知識は大事に

するし、好き嫌いもはつきりしている。小学生に勉強を教えるのは、雄介みたいな奴の方が、向いてるのかもな。

わざとらしく肩をすぼめて見せてから、リビングに行こうとして、お袋に腕を掴まれた。

「四時から韓流ドラマがあるの。全力で見ないと命にかかわるから、自分の部屋で教えてあげてね」

それでこんな早い時間から、ひき肉をこねくり回していたのか。

「間違い起こしちゃ駄目よ」

相手は小学生だぞ。どんな間違いがあるって言うんだ。

「惣介くん、間違いってなに？ 算数？」

「……間違いなんか全然ないから、大丈夫だよ」

凜の頭をなでながら、俺は溜め息をついた。

凜は俺の部屋に入ると、もの珍しそうにキョロキョロした。そういえば、俺の部屋に入るのは初めてなんだ。親同士が懇意にしても、それぞれの子どもは年も離れているし、それが普通だろうけどな。

「写真がいっぱい」

壁のボードにはぎゅっちり写真が貼り付けてるし、机や本棚の空い

てる場所にはフレームに収まっている写真が所狭しと置いてあるから、写真まみれに見えるんだろう。これでも飾ってあるのは、ほんの一部なんだが。

「写真部だからね」

中学からさほど変わり映えがしない部屋は、ベッドと勉強机、あとは壁の本棚しかない。

納戸からコタツ机と座布団を持ってきてもいいんだが、どうせ宿題も二、三問教えればいいだけだろうし、面倒だ。俺は凜を勉強机に座らせて、雄介の部屋から椅子だけ持ってきた。隣に腰かけると、凜が愉しそうに笑った。

「家庭教師のコマーシャルみたい」

言われてみればそうだな。

「雄介に教えてもらおうときは違うの？」

「雄介くんは一階で教えてくれるよ」

そうだよな。そんなに頻繁でもないみたいだし、今日だってこんな問題じゃなきゃ玄関先だってかまわなかった。

凜がわからなかった問題は、だれでも躓く問題だ。1時間70分は130分。1.8キロメートルは1800メートル、と考えなければ解答できない。けれど、130分は何時間何分ですか？ という問題に慣れているから、分に戻す発想になれないんだろう。

凜は最初こそ首を傾げていたが、途中で「あ、そっか、わかった」と声を弾ませた。

理解力が高い方ではないが、集中力はあるみたいで助かった。

他の問題も同じ応用で解けるものだったから、宿題は案外あっさり、終わらせることができた。

「惣介くん、ありがとう」

「どういたしまして」

持ってきた荷物を手提げ鞆に詰めると、凜は机の上のフォトフレーム手に取って呟いた。

「このお姉さん、すごく綺麗」

「ああ、そうだね」

俺は頷いた。綺麗なのは間違いない。ただ、お姉さんではなくて、お兄さんだけど、小学生に説明するのも面倒なので細かい情報はスルーだ。

「惣介くんが撮ったの？」

「そうだよ。大学の後輩なんだ」

「へー、大学の女のひとって、みんなこんなに綺麗なの？　なんかアイドルみたい」

「その子はちょっと、特別だよ」

この写真は久しぶりに納得できるものだったから、自分でも気に入っている。一番、目につく場所に置いておきたいくらいには。

「凜ちゃん、おばさんまだ帰ってないの？」

「うん。今日は夜勤なんだって」

慣れていいのか、寂しさを表情に出さないのが、かえって痛々しい。一人っ子だから、家に帰っても誰もいないんだよな。

凜の母親は看護師で、夜、帰れない日もあるらしい。いや、今日は土曜日だ。親父さんはいないのかな。

「俺はこれから打ち上……」

打ち上げコンパと言いかけて口を噤んだ。小学生にはわかりにくい言葉だと思い、言い直す。

「えっと……飲み会に行くけど、しばらく下にいる？ お袋と韓流ドラマ観なきゃいけないけど」

「ううん、帰る」

一人で待つのは慣れてるのかな。そもそも一人でいるのが寂しいのか、羽を伸ばせて愉しいのかもわからないんだよ。俺だってかつては小学五年生だった時期があったはずんだけど、なにが出来て、なにが出来ないのか、さっぱり思い出せない。

俺の場合、これくらいのときは、ほとんどお袋が家にいたし、雄介もうるさくまとわりついてたからなあ。

「お父さんがもうすぐ帰ってくるから」

「そっか」

「飲み会ってなんか、お父さんみたい」

小学生からしたら、俺らのすることなんか父親と変わらないんだろうか。実際、来年就活が本格化して、うまく内定をもらえば、再来年は社会人だ。

やることなすこと、父親世代と同じになる。そうになると、お袋が言った婚約者も現実味を帯びて迫ってくるのかな。

俺はうんざりした気分で溜め息をついた。

「どうしたの？」

「ああ、いや、さっきうちのお袋が、許嫁がどうのこうのって言うてたんだ。まあ、冗談なんだろうけどね」

小学生相手に、なにを愚痴こぼしてんだろ、俺は。

「許嫁の話、まだ訊いてなかったの？」

「？ 凜ちゃん、なんで知ってたんの？」

「なんでって、惣介くんの許嫁、あたしだから……」

お袋が言ってた、ものすごく可愛い許嫁って……凜……？

そりゃ、可愛いだろう。小学生なら、たいていは。

俺がその場で卒倒しかけたことは、言うまでもない。

第二話

なんで許嫁が小学生なんだよ！（後書き）

第三話

学祭打ち上げコンパ

「お疲れ様〜」

「無事終わってよかったね」

「かんぱ〜い」

M大から一駅のこの居酒屋は、写真部がコンパでよく利用するチエーン店だ。

新入生歓迎コンパ、学祭打ち上げコンパ、卒業生追出しコンパ、この三つをここで行うのが慣例になっている。二階を貸し切ることができるので、気兼ねなく騒げるのだ。

今日参加しているのは、全部で十五人ほど。

四年は内定をもらっているか、大学院に残ることが決まっている者しか来ていないので、他のコンパに比べると出席率は低い。

「今年は本当に良かったよな。去年とは比べ物にならないくらいデキも日程も立派なものだったぞ」

自嘲気味に頭を掻いて苦笑するのは、隣に座っている篠崎部長だ。学祭は二、三年が中心になって運営するから、四年の部長は、去年メインで動いていた。

学祭で、写真部は個人写真の展示会とは別に、小さな写真をモザイク状に貼り合わせて巨大な名画を制作するのがここ数年、恒例になっているのだが、その名画が特に好評だった。

「佐々木が頑張ってくれたんで」

俺が名画の責任者をねぎらうと、向かいに座る佐々木は照れくさそうに首を振った。

「いや、写真が早い段階で集まったからできたんすよ。亜衣ちゃんのおかげです」

がっしりした体格で、色も黒いから熊みたいなやつなんだが、こいつは写真部の有望株だ。カメラの腕もさることながら、フォトシヨップをデザイナー並みに使いこなす必殺技を持っている。全然似合わないのに……。

どう見ても、ラグビーか柔道でもやらせた方が、向いてそうに見えるんだけどな。

「訊いたよ。ブログの女王が、モデル集めに協力してくれたそうだな」

ブログの女王、外村亜衣とむらあゐは、今日のコンパに来ている。写真部ではないが、学祭で多大な協力をしてくれたので、感謝の意を表して招待したというわけだ。

「ほんと。亜衣ちゃんには超感謝だよ。写真部は、足向けて寝られないよ」

亜衣に手を合わせて拝んでいるのは、小畑こはたさくらだ。文学部二年。飲み会好きのお祭り娘。明るく元気で、性格は少々辛辣ってところかな。

どうでもいいけど、いつまで拝んでいるんだか。あれじゃ亜衣は仏像扱いだ。

案の定、拝まれている本人は、盛大に嫌そうな顔をしている。

「さくらさん、拜まないでください。まだ生きてますから」

亜衣も似たような感想を抱いたのか、迷惑そうに頬を引きつらせていた。さくらは念仏でも唱えそうな勢いだっただもんな。

でも、なんだかんだ言っても仲は良いよ。亜衣も学年は一年だけど、さくらと同じ文学部だし。文学部の女子は、しょっちゅうつるんでるよな。よほど、気が合うんだろう。

「とにかく、今年は亜衣ちゃんのおかげで、写真部も勉強になったよ」

「え？ そうなんですか？」

意外そうに首を傾げる亜衣の顔は、正統派の美人だ。ちょっと欠点が見当たらない。陽気で人当たりもいいから写真部の中にも、ひそかに思いを寄せてる奴がいるんじゃないのかな。

「ブログで告知すれば、写真部の活動も周知できるし、賛同もしてもらえるんだってわかったからね」

「確かに去年までは思いつかなかったよな。学外のひとに、大々的に名画のモデルになってもらおうなんて」

腕を組んだ部長が、感心しきりで何度も頷いている。

名画を制作するのに、千枚近くの写真を貼り合わせるのだが、その一枚一枚にひとを入れる。言わば証明写真を繋ぎ合わせるような作業だ。

去年までは、ほとんどが学内の学生に頼み込んで撮影していたから、数を揃えるのが大変だった。搬入ぎりぎりまで部長や俺ら数人

が大学に泊まり込んで、最後は自分たちで撮り合いながら穴を埋めていく、地獄のような修羅場だったのだ。

ネットをいかに活用するか、この辺のことは、また来年の課題だな。けれど、布石を置けたのは大きな収穫だった。俺は感謝の気持ちで、亜衣のグラスにビールを注いだ。

「ところで部長、就活は終わったんでしょ？」

「おかげさんで」

「おめでとございます……って二回目なんですよね、お祝い言うの。春に内定もらったのに、就活続けてたってことは、納得してなかったんですか？」

部長がジョッキを傾けるのを、俺は久しぶりに見た気がした。実際、長い間、一緒に飲む機会がなかったんだよな。

「まあな。やっぱり、ちょっとでも理想に近いところを目指したかったし」

「耳が痛いですよ。俺もカウントダウンが始まっていますから」

「松浦、お前は話が来てんだろ？ 学祭の写真にどっかの出版社が興味を持ったって訊いてるぞ」

「ええ、ありがたい話なんですけど、あれはモデルの力ですからね……」

学祭で好評だった名画の取材に来ていた雑誌社が、ついでに見ていった写真展で、俺の写真に興味を持ってくれたというわけだ。で、その写真のモデルが……、

「瀬戸柚希か。そっぴや、あの子の正体訊いたときは、正直、腰が抜けるほど驚いたぞ」

部長は、少し離れた場所に座る柚希を眺めて、大きく唸ると首を傾げた。

「いまだに信じられん。あの絶世の美女が男とは……」

「同感です」

俺の部屋にある写真は、夏休みに写真部の後輩を写したものなんだが、その後輩が柚希だ。凜が「このお姉さん、凄く綺麗」と言った、あの写真である。

柚希が抱える問題は極めて複雑怪奇で、説明すると長くなるが、ひとことと言つとしたら、現在の柚希は女装の達人つてところかな。現に今日も、読者モデル並みに可愛らしくセンスのある着こなしを披露している……らしい。ここに着いた途端、女の子に囲まれて、そう騒がれていた。俺にはイマイチよくわからないが。

法学部の一年。亜衣とは中学からの同級生だ。

柚希は一時、悩みを抱え込んでいた時期があつて、相談に乗ったりしていたから、俺にとっては妹みたいな存在である。男だけ……。

「男にしとくの、勿体なさすぎだろ、あれは」

「部長には、長年連れ添った彼女がいるでしょうが」

「長年過ぎて、空気みたいだけどな」

確か、半同棲状態と訊いたような、訊いてないような……。

「そんなに長いんですか？」

「小中高、一緒だよ」

「それじゃ、幼なじみの域ですね」

「まあな。つきあい始めたのは中学に入ってからだけど」

お互い、成長過程を見届けた者同士の恋愛とは、いかなるものな
んだろう。正直、想像できない。空気みたいと言われても、それも
考えられないよ。

「結婚とか、考えるんですか？」

「考えないと言ったら、嘘になるな。他のだれかと……とは到底思
えないし、いずれ時期が来れば、あいつと一緒にになるだろ」

「小学校のときから、意識してました？」

「いや、からかって遊んでたな」

だよな。小学生で恋愛とか結婚なんて、考えないよな、普通。結
果として小学校からの同級生が結婚相手になることがあってもさ。

俺だって、小学生の時に、それなりに好きな女の子くらいはいた

はずだけど、いまは顔も思い出せないし。

凜に「許嫁って、あたしだから」と言われたあと、我に返った俺は、お袋に怒鳴り込もうとして、かろうじて止めた。韓流ドラマに相對しているお袋の邪魔をしたら、どんな祟りがあるかわかったもんじゃない。

あのひとは我が親ながら、正気の沙汰とは思えないようなところがあるからな。俺の忍耐力は、あの母親の所業が育んだものかもしれない。

俺はビールのジョッキを傾けながら、肩を落とした。

まさかあの婚約話が真剣なものじゃないだろうけど、凜の耳にも入ってるのが気になる。凜が知ってることは、向こうの親も絡んでるってことだよな。うーん、どうなってんだろ。

「どうかしたのか？ 元氣ないな」

部長が肩を組んで寄りかかってきた。からんでるのか酔ってるのか、どっちなんだろう。しかしこのひと、眼鏡がよく似合うよな。なんかこう、科学者っぽい印象だ。期待を裏切らない理学部だけど。

「部長、実は俺、婚約してるらしいんですよ」

「はあ？」

「その婚約相手っていうか、許嫁が小学生なんですよ」

「はあ〜〜？」

「俺、どっちかっていうと熟女の方が好きなんですけど、どうしたらいいんですかね？」

「……お前、良いとこの坊ちゃんが穏やかな人生送ってます、てな感じに見えたけど、隠れ波乱万丈タイプか？」

「なんですか、その隠れ肥満みたいなたえは」

「いやでも、本当にそう見えるしなあ……」

部長は、にやにやと人の悪い顔で、口の端に笑みを乗せた。面白がってるな、これは。

「でもな、別に、ややこしいことないだろ。嫌なら断ればいいだけじゃないか」

「うちの母親の恐怖を知らないから、そんなこと言えるんですよ」

「なんかよくわからんが、それなら、彼女を家に連れて帰ってみる。一発でご破算になるって」

「今、彼女いないんです」

「あれ？ 確かいたはずだろ？ 美大かどっかの……」

「春先に別れて、それから独り身です」

「すぐ作れよ。ちやつちやつと」

「無茶言わないで下さいよ。晩メシじゃあるまいし、すぐ作ったり

できません」

「根性が足りないんだよ、モテないわけでもないのに。とりあえず、いないなら誰か適当な子に頼め。同伴帰宅してくれってな。写真部の後輩でもいいんじゃない？ 綺麗どころが揃ってるじゃないか」

「うーん……………」

酔っぱらいの戯言とはいえ、なんか説得力あるなあ。しかし、同伴帰宅って正しい日本語なのか？ もうちょっと適切な言葉、ないわけ？ なんか響きが、いかがわしい気がするんだけど。

まあ、お袋の話なんか全然本気にしてないし、無視しとけばいいんだろうけど、凜をすでに巻き込んでるのが気になるんだよ。俺としては、とにかく、穏便に済ませたいわけだ。

しかし、酔ってる部長が寄りかかっていて、いいかげん重い。

「佐々木、佐々木」

俺は佐々木を手招きして呼び寄せると、つつかえ棒係を贈呈した。よし、身が軽くなったぞ。

佐々木は不服そうな顔をしていたが、お前のその有り余る筋肉を有効利用しないでどうするんだ。

俺は佐々木の肩を叩いて、言い訳するように席を立つと、トイレに向かうことにした。

第三話

学祭打ち上げコンパ（後書き）

第四話

大迷惑な源氏物語

ちよつと酔いを醒まして、二階に戻る。

宴もたけなわ。部屋中にアルコールと料理の匂いが充満し、酔っぱらった部員たちが、ふらふらと身体を揺らしていた。

これくらいの時間帯になると、元いた場所から各自、動き回り、気の合う者同士が、気の合う話に花を咲かせている。

出入り口の横では、さくらたちが固まっていた。姦かしましくも女の子四人かと思いきや、袖希が混じっていた。と言っても、女子会の雰囲気損ねるようなものでは、まったくくないな。両手に花という感じでもないし、完全に溶け込んでいるのが笑える。

「あ、副部长、こつちに座りませんか？」

さくらに呼ばれて、俺はその女子集団に突入することになった。

さくらに亜衣、袖希は前述のとおりだが、もう一人は松浦碧だ。まつつひあおい

碧は文学部二年。この中では、最も長い時間を共有した後輩だが、俺はいまだに碧のことがよくわからない。華奢で童顔。初対面のひとからは高校生に見られているだろう。鎖骨まで伸びた髪がくせ毛で、可愛いといえは可愛い子なんだが、天然でふわふわしていて、どこにピントが合っているのかわかりづらい。

そう、糸のない風船みたいな感じかな。まあ、そういうところも、この子の魅力なんだろうけど。

「何の話で盛り上がったの？」

「源氏物語です」

……それって、盛り上がるようなネタか？

「光源氏の本命は、藤壺か紫のどっちだろうって、現在、白熱したバトルを展開中なんです」

「はあ……？」

不覚だ。

あまり…というか、全然面白くないグループに紛れ込んでしまった。

「わたしは藤壺派で、亜衣ちゃんは紫派なんです。副部長はどっちですか？」

なんかこの、有無も言わさぬ強引な二者択一、誰かを思い出すぞ。しかし、こんな話題で派閥ができてんのか。政治家も真っ青だ。

源氏物語って言われても、ほとんど知らないんだよな。とはいえ、一応上級生として、知らぬ存じぬでは格好悪いか。えっと確か、男前の光源氏が、次々に女を食い散らかす話だったよな。

紫は、子どもの頃から手元に置いて育てた理想の妻で、藤壺は父親の後妻で、憧れの存在……で間違いないかな？

「柚希ちゃんは、どっちなわけ？」

この中では、一番冷静で常識的な感性を持ってそうな、柚希の意見を参考にさせてもらおう。似たようなことを言っておけば、場違いにはならないはずだ。

「源氏物語はちゃんと読んでないんですけど、紫に対する行為は、未成年者略取誘拐にあたる可能性があると思うんです」

ひええええええええ、源氏物語が、未成年者略取誘拐かよ。そうか。法学部だもんな。情緒もへったくれもないな。

「でも、藤壺は父親の後妻ですから、血が繋がっていないとはいえず、直系血族です。よって、父親が亡くなっても、婚姻関係を結ばません。民法第734条に違反します。したがって、藤壺、紫、どちらも賛同できません」

……………そうですね。そうですね、はい。…いや、なんか違うぞ！

眩暈がしてきた。

「そもそも、どうして最初の妻をもっと大切にしなかったのか、そこが理解できないんです。謎に満ちた物語ですね」

柚希の方が、よほど謎に満ちている。というか、酔っぱらってるんじゃないの、この子。派手な顔して、あんまり強くないんだよな、アルコールに。いや、顔は関係ないか。うーん、俺も酔っぱらってるのかな。

そういえば、光源氏の最初の妻ってだれだっけ？ 全然思い出せないなあ。

柚希の隣で、なぜか碧がそわそわと落ち着かない様子で、ビールを口に運んでいる。どうしたんだろう。

しかし、次々に無差別恋愛を繰り返すのが、源氏物語だろう？ 最初の妻を愛でて終わったら、それはもう、源氏物語とは呼べないのではないか？

残念ながら、柚希の意見はまったく参考にならなかった。この理知的な後輩が戦力外とは、きわめて遺憾だ。しかたがないので、俺

は碧に視線を向けた。

「碧ちゃんは？」

先に碧の意見を訊けばよかった。碧は文学部だから、あんな奇想天外な意見にはならないだろう。

「あたしがもし光源氏だったら、相手が何人いても、そのときはそれぞれ、本気だったと思うんです」

「なるほど……」

俺は感心して頷いた。が、女の子が源氏物語を読んで、自分も光源氏だったら……なんて考えるものなの？

「でも現代人の価値観からいえば、平気で浮気するような男は、生きる価値なんかありません」

おっかねー……。関西人がよく言う「死んだらええのに」って勢いかな。だけど、まあ、そうだよな。二股三股どころじゃないんだから。

でもなんか、話をしているうちに、少しずつ源氏物語の片鱗を思い出してきた。昔、疑問に思ったことがあるんだ。いろんな相手に魅力を感じて、衝動を抑えきれない、というのは理解できる。俺も男だし。

ただ、その人数の多さには、首を傾げざるを得ないんだよな。御簾越しに、文に焚き付けられた香の香りに惹かれて……って、それだけでそこまでするか？ いくらそうということが認められてた時代とはいえ、大変なエネルギーだぞ。

俺が思うに、光源氏は病気だったんじゃないのかな。多情症とかそんな精神疾患、ありそうじゃない？

作者の紫式部は、そんなひとが身近にいたんじゃないのかな。そのひとをモデルにした可能性はある気がするなあ。

「でも、何度読んでも、よくわからないんです。その時代に生まれて、その時代の文化の中で育って、読んでみたかった物語ですね」

なんか、気合いのはいった意見だ。そついや碧は、酔っぱらうと歴女になるんだった。源氏物語も歴女の守備範囲なのかな。

「俺も、それぞれに真剣だったという意見は納得できるよ。男は馬鹿だから、その時々夢中になって、他のことは忘れてしまっし」

「おお、W松浦で揃えてきましたか」

さくらの台詞に、みんな吹き出した。俺と碧は苗字が同じ松浦だから、こんな指摘になるわけだ。

「でもやっぱり、藤壺じゃないかな。罪を背負ってでも望んだのは、藤壺だけみたいだし」

「ということは、副部長はマザコンですね」

「はあ？ 藤壺を選ぶとマザコンなの？」

「当然です」

「紫を選んでたら、なんて言われてたの？」

「もちろんロリコンです」

なんじゃそりゃ。

「……源氏物語についての討論だよね？ これ」

「副部長がマザコンかロリコンか、調査してたに決まってるじゃないですか」

なにを今更、と続いたさくらの言葉に、俺は後輩たちからかわれていたのだと気がついた。

「やられた」

こめかみを抑える俺に、亜衣が笑いながら訊いてきた。

「……で、小学生の許嫁がいるって、本当なんですか？」

「……なんでそれを……？」

「さつき部長さんに、そんな話をしてたんでしょ？ 伝言ゲームみたいに戻ってきましたよ」

うーん……。部屋も広くはないし、声も絞ってなかったから、当然と言えば当然か。しかしこの話、ここにいる写真部全員に知れ渡ったということか。頭が痛いよ。

「わたし、副部長さんは柚希が本命かと思ってたんですけど……」

「亜衣ちゃん、君ねえ……」

「わたしも。瀬戸さんが副部長のモデルするって訊いたときは、つきり口説き落とす魂胆かと思っただもん」

「さくらちゃんまで、なに言ってるんだよ」

柚希にモデルを頼んだときは、もう柚希が男だとわかっていたから、そんな下心は毛頭ありませんでした！

「あたしも思っただ」

とどめは碧か。『ブルータス、お前もか』と呟いたジュリアスシーザーの気持ちだが、いまようやくわかったよ。

「碧さんまで……」

がつくり脱力してるのは、俺じゃなくて柚希だ。

「でもあたし、訊いたことあったでしょ。副部長とつきあってるの？ っつて」

「事実無根なんですから、忘れてください」

「一時、うちのブログでも話題になってたんですよ」

「亜衣ちゃんのブログに？ なんて？」

俺の問いかけに、心底愉しそうな様子の亜衣が説明してくれた。

「柚希がうちのブログにコメント書き込むとき、ハンドルネームが

『ユズ』なんで、読むひとが読んだらすぐわかるんです。で、『写真部の先輩とふたりでカラオケに行った』って書いたことがあって、みんなが推察してたんです。柚希のデートの相手は誰だろうって」

「すごい。瀬戸さん、やっぱり人気あるんだ」

「碧さん、怒るか妬くかしてください。無邪気に喜んでないで……」

「なんで？ モテるのカッコイイじゃん。それに、カラオケ行ったデートの相手、副部长でしょ。そのときモデル引き受けることになった、って言ってたじゃない。怒ったり妬いたりするようなことなの？」

「……いえ……」

柚希が溜め息をついた。

亜衣やさくらに同じことを言われてもまるで意に介さないのに、碧の言動にだけ敏感に反応しているのは、現在このふたりがつきあっているからだ。

揉めるだけ揉めて、学祭の最終日にまとまったから、まだつきあい始めて一週間の初々しいカップルである。どう見ても男女交際しているような絵柄には見えないけど。

碧に男だとばれてひと悶着の後、つきあうようになってから、柚希は自分の性別を周囲に隠していない。だから、写真部の部員は全員、柚希が男だということも碧とつきあっていることも知っている。柚希と碧のこんなやりとりも、珍しい光景ではなかった。

さくらの弁を借りるなら、世にも面白いカップルだ。

「副部长、マザコンはともかく、小学生は犯罪ですよ。ヘンタイで

すよ。人間失格ですよ。もう二十歳過ぎてるんですから、事件になったら全国に名前が公表されますよ」

さくらはときどき、刃物のように鋭いことを言う。

「……………肝に銘じるよ」

「松浦さん、熟女好きは個人の嗜好ですけど、不倫は犯罪ですよ」

柚希はときどき、……………以下同文。

「……………重ねて肝に銘じるよ」

家ではお袋にホモや不能の疑いをかけられ、コンパでは後輩にマザコンのお墨付きを頂戴し、ロリコンや不倫は犯罪だと釘を刺された。

……………なんて一日だ。

第四話

大迷惑な源氏物語（後書き）

第五話

婚約解消を申告するぞ

「母さん」

翌日、俺はお袋の顔を見るなり、眉を吊り上げた。

昨夜遅く帰ったときには、家族はみんな寝静まっていたし、朝、遅く起きたら親父と雄介はすでに出かけていた。

そんなわけで、俺の憤りの矛先はひたすらお袋だ。

「昨日の変な話は、冗談なんだろうね」

朝飯か昼飯かわからないような食事をかきこみながら、俺はお袋に抗議する。食べながらでは迫力はないが。

どうでもいいけど、この味噌汁、熱すぎるって。

「冗談なわけじゃないじゃない。本当よ」

「そんなあっさり言われても……」

「母さんだって、あんたと凜ちゃんが本当に結婚できるなんて思っ
てないわよ。でも、向こうの気持ちもわかるしねえ」

「ちょっと待って。じゃあ、許嫁の話を持って来たのは、向こうの
親なの？」

「そうよ」

「なんでまた？」

「事情があるのよ。うちも、老い先短い身の上なんだから、安心したいのは一緒だし」

そこまで年寄りじゃねーだろーが。
都合がいい時だけ老け込んだ芝居するよな、このひと。

それにしても、凜の親は、なんだって近所の大学生と自分の娘を
婚約させようなんて思ったのかな？

凜が俺と結婚したい、とでも言ったのかな。いや、絶対違うな。
会うことも少ないし、昨日だって普通だったぞ。

俺より雄介の方がまだ……あ、そうか。雄介がいるじゃないか。

「母さん、俺じゃなくて雄介の方がいいじゃん。年も少しは近くな
るし、勉強みてあげたりしてるんだろ？俺よりよっぽど、凜ちゃ
んだって懐いてるんじゃないの？」

「雄介じゃ、意味ないわよ。あんたじゃないと」

なんで？

このあとなんかその疑問をぶつけてみたが、お袋ははぐらかす
ばかりで、答えようとしなかった。

「とにかく、結婚相手は自分で探すから、ちゃんと断ってよ。凜ち
やんだって可哀想だろ」

「彼女、いないんですよ」

「彼女はいなくても、好きな相手は……」

「いるの?」

いないけど、ここでないと言えば、話は戻ってしまうよなあ。

「いるいる」

「信じられないわ。家に連れて来たら信じるかもしれないけど」

適当に言つたと、薄々気づいたらしい。やはり鋭い。

「まあ、いいじゃない。凜ちゃんまだ若いんだし、いますぐどうこうなんて話じゃないんだから。気休めみたいなもんだと思いなさいよ」

気休めというより、気苦労でしかないんだけど……。だいたい、若いと言える年齢にすら達してないんだぞ、凜は。

変な婚約話は、どう転がしても暗礁に乗り上げてしまったようだ。

「ご馳走様」

俺は溜め息をつくとき、お袋に話をするのを諦めて、自分の部屋へ戻った。

第五話

婚約解消を申告するぞ（後書き）

部屋のベッドに腰かけて、俺は溜め息をついた。

どうもわからないことだらけだ。

だが、どうやらお袋は、なにがなんでも婚約……といった意気込みはなさそうだ。ならば、放っておいても問題はないのかな。

俺はカメラケースからカメラを取り出した。

大学に入ってから購入した一眼レフだ。デジタルカメラはどんな性能がよくなっていくが、いまの俺にはこのカメラで充分だ。

最近、まともな写真を撮ってなかった。カメラの電源を入れて、再生モードを起動する。液晶に表示された写真はどれも、学祭を撮影した記念写真だ。気持ちが入ってない写真だから、パソコンに転送もしないでそのままにしていたのだけど……。

俺はノートパソコンを立ちあげた。とりあえずデータを転送して、メモリを空にしておくことにした。

写真を撮りたい気持ちはある。

けれどもいまは、心を揺さぶられる被写体に巡り合えない。

柚希を写したときは、心地よく高揚した。そして満足できるものが撮れた。いまは潮が引いたみたいに、空虚な気分だ。

「才能、ないんだろうなあ……」

写したい被写体が絞りきれないのも、方向を見極められない原因だ。人物、風景……、なにが自分を一番惹きつけるのか、いまだにわからないのが、もどかしい。

撮っても、撮っても目標が定まらないことこそ、才能がない証拠

のように思える。

佐々木や碧はちゃんと絞っているのが、少し悔しい。写真に限らず、なにをしてもある程度のレベルには達するが、際立って才能を発揮することはない。

勉強も運動も、苦勞せず及第点は取れるが、一番にはなれなかった。

自分で自分が物足りない。

爆発力は、どうすれば身に付くんだらう。

ふいに机の上に置いていた携帯の、着信音が鳴った。

開くと表示されている名前は、高校時代の友人、林原だ。

「林原？」

『よお、元気か？』

「先週、会ったばかりだろ」

『そうだったよな。M大祭、お疲れさん』

林原と最後に会ったのは、学祭だった。林原は、M大から車で二十分くらい離れたところにある美大で、油絵を専攻している。俺たちの高校から美大に行くのは十年にひとり、いるかないかの変わり種だ。

「いや、こちらこそ、来てくれてサンキユ」

『評判の名画は見逃せなかったからな。結構な人数引きつれて行っちまって、迷惑かけなかったかな』

「全然。佐々木はお前が美大の油彩専攻だつて訊いて、恐縮してたけどな」

『ああ、あの、ゴツくて可愛い撮り鉄くんか。名画の責任者だつたっけ？』

佐々木は鉄道マニアの撮り鉄だ。写真展の作品も電車の写真だつたから、林原にはそう説明した。それを覚えていたらしい。

「そうだけど、佐々木って可愛いか？」

『可愛いだろ。お前の言うこと、なんでも鵜呑みにしちゃうじゃないか』

「そりゃ、後輩だからな」

『いまどき、サークルの後輩が、そうそう上級生の言うこと訊いたりしないぞ』

へえ、そうかな。美大生はアクが強いだけじゃないのかな。

「それより、なんか用事だった？」

『ああ。実はあの作品が行き詰つてんだよ。今夜、泊まりに来てくれない？』

なんだ、そういうことか。

林原はいま、なんとかという展覧会に向けて、油絵を制作中なのだが、俺がその絵のモデルになっているのだ。

「いいよ」

『悪いな。何時くらいに来れる？』

「そうだな。七時でいいか？」

『オツケー、助かるよ。じゃ、待ってるから』

携帯を切って、俺はパソコンの画面に視線を戻した。たいした数でもなかった画像は、とつくに取り込み作業が終わっていた。

林原の絵は、あれからどんな変化を遂げているのだろうか。
俺は、少しばかり浮足立った。

第六話

美大の友人 1 (後書き)

築何十年だかは不明だが、いまどき、映画でも見かけないような昭和の木造住宅。そこは代々男子美大生がルームシェアしている広い敷地の一軒家だ。

雨戸が木製の引き戸だったり、縁側があったり、渡り廊下があったり、洗面所がタイル貼りだったり、俺たちの世代には、この家のそこかしこがカルチャーショックだ。

いろんな時代に何度モリフォームしたのか、部分的に現代的な所もあって、家自体がパッチワークのようだ。土間まであるから、最初に建てられたのは戦前なんじゃないのかな。

子どもの頃から住み慣れた家は、シンクに食洗機が備わっていて、床暖房があり、窓はペアガラスだ。

祖父母の家も似たようなものだから、こんな古い木造住宅を体験したことがない。なのはどうして、懐かしいと思うのだろうか。

そして俺は、なぜかこの家が妙に気に入っている。

林原のモデルを引き受けたのも、半分はこの家が目当てだった。ここに来るときは、必ずカメラを持参するのだから、我ながら正直すぎて呆れる。

ルームシェアは、それぞれ専攻で部屋が割り振られている。

一階は林原と日本画。二階は彫刻がひとりとデザインがふたりだ。油絵と日本画は部屋で絵を描くから、でかいキャンバスを二階に運べないのだ。

林原の部屋のふすまを開けた途端、テレピンオイルの匂いに蒸せそうになった。

石油ストーブで部屋が暖まっているから、余計に匂いが強烈なよ

うだ。

「よお、急に無理いつて、悪かったな」

「家にも退屈だから、いいよ」

林原の油絵は、最後に見たときより、かなり進んでいた。

俺には、その絵がなぜ行き詰っているのか、さっぱりわからない。

「もう、完成じゃないのか？」

「まだだよ。弾けた感覚がないから」

林原はよく、こんなことを言う。絵の具を重ねて重ねて、仕上がってはいくんだけど、霧もやがかかっているときはまだ、筆を置けないそう。あるとき突然、頭の中で弾けたような感覚が起こって、そこから急に自分の表現したかった絵が、形になっていくのだという。

写真は、シャッターを押せばそれ以上できることはない。

シャッターを押すまでの知識と感性がモノを言う。

俺には絵心がないから、林原の言っていることが、すべては理解できないけど、妙に羨ましい気分になる。

「すぐ描き始める？」

絵の中の俺は、上半身裸で背中を向けている。すぐ描くなら、脱がなきゃいけないから訊いたのだ。

「いや。ちょっとしてからにする」

このちよつとしてからが、三十分のときもあれば、三時間のときもある。ならば、二時間半後に来ればよかつたんじゃないかと訊くと、筆で描いてないときも気持ちで描いているから必要な時間だぞうだ。

絵と写真はまったく違うけど、そういう感覚は共感できるから、甘んじて受け入れてはいるけどさ。

いつも座る場所に胡坐を組んで腰を下ろす。

林原が淹れてくれたコーヒーを受け取った。淹れてくれたといっても、カップにインスタントコーヒーを適当に放り込んで、石油ストーブの上に乗せたやかんからお湯を注いだだけのものなだけ。ジーンズに着古したトレーナー。そして元の色がわからないほどの絵の具で汚れたエプロン。これが、この部屋で絵を描くときの、林原のスタイルだ。

高校のときは、俺と似たようなカテゴリーに入る外見だった。やや長身で細身。目立って違反することはしないが、優等生でもない、どこにでもいる普通の高校生ってカテゴリーだ。

だが、大学に来てから林原は男臭さを増した。体型に変化はないが、攻撃的な印象になったのかも。

俺は相変わらず守りの印象が強いんだよな。身近な友人の成長や変化は、頼もしくもあり、寂しくもある。そしてなにより、羨ましい。

しばらく、お互いの近況を報告し合っている、ふいに林原が躊躇いがちに「あいな」と改まった口調になった。

「こないだ、武智^{たけち}から電話がかかってきた」

武智も林原同様、高校の同級生だ。高校時代は三人でよくつるんでいたが、武智は地方の大学に進学したので、最近は疎遠になって

いた。

「へえ、あいつ、元気にしてた？」

「元気は元気だったけど、大学、中退したって」

「ええ？　なんで？」

あと一年ちよつとで卒業できるのに、どうしたんだろう。

「あのさ、これは武智からお前に言ってくれて頼まれたんだけど……」

林原は言いにくそうに言葉を詰まらせると、煙草に火を点けた。

「…驚くなよ」

「なんだよ」

「武智、性同一性障害だったんだって」

「は？」

「家族と縁切られて、いま女装して、その手の店で働いてるそうだし……」

俺は言葉を失った。

ストープの上のやかんが、しゅんしゅんと音を立てていた。林原が吐く煙草の煙が揺れるのを見て、はっと我に返った。

「……でも、でもあいつ、そんなそぶり、全然なかったぞ。むしろ、俺らより男らしかったじゃないか」

どうにか、気を取り直して疑問をぶつける。林原の口調からは冗談とも思えなかった。それでも、冗談だよと笑い飛ばしてほしい気持ちでいっぱいだった。

「うん。でも、高校のとき、男としてふるまうのが辛かったって」

そうだったのか。全然、気がつかなかった。

運動神経が良くて、体格も男らしいやつだったけど……。でも考えたら、武智は誰ともつきあったことなかったし、その手の話に混ざることなかったな。

硬派だと女の子からモテたのに、なんで、どうして、と頭の中がグルグルする。

俺は頭を掻き毟って、ぬるくなったコーヒーを喉に流し込んだ。

こんなときは、酒でも飲みたいよ。でもこのあと、モデルのお勤めがあるしなあ。

正直、武智が女装しても全然似合わない。不気味になるばかりだろう。俺は溜め息をついて肩を落とした。

「あいつ、本当はお前に訊いてもらいたかったみたいなんだよ」

俺もそれは疑問だ。武智は林原よりむしろ、俺と気が合ってたはずなのに。

「惣介は頭が固いから、言いだせなかったみたいだぜ」

「うーん、俺って頭、固いかな？」

「そうだな。なんていうか、まっすぐだろ。常識的だし」

常識的っていったって、そんなのだけれどもそうなんじゃないのか。

「でもまあ、俺より林原の方が告白しやすかったんなら、そうかもな」

林原はおおらかだ。

美大に行ってるだけあって、柔軟性に富んでるし。なんでも受け止めてくれそうな、度量の広さを感じるよ。大雑把ともいうけど。だけど俺だって、高校時代の友人からカミングアウトされたからって、「うわ、気持ち悪い」なんてことを思いつもりは、毛頭ないんだけどな。理解はできなくても、話を聞いてやって、励ますくらいならできるのに。

「林原が訊いてやったんなら、それでいいさ。武智、どんな感じだった？」

「やっと楽になったって言ってたよ」

「そうか。なら、よかった。あいつもこれからが大変だろうな。しかし、案外多いんだな」

「なにが？」

「性同一性障害。写真部の後輩にもひとりいるんだよ」

「マジで？」

「うん」

「もしかして、あいつか？ 名画の責任者の……？」

「佐々木じゃないよ」

武智とイメージが重なるから、そう思ったのかな。武智は佐々木ほど熊じゃないのに。

「毎日、女装して大学来てる」

「すごいな。問題とか起きないわけ？」

「うん。ていうか、女にしか見えないんだよ、その子の場合」

「へえ。じゃあ、手術済みとか？」

「手術はしてない。夏に話したときは、来年、手術して戸籍も変更するって言ってたけど、やめるみたいだ」

「なんで？」

「彼女ができたから」

「は？ 性同一性障害で、女装してて、彼女できんの？」

林原は短くなった煙草を灰皿に押し付けると、驚いた声をあげた。

「相当、すったもんだしてたけどな」

「そりゃそうだろ。しかし、そんなややこしいやつに彼女ができて、なんで俺には回ってこないんだよ」

嘆く気持ちはわからなくない。俺も最近はシングルだし。

「なあ、女にしか見えないって、どんな感じ？」

「どんなと訊かれても、難しいな。あ、お前、見たことあるよ」

「いつ？ 学祭？」

「ああ」

頷く俺に、林原は首を傾げた。

「俺、写真部の部員、紹介してもらったの、あいつだけだぞ」

「直接会ったんじゃないよ。写真展、来ただろ」

「そりゃもちろん」

「俺の写真、覚えてる？」

「そりゃもちろん……お、おい、まさか……？」

「あの写真のモデルが、その子だよ」

「マジかよ、ありえねえって」

林原は目を丸くして呆然としている。

「だよな。俺もまだ、たまに混乱してるよ」

「てつきりプロのモデルか、グラビアアイドルかと思った」

「学生がどうやってプロのモデルを雇えるんだよ」

俺は苦笑して肩を竦めた。

「あれだけ可愛い子をあんな風に写して、惚れてしまいそうにならないのか？」

「可愛くても男だぞ。どうやって惚れるんだ？」

「惣介、お前、本当にまつすぐだな。潔癖症か？」

「なに言ってるんだよ。普通だろ」

「うーん、あ、そうだ。日本画の女子が話してたことであめしてるよ」

「なにそれ？」

「もし世界に人間が自分を含めて三人だけだったら、という過程なんだ」

「ふうん。女の子が好きそいな話だな」

「ひとりには醜い老女。もうひよりは美少年。どちらかを恋愛相手に

選ばなきゃ死ぬとしたら、どっちを選ぶ？」

「？ 老女だろ？ 美少年を選ぶ奴なんかいるのか？」

「オレは美少年だぞ」

「ええ？ なんで？ 友達ならわかるけど、恋愛相手だろ？」

恋愛の対象を選ぶなら、年齢や容姿や性格以前に、まずは女でなければ話にならないではないか。もちろん、世の中に同性愛者がいることは知っているが、それはごく稀な人たちだけのことであって、俺らみたいな人間とは、縁のない話だと思っていた。

「オレは綺麗な方がいい。ちなみに、日本画の女子でこの質問をしたんだって。老女を老人に、美少年を美少女に替えて。そしたら、美少女を選ぶ子の方が、はるかに多かつたらしいぞ」

「マジで？ あ、でも、美大だからじゃないの？」

美を追求する学生なら、美しさに比重を置くのかな。

「日本画の女子は、美大の中でも、かなりまともなんだぞ」

じゃあ他の専攻はどうなんだよ、怖ろしいな。

「でもそう思うなら、経済学部で訊いてみる」

「全員、俺と同じだと思うけどな……」

「どうかな。さてと、そろそろ、描いてもいいか？」

「俺はいつでもいいぞ」

「じゃ、脱いで」

「襲うなよ」

さっきまでの話が話なので、俺はふざけて言った。

「もうちょっと美少年だったらよかったんだけど、惜しいな」

林原もノリがいい。

「失礼だな。俺のどこが美少年じゃないんだよ」

切り返しながらも、可笑しくて笑いが止まらない。

「惣介は美少年というより、好青年だから、色気はないんだよな」

林原は小首を傾げながら、ぼそりと呟いた。

不本意だと文句を言いながら、このセリフを篠崎部長や佐々木が訊いたら、大笑いしながら頷くんじやないかと思えて、ちよつと虚しかった。

一端、キャンバスに向かうと、林原の集中力は半端じゃなかった。ひとが変わったように真剣な表情になる。

絵はすでに、かなり描き込んであるので、モデルといっても最初の頃のような、長い時間動けないわけではなく、イメージを再確認しているようだった。

しばらく俺の背中を睨みつけていたかと思うと、キャンバスに向かつて唸ってみたりする。なかなか筆は進まないようだった。

そんなことを繰り返しているうち、林原は、突然描き始めた。

モデルは休憩していい、しばらくしたらまた頼むと言われたから、俺は服を着て、絵の後ろに回った。

林原の絵は、具象とも抽象ともいえるような、曖昧な表現だ。だからこそ、描いている最中なのに、モデルを続ける必要がないのだろう。

絵の良し悪しはわからないから、口は出さない。

だけど、煙草をくわえながら筆を持つ横顔は、俺が知る林原の姿の中で、一番輝いている顔だ。

俺は、持って来たカメラで、その姿を収めた。

集中した林原が、シャッター音に反応しないのは、いつものことだった。この家が火事になっても気がつかないのではないか、と思うような情熱だ。

俺にないのは、こんな激しさなんだろうな。男として、置いて行かれていくような寂しさを感じた。

武智はどうだったんだろう。

俺や林原と一緒にいて、疎外感を味わってきたんだろうか。

俺は、高校時代の精悍だった武智を思い出した。もう二度と、あの姿で会えることはないのかな。

そう思うと、大切な友人をひとり失ったような寂寥感が込み上げた。

第七話

美大の友人 2 (後書き)

第八話

写真部の非凡なる後輩たち

ゼミが終わって部室に行くと、最近おなじみのメンバーが机を囲んでいた。

佐々木や碧、それに柚希は、もともと写真部の活動も熱心だったけど、さくらはこのところ、意外に頑張っている。

さくらは去年、学祭の名画を手伝っているうちに写真部に入部したのだが、そのあとはコンパくらいにしか顔を出していなかった。今年は個人写真も出品したし、ちょっとやる気になってるのかな。

「うわっ、副部長、なんか顔、汚くないですか？」

さくらに容赦のない指摘をされて、俺は自分の顔をなでた。口の上と顎に少しざらついた感触がある。

「そっぴや、三日…いや、四日くらい、髭、剃ってないな」

「やだな。横着しないでくださいよ。似合わないんだから」

無精ひげが似合う奴なんか……いるか。林原なんかちょっとそんな感じだし、佐々木も似合いそうだな。でも、佐々木が髭を伸ばしたら、おっさんになりそうだ。

俺はもともと髭が薄いから、毎日剃ったりはしないんだけど、さすがに四日目になると目立ってくるか。

「昨日は友達の家泊まったから、剃れなかったんだよ」

「部長のアパートっすか？」

佐々木の問いに、俺は首を振った。

「いや、美大の友達。ああ、そうだ。佐々木によろしくって言うてたぞ。あいつ、お前のこと、気に入ったみたいだな」

「油絵の林原さん？」

「ああ」

「泊まりにいたりするほど、仲良かったんすか？」

「高校の同級生だからな。でも昨日は遊びに行ったんじゃなくて、絵のモデルに行ったんだ」

「へー。松浦さんがモデル……。想像できるような、出来ないような。油絵のモデルって、脱ぐんすか？」

「脱ぐよ」

「きゃー、エロいー!」

さくらがふざけてはしゃいだ。この子は、いちいち反応が激しいよな。

「期待を裏切って悪いけど、上半身だけだから」

「なんだ。つまんない」

「つまんなくて、悪かったね。林原が言うには、俺の背中主張し

過ぎなくて、いま描いてる絵にちょうどいいらしいよ」

部員が一齐に、どっと笑った。

そんなに面白かったか？ いまの。

「こんにちは。あ、なんか盛り上がってる」

ノックの音と共に、部室のドアから入ってきたのは亜衣だ。最近よく、写真部の部室を訪れる。

さくらと碧は、いっそのこと写真部に入ったらいいのに、と説得しているようだが、写真は携帯でしか撮らないからと、入部は断っている。

「いつもお邪魔してるんで、お菓子持ってきました」

見れば、亜衣の手には紙袋があった。

「亜衣ちゃんの手作りクッキー？」

碧が尋ねると、亜衣は驚いたように頷いた。

「どうしてわかるんですか？」

「昨日、亜衣ちゃんのブログに、最近お菓子作りにはまってる、って書いてあったし。クッキーを試行錯誤中なんですよ？」

「そうなんです。ブログってやりだすと楽しいんですけど、私生活がバレバレになりますね」

さくらと碧がお茶の準備を始めた。最近、写真部の部室は、こんな感じで穏やかだ。めばしい活動予定もないから、休憩中だな。

写真部の部室は、広さが二十畳くらいだろうか。壁のコルクボードには、部員が撮った写真が重なり合うように貼りつけてある。

奥まった一角が暗室になっていて、白黒のフィルム写真を現像することができる。水道もあって、何年か前の卒業生が湯沸かしポットを置いていったので、部室とは名ばかりのお茶会ルームのような場所になっていた。

もともと、写真を撮るときに部室で撮ることは稀だし、佐々木や碧は鉄道だの景色を撮るから、本当に活動しているときは外に出て行ってる。

ここに集まっているときは、情報交換だったり充電してるときだから、この状況も当然ではあるのだ。

この部室が写真部らしい活気で溢れるのは、学祭の準備のときくらいだ。

「さつき、なんか盛り上がってました？」

「そうなの。訊いてよ、亜衣ちゃん。副部長がね、ヌードモデルしてるんだって」

「ええ？　すごい………んですか、それ？」

「さくらちゃん君の言葉じゃ説明不足だろ。美大の友達に頼まれてモデルになってるんだよ」

「ああ、そうだったんですか」

「副部長の背中が頼りなくて、ちょうどいいんだって」

「頼りなくて、なんて言われてないって。主張し過ぎなくて、だよ」

「どっちでも一緒じゃん」

さくらがぼそりと呟くと、また一斉に笑い転げた。どうもこないだから、笑われてばかりだ。

「でも、副部長さんって、脱いでもあんまり色気とかなさそうですよね」

「男に色気なんかあるの？」

「ありますよ。もちろん」

「うーん、そういえば、林原にも言われたよ。『惣介は美少年と言っより好青年だから、色気はない』って」

「完璧な表現ですね。さすが美大生」

部員全員に大きく頷かれて、さすがに俺は落ち込みそうになった。

第八話

写真部の非凡なる後輩たち（後書き）

正直、毎日の更新が苦しめです。

話もそうなんですけど、サブタイトルが（笑）

このシーンは、まだ途中なので、明日も更新します。

第九話

碧の胸の触り心地

「色気云々でいうと、この中じゃ碧だよな」

「あ、納得です」

「あたし？　なんで？」

さくらの意見に亜衣が同意するのを見て、碧自身、驚いていたが、俺もびつくりした。いまいる女の子の中では、一番、幼いイメージがあるからだ。

佐々木も腑に落ちない様子で、クツキーを齧りながら首を傾げている。

「胸がそそるんだよね、碧って」

「わかります」

「見たことあるの？」

「泊まりに来てもらったとき、下着姿を披露してもらいました」

柚希がコーヒートを吹き出しそうになって咳き込んだ。

「瀬戸さん、大丈夫？」

碧が驚いて柚希に顔を寄せている。柚希がどうして吹き出したか、わかってないんだろうな、あれは。

碧はちゃんと言われないとわからないタイプだし、柚希は言いたいことも言わずに飲み込んでしまう性格だ。このふたり、冷静に考えると相性悪いんじゃないのか？

「はい、一応……」

しかし、柚希も案外余裕がないな。恋人が同性の後輩の家に泊まりに行ったり下着姿を見せるくらい、どうってことないと思うんだけど。

「触ったことある？」

「いえ、それはさすがに」

さくらと亜衣は、柚希の拳動不審な様子なんか、気にもしてないらしい。

「触ってみて、触ってみて」

「碧先輩、触ってもいいですか？」

「べつに、いいけど……」

碧の隣で、柚希が複雑きわまりない顔をしている。もし俺が碧の彼氏だったとしても、この状況に置かれたらこんな顔をするしかないんだろうな。

「うわあ、ほんとだ。なんか凄く色っぽい触り心地」

「よ、よ」

さくらが自分の胸のように、自慢げに頷いている。

「ええ？　なんで？　みんなと違うの、あたし？」

「違いますよ。ほら」

亜衣が碧の手を取って自分の胸に触らせた。高校のときはクラスの女子がよくこんなことしてたけど、間近で見るのは初めてだ。俺も佐々木も、眼中にないか、男としてカウントされてないんだろうか。

「亜衣ちゃんの方が大きいし、色気あるよ」

「大きさはなくて触り心地だよ。わたしと碧の方がわかるのかな」

さくらが亜衣と交代した。碧は自分とさくらを触り比べて首を傾げている。

ふと佐々木に視線を移すと、時刻表を顔の前で握りしめて黙り込んでいた。どんな顔をしているのかは時刻表で隠れて見えないけど、耳が真っ赤になっていた。

そういえばこいつは、高校が男子校だったっけ。こんな女の子の戯れ程度でも、興奮したりするんだろうか。ゴツイ身体に似合わず純情なやつだ。

「うーん、違うけど、単なる個人差じゃないの？」

碧はまだ首を傾げていた。

「自分じゃわかんないのかな。ね、瀬戸さん、違うよね」

さくらが柚希の両手を取って、自分と碧の胸に押し当てた。

「あ」

「あ」

「あ」

部室に一瞬、なんとも言えない沈黙が流れた。

「こ、小畑さん……なにするんですかっ！」

慌てて手を引いた柚希が、激しく動揺している。普段あまり取り乱したりしないから、こんな様子は珍しい。

「……あ、いま、ガチで忘れてた。ごめん、ごめん」

さくらが舌を出して謝罪しているけど、さほど反省しているようには見えない。

俺は思わず派手に吹き出した。

「松浦さんっ」

柚希が唇を尖らせて睨みつけてくるけど、でもちよっと笑えるよなあ。普通の男だったらラッキーって感じだけど、柚希には違うみたいだ。

「悪い、悪い。でもなんていうか…大変だな。同情するよ」

性別を忘れられるとは、面白すぎる。腹が痛いよ。

柚希は、まだなにか言いたそうにむくれた顔を向けてくる。男とわかっていても、こんな表情をみると、やっぱり可愛いと思ってしまっただな。

「あの…すみません、碧さん……」

柚希が碧に頭を下げている。不可抗力とはいえ、彼女の目の前で他の女の子の胸に触ってしまったからだろうけど、真面目だ。

「大丈夫？ セクハラされたんだから、ちゃんとさくらに怒った方がいいよ」

「はあ……。あの、碧さん、怒ってません？」

「なんであたしが瀬戸さんに怒るの？」

「いえ、なんでもないです……」

このふたりは恋人同士なんだよな。妙に会話がちぐはぐなんだけど、柚希が性同一性障害だったからなのか、碧の破天荒な個性に起因しているのか、どっちなんだろう。

「ほんと、ごめんって。うっかりしてた」

自分のせいとはいえ、胸に触られた女の子が触った男に謝罪するのも珍しい。

「さくらさん。しょうがないですよ。柚希のこの有り様じゃ、忘れ
ます」

亜衣が涙を流さんばかりに笑いながら、さくらをフォローする。

「そっだよねえ」

「みんなはまだ短いからいいけど、わたしなんか六年も袖希を女として扱ってましたから、今更、性転換されても……って感じですよ」

性転換って、亜衣からしたら、袖希が手術を踏みとどまったのは、性転換になるのか？ なんかややこしいな。

俺は、袖希の顔を見つめた。

存在そのものが神秘的って感じなんだけど、話してみれば、わりと普通で、むしろ地味な性格の大学生だったりする。ただ、中学の時に性同一性障害と診断されたのに、女の子と恋愛して、それでも見た目が男っぽくならないのは、どうなってるんだろう、とは思っ。女装に関しては、恋人の碧が「せっかく可愛いんだから」と推奨しているらしいのだが……。

武智もこんな外見に生まれてくれば、苦労することもなかったのかな。

うーん、普通の俺には、普通じゃない人たちの平和がどこにあるのかなんて、わかるはずもないか。

「松浦さん？」

あんまりじろじろ見ていたら、袖希が不審そうにしていた。

「いや、俺って、まっすぐで常識的かな？」

「は？」

「昨日友人にそう言われたのを思い出したんだ」

「松浦さんは、まっすぐに常識的だと思いますよ。なにか疑問の余地でもあるんですか？」

「なんかさ、世界にもし、自分を含めて三人しかいなかったら……って過程の話なんだって」

俺は昨日、林原から訊いたことを、みんなに話した。

「そんな選択で迷うひといるの？」

さくらが首を傾げた。

「美少女だよね」

「ですよね」

さくらと亜衣が頷き合った。

「ええ？ 本当に？」

「副部長、まさか醜い老女なんですか？」

「いやだって、そりゃあ……あ、碧ちゃんは？」

「美少女です」

うーん……いや待て。碧は柚希を女だと思っていたときから不穩

な恋心を抱いていたから、参考にはならないんだ。

「佐々木は？」

「そうっすねー。難しいですけど、どっちかと言えば、老女……かなあ」

そんなに悩むことなのか？ 佐々木でも？

「副部长、筋金入りのマザコンですね」

「老女も熟女に入るの？」

「熟女の賞味期限って、何歳までなんですか？」

さくらと碧と亜衣の追い討ちに、俺は叫び出しそうになった。

俺の方が普通じゃないのかーッ！

第九話

碧の胸の触り心地（後書き）

皆既月食のため、遅い時間の更新です。9時半くらいまでは雨が降ってたんですが、11時前に晴れて赤い月を見られました。

いかがわしいサブタイトルになってしまいましたが、コメディイ度の高いお話だと思ってます。私的には。部室の話は楽しんで書いてます。恋を感じるときはシリアスだったのに、同じメンバーでコメディイーを書く暴挙ですが（笑）

第十話

凜を迎えに行つて、それから……

「ただいまー」

その日、俺が帰宅したのは、夜七時半を過ぎた頃だった。

「惣介、いいときに帰ってきてくれたわ。いまから車で文化会館に行つてきて」

お袋がパタパタと玄関に出てきた。

「文化会館？ 図書館の隣の？」

「そう、そう」

「なんで？」

「庄野さん、仕事が終われないらしいの。凜ちゃん、大人が迎えに行かないと帰れないのよ」

「なんかよくわからないけど、文化会館に凜ちゃんを迎えに行けばいいんだな」

「そうなの。お願い」

「わかった。行ってくる」

「あ、ちょっと待って」

お袋は慌ててリビングに引き返すと、小さなメモを手に戻ってきた。

「これ、凜ちゃんがいま持ってる携帯の番号。もし、会館まで行って見つからなかったら、電話してみてください」

「わかった」

メモを受け取って、俺は玄関のドアノブに手をかけた。

「安全運転で帰ってきてよ」

「わかってるって」

お袋の心配性も久しぶりだな。よその子どもを車に乗せて帰るんだから、無理もないか。

俺は苦笑してポケットから車のキーを取り出した。

文化会館の駐車場に車を停めて、会館の入り口の前まで来ると、凜が俺に気がついて駆け寄ってきた。

「惣介くん」

嬉しそうな笑顔で首に飛びついてくる。

「来てくれてありがとう」

「俺が来るの、わかってたの？」

「おばさんから電話してもらったから」

ジャージ姿の凧は、見慣れない髪型をしていた。

括っているわけでもないし、どうなっているんだらう。毛先が全然見えない。いつもは額ひたいに下りている前髪も上がってるし。おでこが見えている顔もなんだか新鮮で、思わず見入った。

文化会館のホールに、凧と同じような髪型の女の子が何人かいるのが見えた。

体操やシンクロナイズトの女子選手が、こんなぺたりした髪型でいるのを、テレビで見た気がするけど……。

「凧ちゃん、今日のこれ、なんなの？」

「月曜日と木曜日はバレエだよ」

習い事の迎えに来たのか、俺は。お袋は最低限の説明すらしてくれなかったんだな。凧がバレエを習ってるのも、初耳だぞ。

「先生と友達に挨拶してくる」

「凧ちゃん、俺も行くよ」

別に凧が言えば必要ないと思うけど、万が一にも、怪しい若い男が教え子を連れ去ったと誤解されても困る。

俺は足早に凧の背中を追いかけた。先生とおぼしきひとの前まで行き、頭を下げる。

「いつも凧がお世話になってます。庄野さんが来られなかったので代わりに迎えに来ました。斜向はすむかいに住んでる松浦です」

「あら、わざわざご丁寧に。凜ちゃんをよろしくお願いします。気を付けて帰ってください」

「はい。ではお先に失礼します」

バレエの先生だけあって、首やら肩が恐ろしく細いな。なに食べて生きてるんだろう。柚希や碧も痩せてるけど、種類が違う感じが。俺はもう一度軽く頭を下げて、凜に視線を戻した。凜はなんだかぼんやりしている。

「凜ちゃん？」

どうしたんだろう。俺は凜の頬に指を滑らせた。弾かれたように、凜は飛び上がった。

「惣介くんっ」

「あ、ごめん。びつくりさせた？ ぼうつとしてるから熱でもあるのかと思っただけど……」

なんか顔、ちょっと赤いかな。

「大丈夫？」

額に手のひらを当ててみる。熱はないみたいだな。顔が赤いのは、練習の後だからかな。

「だ、大丈夫だから。本当になんでもないから」

凜の顔は、また赤くなつたみたいだった。

逃げ出すように先を歩く凜の後ろ姿を、俺はぼんやり眺めた。後頭部で丸くまとめた黒髪が可愛かった。駐車場の頼りない外灯に照らされたうなじが、やけに女らしく目に移った。

助手席に座った凜は、少しうなだれてぼそりと呟いた。

「ごめんなさい」

「え?」

「せっかく迎えに来てもらったのに、なんか……」

さっき振り払うような態度を取ったことを、気にしているのだからか。

「なんとも思っていないよ」

「ほんと?」

「本当だよ。それより、いつもこんな時間までバレエの練習、あるの?」

「うん。それに来月、発表会だから」

「なにか踊るの?」

「中国」

「中国？」

「くるみ割り人形の中国」

「そうか。大変なんだね」

くるみ割り人形の中国と訊いても、なんのことやらさっぱりわからなかった。大学生でも小学生よりわからないことがあるんだな。あたりまえか。

しばらく車を走らせると、大通りに面した信号に引っかかった。間が悪い。この信号、長いんだよな。うんざりした気分を持て余し、隣に視線を移した。

凜は靴を脱いだ片足を座席に乗せあげて、つま先を触っていた。バレエのタイツは、履いたまま爪先の部分だけ出せるようになってるらしい。以前つきあってた彼女が履いてたパンストなんかとは、ずいぶん形状が違うようだ。

なにをしているんだろうと見つめていたら、足の指は白いテープまみれだった。凜はそのテープを外そうとしていた。

「凜ちゃんっ」

「え？ あ、あの、ゴミは持って帰るよ。車、汚したりしないから」

「そうじゃなくて、怪我してるのか？」

「ううん。マメは出来かけてるけど怪我はしてないよ。トウシューズでマメがつぶれると痛いからテーピングしてるの」

テーピング……。なんだそうか、びっくりした。
サッカーや野球のテーピングと、似たようなものかな。とにかく、
怪我じゃないならよかった。

ほっとした心地で、凧の仕草を見守った。慣れた手つきで、足の
指からテープを外していく姿に、俺は胸がざわめいた。真剣な横顔
を、ジャージに包まれた華奢な身体を、バレエのタイツから露出し
たテーピングの足を、カメラに収めたい衝動に駆られた。

「惣介くん、信号、青だよ」

凧の声と後ろの車が鳴らすクラクションが同時に聞こえて、俺は
我に返った。この信号は、こんなに短かったらどうかと、舌打ちし
たい気分だった。

もっと凧を、見つめていたかった。
いま押し寄せた衝動が、大切なもののようにも、後ろめたいもの
のようにも思えて、俺はひどく戸惑った。

家に着くと、車の音に気付いたのか、凧の母親が慌ただしく出て
きた。

「惣介くん、ごめんね。本当に助かったわ、ありがとう。急患が入
って看護師が足りなくなっただから、凧を迎えに行く時間に帰れなく
て」

「いえ、大丈夫です」

恐縮する凧の母親に、俺は訊きたいことが山程あったけど、凧の
いるところでは訊きにくいよな。こんなに近くに住んでいるのに、

会えそうで会えない人だから困る。

晩飯を済ませて風呂から上がり、首に掛けたタオルで髪を拭きながら、俺は机の上のメモ用紙を見つめた。お袋に手渡された小さなメモだ。

携帯の番号が記されている。

凧が小学生であることを考えれば、この番号の携帯が凧のものとは思えない。お袋が言ったのは『いま凧ちゃんが持つてる携帯』だった。

習い事するときだけ、だれかの携帯を借りているのかな。だれかのといつても、家族に決まっている。でも、父親にしても母親にしても、仕事をしているのに一日携帯を手放すのは不便だろう。とすると、この番号の携帯は凧のもので、普段は持ち歩かないけど、習い事るときは持っていく、と考えていいんじゃないのかな。

俺は散々迷った挙句、メモの番号を携帯のアドレスに登録した。

「もしかしたら、またこんなことがあるかもしれないし……」

だれもいない自分の部屋で言い訳しながら、俺はなんだか、ひどく悪いことをしている気分だった。

第十話

凜を迎えに行つて、それから……（後書き）

心が動くときの話は、書いていて落ち着かない気持ちになります。本当はもっと書き込みたかったのですが、恋愛度数を下げたかったのであっさりめに。11歳の子ども相手に本気になられても……てなもんですが（笑）

活動報告に今後の予定を書きました。

第十一話

元カノのアパートから朝帰り

煙草の匂いで、俺は目が覚めた。

目覚めて最初に目に入った物は、元カノのアパートの天井だった。

「おはよ。起こしちゃった？」

「いや……」

俺は派手に欠伸をかましながら、首を振った。

昨夜抱いたひとが、すでに服を身に着けていたので、俺は少し寂しい気持ちになった。暖房で暖められた部屋でも、裸のままでは寒い。ベッドのわきに置いてある服を拾い上げて、思い切り腕を伸ばした。背中がギクシャクする。

眠れないほど知らないベッドでもなく、ぐっすり眠れるほど慣れたベッドでもない。いま朝の挨拶をしてくれたひとに、少し似ている。

「なにか、食べる？」

「いいよ。忙しいの？」

煙草を口にくわえながら、スケッチにパステルを走らせている背中に見覚えがあった。中に見覚えがあった。

「忙しいわけじゃないんだけど、次のラフのラフかな」

春までつきあっていた彼女は、林原と同じ美大で助手をしている。

別れていた間に誕生日が過ぎたから、いま二十九だ。

一度別れて偶然再会してから、『こんな呼び出し』はたまにある。お互い、嫌いで別れたわけじゃないし、好きな相手もないから、なんとなく、だ。おかしな関係だと思っただ。

「中江さん、彼氏、できないの？」

つきあっていたときは、八歳年上でも名前で呼び捨てにしていたが、いまは苗字で呼んでいる。そんな呼び方にも、最近では慣れてきた。

「できないわねえ。私、自分を優先しちゃうからなあ」

「そこがカッコいいのに。みんな見る目ないな」

「より戻したいくらい？」

「いや、それは……」

俺は、スケッチに視線を落としたままの中江の背中に、違和感を覚えた。

「俺、もうここに来ない方がいいんじゃないの？」

「どうして？」

「俺とこんなこと続けてたら、彼氏、作りにくいだよ」

「惣介って、優しいのか残酷なのか、わからないようなところ、あるよ」

残酷？ 俺が？ なんて？ 首を傾げて不思議そうな顔をしていると、中江はくすりと笑った。

「あなた、だれにでも優しいでしょ。それが恋人にとっては微妙なのよ。私はもう彼女じゃないから気楽に癒してもらってるけど」

中江の言い方だと、別れた原因は俺にあるみたいだ。少なくとも、彼女はそう言いたいのかな。

「そうねえ、たとえば、私が妊娠したって言ったら、惣介は責任とって結婚するでしょ」

俺はぎょつとして中江の顔を見つめた。

「馬鹿ね、たとえばよ。妊娠なんかしてないわ」

彼女がなにを言いたいのか測り兼ねたが、俺はとりあえず頷いた。

「結婚したら、浮気もせずに一生、仲良く過ごす努力を続けそうじゃない。でもそれが私じゃなくて他の誰かでも、同じだろうなあって思うのよ。惣介の残酷さはそこかな」

俺には、中江の言葉の意味が、よくわからなかった。普通、自分のせいで妊娠させたら結婚するだろうし、結婚したら幸せにしたいと願うものなんじゃないのかな。

そののどろが残酷なのだろう。そんなことを言いだしたら、世の中のできちゃった結婚は、すべて残酷ということになる。

けれど俺は、ふいに思い出した。相手がだれでも同じだろうと、

お袋にも言われたことを。

俺は、お袋と元カノに同じ評価を下されてるのか？

最近、俺が思う『普通』はことごとく否定されている気がするよ。

「恋愛はね、理性が働いてるうちは、まだまだ本気じゃないのよ」

「俺、中江さんに本気じゃなかった？」

「そうね。まだ余力がありそうだったわよ。でも私も自分勝手だし、本気で来られたらつきあえなかったから、合わせてもらえてありがたかったわ」

けれど、結局別れてるんだよな。よくわからないよ。なにが良かったのか、なにが悪かったのかも。

しばらくとりとめのないことを話したり、スケッチするのを眺めて過ごした。

帰りかけたとき、机の端に文庫本が置いてあるのに気がついた。なんの気なしに手に取って表紙を見る。

「へえ、源氏物語なんか読んでるんだ」

俺が以前、古典対策で読んで途中で挫折した源氏物語は、もっと分厚いハードカバーだった。こんな読みやすい文庫本もあったのか。

「読むなら持って帰る？ もう読み終わったからいいわよ」

「うーん、読み切る自信、ないなあ」

俺は、打ち上げコンパで後輩にからかわれたときのことを思い出した。

「中江さん、光源氏の最初の妻ってだれ？」

「葵の上よ」

「葵の上……あおいのうえ……あおい……碧……あ、そうか。碧ちゃんか」

柚希はあのととき、正々堂々と惚気ていたのか。いや、口説いていたのかな。もしくは、プロポーズだったりして。いくらなんでも、それは飛躍し過ぎか。

あのととき碧は、そわそわと落ち着かない様子でビールを口に運んでいたよな。あれは、恥ずかしがっていたのか。

「柚希ちゃん、やることが男前だなあ……」

思い出し笑いをかみ殺しながら、俺はこっそり呟いた。

中江のアパートを出て、書店で就活のための資料を探していたら、マナーモードにしていた携帯が振動した。
開いて確認すると、柚希からのメールだった。

『碧さんの誕生日、ご存じないですか？』

愛想も素っ気もないメールはいつものことだが、内容に首を傾げながら返信する。

『わからないな。さくらちゃんなら知ってるんじゃないの？』

『碧さんに口止めされてるみたいで、教えてもらえないんです。写真部の名簿に誕生日の項目、なかったですか？』

返信したら間を置かずにレスが来る。電話した方がよかつたなと思いつながら、あとひと言くらいだし、そのまま返信を続けた。

『なかつた。学年と学部と、あとは住所と電話番号、メールアドレスくらいだし。もしわかつたら連絡するよ』

『ありがとうございます。お願いします』

つきあってる彼女の誕生日がわからなくて、困っているらしい。なんで？ と訊くのは野暮だよな。誕生日を碧と一緒に過ごしたいのだから。微笑ましくて嬉しくなる。

このふたりのことは、いろいろ心配した分、うまくいってほしい。しかし、四月に袖希が入部して、夏休みにはかなり仲良かったよな。十一月も末になるのに、まだ、誕生日を知らなかったのかな。九月か十月だったら、来年まで待つしかないのに、どうするんだろう。

そういえば、凜の誕生日はいつかな。

誕生日を過ぎていたら、十一歳。まだなら十歳か。もし誕生日が近いなら、記念写真を撮ってあげる、と提案するのはどうだろう。不自然ではないはずだ。テーマパークにでも連れて行ってあげたら喜ぶんじゃないかな。写真を撮っても自然な流れだし。

……………て、ちょっと待て。なんか変なことを考えてるぞ、俺。これではまるで、彼女とデートをしたがっているみたいじゃない

か。

凜は近所の子どもで、被写体にしたいただけだろう。

おかしい……。

なんか、変だ。

柚希をモデルにしたときは、普通に頼み込んだよな。おかしい感
情は着いてこなかった。いや、そうか。柚希は写真部の後輩だから、
モデルになってくれと言いやすかった。

だけど、凜はそれができないから、ややこしいことになっている
んだ。

俺はようやく、納得した。納得した気になった。

欲求不満かな……。

いま、元カノのアパートから朝帰りだということを、俺はすっかり
失念していた。

第十一話

元カノのアパートから朝帰り（後書き）

年の差カップルを書こうと思ったとき、最初は男を年下にする
しか考えませんでした。でも、そうするとまた、恋愛度数が上が
つて、エロい展開になってしまいそう……との判断で男を年上にし
ました。この場面とか、熟女好き云々は、最初の妄想の名残り、ま
たいな感じですよ（笑）

第十二話

年の差カップルとか碧とか

ゼミの空き時間を、俺は部室で自習に充てていた。図書館に行ってもよかったのだが、やはりここの方が落ち着く。

バレエの迎えに行ったときから、ふと気がつけば、俺は凜に思考を巡らせている。

車の中で見た凜の姿が目焼き付いて、なかなか消えない。

俺は、どうしても凜を写したいらしいのだ。そのことを凜に伝える手段がなくて困っている。

単なる近所の子どもなら、いくらでも頼める。だけど、その相手が許嫁となると、下手に近づけない。少なくとも、自分から故意に近づくのはまずいだろうし。

婚約話さえなかったら、簡単に頼めたのに、困ったもんだ。うーん……。あの婚約話、やっぱりどうにかできないかな。

円満な婚約解消。それが俺の思い描くハッピーエンドだ。

扉にノックの音がした。俺の返事も待たずに飛び込んできたのは、碧だった。

「あれ？ 副部長、ひとりですか？」

「碧ちゃんこそ、珍しくひとり？」

柚希かさくらと一緒に部室に来ることが多かったから、碧がひとりでいるのを久しぶりに見た。タートルネックのセーターにファーがついたブーツ姿をみて、もう季節はすっかり冬だよなと改めて感

じた。

「忘れ物を取りに来たんです。学生課に鍵をもらいに行ったら、なかったから。副部長、こんな時間に、なにしてるんですか？」

「レポートだよ」

「全然、はかどってないでしょ」

「なんでわかるの？」

「資料もパソコンも出してないし」

「実は、物思いに耽ってた」

「悩みでもあるんですか？」

「悩み、とまではいかないけど、結婚について考えてた」

「就活すつ飛ばして、婚活ですか？」

碧は呆れたように、口をぽかんと開けた。

「いや、そんな具体的なものじゃないよ」

「はあ…？」

「碧ちゃん、結婚について考える？」

「あたし、いまのところ、結婚する気はないんです」

「柚希ちゃんとも?」

「瀬戸さんとはつきあいはじめたばかりですよ。結婚とかそんなこと、考える段階じゃありません。でも、瀬戸さんなら、なおさら結婚なんてないです」

「どうして?」

「一応かろうじてなんとかギリギリ男女なんだし、戸籍的には問題はないだろう。」

「瀬戸さん、恋愛はあたしが初めてだし、それで結婚とか、傲慢じゃないですか?」

「傲慢?」

「なんか、想像と全然違う言葉が碧の口から出てきた。てっきり、結婚式で花嫁衣装をどっちが着ればいいのかわからない、なんて次元の心配かと思っただのに。」

「可能性を奪うみたいな感じ、しません?」

「可能性? うーん、そうかな?」

「遠い先の時間を拘束する約束でしょ、結婚つて。なんか残酷な感じがするんですよ」

残酷というキーワードがまた飛び出した。

女の子が結婚について語るときに、なぜ『残酷』と表現するのか、

理解に苦しむよ。結婚は女の夢じゃないわけ？

「あたし、最初につきあったひとが、十三歳年上だったんです」

「十三歳？ ずいぶん年上だね。どんなひと？」

俺と凜が十歳差だから、さらに年が離れている。俺は興味が湧いて、身を乗り出した。

「ラジオのDJなんです。中三のとき、受験勉強しながらラジオ聴いて、このひとの声、甘くて低くてかっこいいなあって思ったのがきっかけで……」

「へえ、そうだったんだ」

なかなか華やかな出会いだったんだな。ラジオのDJといったら、中学生から見たら、芸能人みたいなもんだろうに。おっかけが高じて……って感じかな。ラジオの収録は案外近所だったり公開してたりするもんな。

「結局、最終的に別れちゃったんですけど、別れなかったら、瀬戸さんと出会っても、つきあわなかったと思うんです」

「なるほどね……」

一年のとき、碧は短いサイクルで彼氏が交代していたが、交際の時期が重なったことはなかった。正直で素直な性格だ。二股できるほど器用でもなければ、平気で嘘つくほど薄情でもないのだ。

「瀬戸さんにとってあたしはそのひとに該当するとしたら、この先

もある気がするし……」

うーん、そうかなあ。柚希に関してそんな心配は無用のように思えたけど、碧の言いたいことは理解できる。

自分の存在が、相手の新しい出会いを妨げるなら躊躇するに違いない。経験値に差があると、どうしても遠慮する気持ちが湧くのだろう。

「カミングアウトしてから、女の子にモテてるんです」

「柚希ちゃん？」

「はい。女だと思われていたときは、友達でも近寄りがたいと敬遠されてたんですけど……」

女としては完璧すぎて友人扱いするのも気おくれするけど、男なら女装も程よい欠陥になるってことか。女の子の心理も面白い。

「佐々木みたいに男くさい奴よりいいのかな」

「そういう子も多いみたいですよ」

「あの美貌で女の子にモテたら、まるで光源氏だね、葵の上」

「……………気づいてました？」

碧は、ばつの悪そうな顔で苦笑する。

「あのときは気づかなかったんだ。源氏物語をちゃんと読んだわけじゃなかったから」

「気づかないままでいて欲しかったな」

「女の子の立場から、あんな求愛ダンスは嬉しいの？」

「求愛ダンスって瀬戸さんは鶴じゃないんですけど……。でも、嬉しいですよ」

「そうか。なるほど、なるほど……」

「口説きたい相手でもいるんですか？」

「いや。彼女もいないし」

「許嫁はいるのに？」

話の風向きが怪しくなってきた。俺は慌てて会話を戻した。

「柚希ちゃんは、君だけで充分なんじゃない？」

「どうしてですか？」

「彼女、一途で不器用そうだから」

「彼女じゃなくて、彼なんですけど……」

「あ……」

俺たちは顔を見合わせて笑った。

「そういえば、君ら、つきあう前と変わらないね」

俺はふと思い出して、以前から疑問に思っていたことを口にした。

「変わらないって、なにがですか？」

「お互いの呼び方とか。恋人同士なのに、瀬戸さん碧さんのままだろ」

「ええ、まあ…」

「ふたりのときは違うの？」

「いえ、いつも通りですよ」

「柚希ちゃんは、ふたりきりでも敬語で話してるの？」

「そうですけど、なにか変ですか？」

「いやだって、恋人同士なら名前で呼び捨てにするのが普通かなって」

「なんでですか？」

うーん、言われてみればなんでだろ。そんなこと、考えてみたこともなかった。

ただなんとなく、それが普通とってた、としか言いようがない。あえて説明するとしたら、はじめ、かな。もしくは周囲に、この子は自分の彼女だぞとアピールしたいのかもしれない。

「副部長、自分が考えてることを、普通で標準だと思ってるでしょ」
「違う?」

「確かに副部長の考え方って一般的に多いけど、普通とか常識って、ひとそれぞれじゃないですか?」

「……………」

碧は案外するどい発言をする。訊けばそうかも、と頷ける説得力もある。だけどそれなら、普通とはなんだろう。俺はますます混乱してきた。

「ところで碧ちゃん、君、誕生日いつ?」

「瀬戸さんに頼まれたんですか?」

「『碧さんの誕生日、いつか知りませんか?』とは訊かれたけど、訊きだしてくれとは頼まれてないよ」

「誕生日は企業秘密です」

「彼氏に教えられないような誕生日なの?」

「まあ、そうですね。あたし、子どもの頃から自分の誕生日嫌いだったんで」

「わかった。敬老の日だろ」

「ノーコメント」

碧はなかなかガードが固い。

第十二話

年の差カップルとか碧とか（後書き）

第十三話 部長の事情

碧と話をして、気がついたことがある。

年齢差が同じでも、出会った時期が早いほど、異常性が増すということだ。

たとえば十歳差で考えてみても、五十歳と四十歳ならどうってことないのに、二十歳と十歳なら、変態の領域だ。

碧なんかは十三歳年上だけど、十五歳のときの二十八歳の彼氏と訊けば、恋愛としてはあり得る範囲だもんな。

それにしても、こんなことを考えてる時点で、俺は相当やばいんじゃないのかな。

凜を写したい気持ちが高じて、ストーカーになつたりしないよな。ただ、とにかく一度、凜の親に訊いてみたい。許嫁の話がどんな理由から来ているのかと。たとえば、親同士と一緒に飲んだときに盛り上がって、冗談交じりに口約束した、なんて経緯なら振り回される必要はないわけだし。

そんなことをとりとめもなく考えながら、俺は学生課にずらりと張り出された就職情報を眺めていた。もっと焦らないといけないんだけど、どこでもいいから内定をもらいたい、とはまだ思えないんだ。

できれば興味のある三つか四つに絞って攻めたい。こんな悠長な野望は、数か月後には木っ端微塵になるんだろうか。

「松浦」

名前を呼ばれて振り返ると、篠崎部長だった。

「部長、大学、来てたんですか？」

すでに内定をもらっている部長はこの時期、単位の取得も終わって、卒論に忙しいはずだ。てっきり、アパートに引きこもっていると
思っていた。

「部屋より大学の方が集中できるんだよ。図書館の自習室に行ったり、カフェで半日陣取ったりしてる」

「なら、たまには、部室にも顔だしてくださいよ」

「わかった、わかった。近いうちに必ず行くよ。それより松浦、昼飯、食った？」

「いえ、まだです」

「学食、行くか？」

「そうですね、お供します」

昼時はいつもちゆうじも込んでいる学食だが、いまは少し時間がずれているから空席が目立つ。

「このA定食、食うのもあと少しだと思うと、なんか寂しいな」

「ははは。俺はあと、一年食わなきゃいけないのかって気分ですけどね」

「来年の今頃になったらわかるって」

そんなもんかな。まずはないけど飽きるよな。ほとんど変わりが映えないし。

白身魚のフライを齧りながら、俺は部長に就活のことを尋ねた。

「部長、就職先を選ぶときに、なにを最重要視しました？」

「まあ、ありきたりだけど、仕事内容だな」

「やっぱりそこですよな」

「だが、それは入ってから動かされる可能性もあるだろ。開発希望してても営業に移動するかもしれねえし、広報かもしれねえし」

俺は頷いた。

「だから、どこの部署に異動になってもやれるところを選びたいよ」

「それは確かに言ってますね」

「あとは転勤がないとこだな」

「転勤？」

「俺の場合、彼女が短大卒でもう、社会人だし」

俺は少なからず驚いた。コンパで彼女との結婚について訊いたとき、それほど積極的な姿勢は感じられなかった。彼女と結婚することを視野に入れて就活していたとは、恐れ入った。

「仕事内容に加えて、場所と転勤がない事なんて条件に入れて、よく内定にこぎつけましたね」

それだけ優秀なひとなんだろうけど、凄いよ。

「理数系はまだ、職種も多いからな」

部長は箸を置いて、お湯みたいに薄い学食のお茶を、喉に流し込んだ。

「俺はむしろ、枠を作ってもらえて有難かった。選ぶ会社が多すぎたら、迷ってきりがなかっただろうし。だから、彼女が先に社会人になってくれててよかったんだ。もし俺が先に社会人になっていて、彼女が俺を追いかけてくるって言ったら、絶対反対しただろうしさ」

「なんでですか？」

順番が逆になるだけで、同じことなんじゃないのかな。

「俺が原因で仕事を選んだりして振り回すのは、避けたかった」

これを優しさとして受け取るか身勝手と受け取るかは、意見が分かれそうだな。

彼女が就職するときには自由に選べたけど、部長は制限された中で職場を選んだわけだ。彼女からしたら、精神的に負担もあったんじゃないかな。ここまでしてもらったから、絶対このひとと結婚しなきゃいけないのだとプレッシャーになるかもしれないし。

「そっぴいやお前、例の許嫁はどうなった？」

急に話を振られて、俺は口の中のサラダが喉に詰まるかと思った。

「どうもなるわけありませんよ。小学生なんですから」

「でもお前のことだから、気にはしてるんだろ」

「ええ、なんとか白紙にしてもらいたいと思ってます」

「いつそ、育つの待って結婚しちまえばいいんじゃないか？ 親が決めた相手ってのは、相性がいいんだろっし、松浦はだれが相手でも問題なさそうだぞ」

「部長、無茶言わないでください」

「冗談だって」

俺はこっさり嘆息した。また相手がだれでも同じ、といった判定をいただいた。

それほどモテるわけではないけど、二の足を踏まれるほど見苦しいわけでもない。それなりに恋愛経験もあるのに、なんでこんな評価ばかり受けるのかな。

「俺って、そんなに恋愛に無気力に見えますか？」

「え？」

「最近よく言われるんですよ。だれとつきあっても同じだろう的なこと」

「ああ、なるほど。松浦は彼女を特別視しないからな」

「特別視？」

「たとえば、友達と約束してる日に、彼女が遊びに行きたいって言うてきても断るだろ？」

「そりゃ、先に約束してれば断りますよ」

「お前は友達でも後輩でも彼女でも、同じ扱いしかしそうにないんだよ」

「ええ」

「そんなはずはない……と思う。」

「だけど、俺にそんなつもりがなくても、相手は部長と同じ受け止め方をしていたのかもしれない。」

「全力でだれかを好きになったこと、あつただろうか。他のなにより優先したいひとに出会ったことがあつただろうか。」

「思い返しても記憶にないことに、俺はショックを受けた。」

「松浦は、恋愛より結婚に向いてんじゃないか？」

「恋愛の集大成でしょ、結婚は」

「俺の彼女は、恋愛と結婚は別だって言うぞ」

「そうなんですか？」

部長に頷かれて、俺は考え込んだ。男と女では結婚観が違うのかな。女の方が結婚に対して冷静なのかもしれない。

高校のときの恋愛は、夢の中のようなときめきだった。二十歳を過ぎて、就職や将来が見えてくると、恋愛も現実を帯びてくる。相手の欠点を受け入れながら、時間の流れを考える。

実際、大学で出会い、卒業して結婚したカップルは多かった。

だがいまの俺には、恋愛と結婚を切り離して考えることもできないし、結婚と就職活動を連動させて動かすこともできない。

とりあえず願うは、部長が長年連れ添った彼女に、振られませんようにってことだ。

第十三話

部長の事情（後書き）

写真部の男共は、どうも頼りないというか弱腰な感じですよ。柚希も含めて。

唯一、部長だけは少くくしただけ、俺様キャラのつもりだったんですけど、なんか怪しい気配がしてきました。

第十四話

佐々木の正体、発覚

十二月に入り、急に寒さが本格的になった。

その日、ゼミが終わって部屋に行くと、佐々木と柚希がすでに来ていた。部屋がすっかり暖まっているので、どちらかはかなり前に来ていたのだろう。

「早いな、ふたりとも」

「こんにちは」

「俺は今日、午後からの選択授業が休講になったんすよ」

先に来ていたのは、佐々木のような。

しばらくすると、碧とさくらが到着した。

「碧さん、その髪、どうしたんですか？」

柚希が問いかける声に反応して、俺の視線も碧の頭に移動した。確かにちよっと、はねている。いや、広がっている？

「風とか静電気とかの猛攻撃で、パリパリする」

「束ねたほうがよくないですか？」

「括ってたけど強風でぐちゃぐちゃになって、さくらに外されちゃった」

「小畑さん、碧さんをいじめないでください」

「だって、すごく不細工になってたんだもん。ちゃんと括ってないから風ぐらいで崩れるんだよ。碧が不器用すぎるの」

「ええ〜、なんでよ。そんなに不器用じゃないもん」

「はいはい。そんなわけだから、瀬戸さん、これ、どうにかしてあげて」

さくらが溜め息交じりに肩を竦めた。

「はあ…。碧さん、どうします?」

「どうにかしてあげて」

おいおい、文学部のくせに、日本語おかしくないか?

「じゃあ、後ろで編み込みますね」

頼まれた柚希は、なんとも思っていないらしい。愛の力かな。すごい力だな。

言葉通り、柚希が碧の髪を編み込んでいく。器用なもんだ。

しかし、碧はやはり不器用だったのか。そうじゃないかと思っただんだよな。なにをさせてもどんくさいところがあるし。

ときどき碧は、妙に複雑な髪型のことがあるけど、あれは柚希がしていたんだな。柚希もいじらしいというか、なんとというか……。

そういえばこの間、凜は髪を綺麗にまとめていたよな。あれから

お袋に訊いたら、バレエに行くとき、母親が仕事の日はひとりでバスに乗っていくそうだ。凧の母親もできる限り夕方に帰れるシフトを組んでいるらしいのだが、人手不足もあって、夕方の勤務と習い事が重なってしまう日があるようだ。迎えに行くときは間に合うようにしていたのに、ついに先日、迎えに行けない事態になってしまったのだ。

凧がひとりでバレエに行くときは、当然身支度も自分でしているわけで、あの髪も自分でしていたのだろう。

女兄弟がいないから、凧がすっかりしているのかどうか判断できないが、碧の有り様を見ている限り、たいしたものだと思ってよさそうだ。

「松浦さん、こういうの珍しいんですか？」

食い入るように見ていたら、柚希に尋ねられた。

「珍しい。面白いから、写したい」

「私はべつにかまいませんけど」

「あたしもいいですよ」

被写体ふたりの許可が下りたので、俺はカメラを構えた。

写真部の部員に、この手の頼みを断られたことはない。お互い、写し合って練習することも多いからだ。

部室では何度か撮影したことがあるから、だいたいの光量は把握している。柚希と碧をふたり入れるなら、コントラストは落とし気味にして露出をあげるか。思い切って、シャッター速度を極端に遅くして、ブレさせても面白いよな。あまりのんびり迷っていたら、

柚希の作業が終わってしまいそうだから、俺は露出をあげて写すことにした。

「柚希ちゃん」

レンズ越しに声をかける。

「はい？」

「それ、難しいの？」

ピントを合わせた指の動きは複雑で、見ている限り、難しそうだ。

「わりと簡単ですよ」

「後ろでひとつに丸くまとめる髪型、知ってる？」

「日本髪ですか？ 着物のときにするような」

シャッター音にかまわず、会話を続ける。

「いや、違う。バレエや体操選手がするよつなやつ」

「ああ、シニヨンですね」

「名前があるんだ」

「はい」

「難しい？」

「私はしたことがないんですけど、慣れればできるみたいですよ。シニヨン私より亜衣の方が詳しいんです」

「へえ。どうして？」

「亜衣は以前、バレエを習ってたので、自分でシニヨンにしてたんです」

「なるほどね」

「シニヨンがどうかしたんですか？」

「近所の子がしてるのを見たから、難しいのかなと思ったんだ」

話してる間に碧の頭は完成したらしい。

「あー。すっきりした。瀬戸さん、ありがとう」

「どういたしまして」

笑顔を交わし合うふたりの様子は、やはり恋人同士なんだよな。うーん、なんかちょっと、

「…寂しい……」

「は？」

「妹を嫁に出したみたいない気分だ」

「碧さんのこと、妹みたいに思ってたんですか？」

「いや、妹のように思ってたのは君だよ、柚希ちゃん」

「……あの、ビミョーに迷惑なんですけど。せめて弟にしてもらえませんか？」

「それがさ、俺には君と同じ年の弟がいるんだよ。この弟が、君とは似ても似つかないから、仮でも弟にはたとえられない」

「だからって……」

柚希は眉をひそめて、唇を尖らせた。部室に笑い声が広がった。

「あー、でもそれ、わかります。俺も弟いるし」

手を叩いて笑いながら、佐々木が俺に同調した。

「佐々木くん、弟いたの？」

さくらが意外そうに尋ねる。

「弟、つっても、俺、双子だし、年は一緒だけどな」

「嘘ッ！ 佐々木くん、双子なの？」

碧が飛び上がりそうな勢いで振り返ると、佐々木の言葉に食いついた。

「あ、ああ、そうだけど……？」

「ひどい！ そんな大事なこと、なんで今まであたしに内緒にしてきたのよ？」

「ひどいって、大事なことって、内緒って…。え？ え？ なんで？」

佐々木は碧の剣幕に、あどずさった。

あーあ、これはまた、面倒なことになった。

しかし、佐々木は双子だったのか。知らなかった。

俺はこっさりさくらの方を見た。お互いタイミングが重なって、目と目が合った。俺が佐々木に視線だけ向けて暗黙のまま尋ねると、さくらは首をブンブン振った。さくらも佐々木が双子だったことは、知らなかったようだ。

「別に、内緒とかじゃねーけど、わざわざ言いふらすよーなネタでもねーし……？」

佐々木は、碧に詰め寄られて戸惑っている。いまいち、事態と状況がわかっていないのだ。

「ねえ、どんな弟なの？」

「どんな、つってもなー……」

「似てる？」

「一卵性だし、顔とか体格は似てんじゃねーか？」

「うわー、一卵性なんだ。そっくりのヒグマが二頭……。可愛い」

うつとりと呟いて、碧は身もだえしながら喜んでいる。

碧の目にも、佐々木は熊に見えるんだな。こんなでかい熊が二頭もいたら、可愛いよりむさ苦しいと思うんだが……。しかし、この状況で心配なのは佐々木や碧ではなく、柚希だ。

俺はドキドキしつつも柚希に視線を向けた。

………。表情がない。怖い……。

なまじ綺麗な顔だから、すごい迫力だ。碧が佐々木に興味を持ったのが、相当不満なんだろう。

碧は双子でありさえすれば、だれかれかまわず愛せる特殊体質だからなあ。なんて傍迷惑な体質なんだ。

「へー、兄弟そろって鉄道マニアなんだ」

「まーな。弟は乗り鉄だけど」

「乗り鉄ってなに？」

佐々木と碧が盛り上がっている。このふたりがこんなに仲良くしているのを初めて見た。見慣れないから、違和感ありまくりだ。

しかし、碧の鈍さは殺人的だよ。彼氏の前で他の男に興味津津な自分の罪に、なんで気づかないのかな。

だいたい、佐々木も碧の双子好きを知らなかったのか？ 結構、部員の中では有名な話だから、とくに全員知ってるとはかり思ってた。

柚希も素直に、自分以外の男に興味を持つなと言えればいいのにな。あんまり気の毒なので、俺は助け舟を出すことにした。

柚希の死角になるように背中を向けて携帯を開き、碧にメールを打った。

『君の光源氏は焼餅やきみたいだよ』

ポケットに携帯を突っ込んでから送信ボタンを押した。

さっき写した写真をカメラの液晶に表示させてチェックしていると、少し離れた場所から携帯の着信音がした。顔を上げて確かめてみるまでもなく、碧の携帯だ。

碧が携帯を開く気配がしたが、俺は知らん顔を決め込んだ。

「あれ？」

声を出したあと、碧は考え込むように口を噤んだ。俺を見ているかもしれないから、余計に素知らぬふりでカメラから視線を上げない。

「瀬戸さん、焼餅やきななの？」

ストレートに訊くんかいッ！ 俺は頭痛がしそうだった。

「そんなことないですよ」

そして柚希は恐ろしく恋愛下手だ。肯定しとけばいいものを……。

「だよねえ」

笑顔で頷き合っているのが、悲惨きわまりない光景に見えてきた。できるだけこのふたりには、かかわらないようにしよう。とてもじゃないけど、手におえない。

「佐々木さん」

袖希に呼ばれて、佐々木は顔を上げた。

「ん？」

「すごく迷惑なんで、やめてもらいたいんですけど」

「へ？ なにを？」

「双子を」

「は？ なんで？ どうやって？ つーか俺、袖希ちゃんになんか迷惑かけた？」

佐々木がわけもわからず、おたおたしている。袖希の方が学年はひとつ下なのだが、どうも佐々木は袖希に弱い。十月までは袖希を女の子だと思っていたから、その名残りだろうな。ひとのことは言えないけど。

「弟さんと合体してひとりになるとか、出来ないんですか？」

知性溢れる法学部の学生が、無茶なことを言っている。よほど頭に血が上っているらしい。

「ロボットじゃねーのに、できるわけねーよっ」

佐々木が盛大にかなりたてる。

「……………まあ、これはどう見ても佐々木が悪いよな」

「そうですね」

俺とさくらが溜め息をついて肩を落とすのを見て、佐々木がますますパニック状態になった。

「なんで？　なんで？　俺がなにをしたって言うんだよーッ？」

なにってそりゃ、双子だよ。

第十四話

佐々木の正体、発覚（後書き）

この場面は、前々作「恋を感じるとき」の最終話に入れようと思っ
てました。

でも、最終話は5000字くらいになってしまつて、脇役のちんた
らした話をぶち込む隙間がなかったので、なくなった部分です。

結構好きなお話です。楽しいし（笑）

佐々木君は元々、便宜上名前を付けただけで、たいして存在感のあ
る役ではなかったはずなんですが、途中から書くのが面白くなった
人物でした。

第十五話

凜と亜衣のバレエ友達

「こんにちはー。お邪魔しまーす」

微妙な空気が漂う中、亜衣が部室にやってきた。

「柚希、パンフレット持って来たよ」

亜衣が手に持っていた冊子を柚希に差し出した。

「あ、うん……」

「あのさ、何回も言うけど、行かなくていいよ。わたしはバレエトモだけど、柚希は違うんだから」

「うん……」

「駄目。瀬戸さん、絶対行ってきて」

碧が強い口調で話に割って入ってきた。

「どづしたの?」

碧の表情がいつになく険しかったので、俺は亜衣に訊いた。

「中学からの友人がバレエの舞台に出演するんです」

「へえ……」

さつきバレエの話題になったばかりだから、俺は顔が引きつりそうになった。

「三月には主役をすることが決まっていたので、高校卒業する前に絶対観に行く」と約束したんです」

「なるほど」

「その舞台が、今月の二十四日なんですよ」

「今月って、じゃあ、クリスマスイブ？」

「ええ」

亜衣は碧にちらりと視線を流すと小さく目配せした。

そうか。恋人と過ごす定番の日だもんな。まして、つきあって初めてのクリスマスイブともなると、柚希としては迷うんだろう。

でも、碧と知り合う前からの約束だから、碧はそっちを優先させると言ってるようだ。

「碧さん、やっぱり一緒に行きませんか？」

柚希の申し出に、碧は首を横に振った。

「行かない。あたし、バレエとか全然わかんないし」

「……………」

そう頑なに拒絶されれば、柚希は強く出られないだろう。碧にと

つては無関係の相手だし。

「だいたい、クリスマスイブだからってこだわる必要ないじゃん。いつでも会えるんだから。そんなことより、その友達の約束の方が、ずっと大事だよ。行かなかつたら、瀬戸さん、きつと後悔するから」

「わかりました。碧さんはその日、どうするんですか？」

「さくらと映画に行く」

「碧が3D見たことないから行きたいんだって」

柚希が嫌そうな顔をさくらに向けた。

「なに？ べつにポルノ映画に行くんじゃないよ。碧は未成年だし」

「だれもそんなこと、心配してませんよ。本当にふたりで映画に行くんですよね？ 合コンに変更したりしないでくださいよ」

「大丈夫だよ。信用ないなあ」

そりゃあないだろう。さくらならそれくらいの悪行は日常茶飯事だ。元々、コンパ好きだし。

「……でも、そっか。イブコンパか……」

「小畑さん！」

「冗談だって」

これだからさくらは信用されないんだよ。

しかし、碧は未成年だったのか。確か、早生まれじゃないから来年の成人式には地元に戻ると話していたのを聞いた記憶がある。ということとは、碧は十二月生まれか。それで柚希は焦っているんだないやいや、かかわらない、かかわらないぞ。俺は後ろ向きな決意を念仏のように唱えながら、髪を掻き上げた。

ふと柚希が持っているパンフレットの文字が目に残まって、目を瞠みはった。

「柚希ちゃん、それちよつと見せて」

どうぞと差し出された冊子の表紙に、くるみ割り人形と書かれている。先日、凜が話していたバレエの発表会と同じだ。凜も今月が発表会だと言っていた。

「亜衣ちゃん、くるみ割り人形ってなんなの？」

興味を抑えられなくて、俺は亜衣に尋ねた。

「チャイコフスキーの三大バレエのひとつです。白鳥の湖、眠れる森の美女、くるみ割り人形…って、まあ、とにかく映画のタイトルと同じですよ。クリスマススイブの夜にクララが不思議な夢の世界に行く話なんです」

それで、その舞台もクリスマススイブにするのか。

「中国は？」

「くるみ割り人形の中でもいろんな踊りのパートに分かれてるんです。中国の踊りはその中のひとつで、他にもスペインの踊りやロシ

アの踊り、アラビアの踊りとか色々あります」

亜衣がパンフレットを開いて説明してくれた。それぞれの踊りの欄に、出演者の名前が載っている。中国の所に『庄野凜』の名前があったので、俺は思わず「あっ」と声を上げた。

「知ってる子の名前がある」

「本当ですか？」

「亜衣ちゃん、この舞台って、バレエ教室の発表会なの？」

「はい」

凜を迎えに行った文化ホールの名前を出すと、亜衣は頷いた。亜衣は中学二年まで、そこで凜のようにバレエを習っていたらしい。今回主役を踊る友人は、以前一緒に習っていて、いまでも続けているそうだ。

パンフレットの表紙をもう一度見る。十二月二十四日、十四時半開場、入場無料、とある。

「これ、だれでも行ったら入って観られるの？」

「もちろんです」

「行こうかな……」

思わず呟いたときには、俺は行きたい、観てみたいに気持ちが動いていた。全然、ガラでもないのに。

第十五話

凜と亜衣のバレエ友達（後書き）

第十六話

柚希の修業時代

その日の夕方、大学の図書館の前で、偶然、柚希に会った。

「資料集め？」

「はい。レポートがはかどらなくて」

抱えるように持っている本の数を見る限り、法学部のレポートもなかなか大変そうだな。

「松浦さん、就活はどうなんですか？」

「まだ動き始めたばかりだし、なんとも言えないな。説明会は参加してるけどね」

「三年生はみんなもつと大変そうなのに、のんびり構えてませんか？」

「そうかな。まあ、性格かもね。ところで、碧ちゃんの誕生日はわかった？」

「いえ……」

柚希は悄然と首を振った。

「俺もそれとなく訊いてみたけど、企業秘密だとか言われてさ……」

「松浦さん、女の子は誕生日に恋人と過ごしたいとは思わないんで

すか？」

「いや、そんなことないだろ」

むしろ、忘れたり、手抜きする方が問題になりそうだと。そう言つたと、柚希も頷いた。

「法学部の女友達も、彼氏が誕生日を忘れたら、七代先まで呪つて言つんです」

ええええッ、そんなに？ 予想以上の恐怖に、俺は思わず過去の記憶を手繰り寄せた。いままでの人生で、呪われるような凡ミスはしてないよな。

「昨日が誕生日だったかも、今日がそうかもと思うと、気が気じゃないんです」

「碧ちゃん自身が教えないんだから、呪われることはないだろ」

「そんな心配、してませんよ」

だろうな。いまの柚希は呪いだろつと祟りだろつと、碧から与えられたらなんだって受け入れそうだと。

「碧さん、誕生日で二十歳になるんですよ」

確かに、二十歳は誕生日の中でも特別な響きがあるよな。自分のときはどうつてことなかつたけど。

「プレゼントも禁止されてるし、誕生日も教えてもらえないし、そ

んな女の子、よくいるんですか？」

プレゼントまで禁止なのか。なんでだろ。クリスマスイブも別行動決定だし、つきあって一ヶ月足らずにして、暗黒時代に突入してるかも。不憫すぎる……。

「うーん、俺の知る限り、訊いたことないなあ。碧ちゃんは、ちょっと変わってるからね」

可哀想なくらい落ち込む柚希に、俺はこめかみを押さえた。かわらないと決めたはずなのに、ついどうにかしてあげたくなるのが、この珍妙なカッパルの不思議な所だ。

「碧ちゃん、昔から自分の誕生日、嫌いだったって言ってたな。俺はてつきり敬老の日かと思ったけど、十二月生まれなら違うね。今月で子どもが嫌がる誕生日は……大晦日かな？」

うちのお袋は、年末年始を主婦の地獄と言って憚らない。大掃除やお節料理で忙しいときに誕生日のイベントをしたら、大変なんじゃないだろうか。

「そうですね……」

柚希は考え込んだ。納得半分。疑念半分だな。推測の域を出ないんだから当たり前だ。

「碧さん、彼氏に素っ気ないなって思ってたんですけど、自分が同じことされると、結構へこみますね」

「君とつきあう前？」

「はい」

碧の掴みどころのなさは、こういうところかな。

去年、碧とつきあってた奴に知り合いがいるんだが、そいつも、自分が碧に好かれてる気がしない、とよく愚痴をこぼしていた。柚希に対しては、碧も積極的な態度だと思っけど、その柚希でさえ元カレと似たような悩みを抱えているんだから、碧の淡白な言動も多分にあるんだろう。

「……今から帰るの？」

気の利いた言葉も見つからなくて、俺は話題を変えた。

「区の図書館に寄ってから帰ります」

大学の図書館だけでは、資料が揃わなかったようだ。

「どこの図書館？」

登録カードで利用できる図書館は七つほどある。最近では提携してる図書館が増えたからだ。

柚希が口にした図書館は、凜が通うバレエ教室に隣接する図書館だった。

俺は時計を見て、時刻を確認した。今日は木曜日だ。いまから行けば、練習に来る凜に会えるかもしれない。

「車で来てるし、送ってあげるよ」

「べつに、いいです。わざわざ、申し訳ないです」

「ついでだから」

「そうですか。じゃあ、お願いします」

柚希が抱えている本を取り上げて持つてやると、柚希が慌てて手を伸ばした。

「松浦さん！」

「え？」

「女の子じゃないので、荷物、持ってもらわなくて結構です」

「あ」

「忘れてたとか、言わないでくださいよ」

「いま一瞬、ガチで忘れてた」

「松浦さん、小畑さんみたいに……」

「ごめん、ごめん。ま、でも、後輩なんだから、甘えときなよ」

本を持ったまま、柚希を促して歩き始める。

「男の自覚を修行中の身なのに……」

そんな修行がこの世にあるのか。

「まだ、ほとんどの学生は君の正体知らないんだし、重い荷物持ってる隣で知らん顔してたら、俺が人聞き悪いだろ」

「知ってるひとが見たら、ホモだと勘違いするかも……」

柚希の言葉に、俺は立ち止まった。取り上げた本を半分柚希に返すと、再び歩き始めた。

柚希は笑いながら、あとを着いてきた。駐車場まで歩いていると、何人かが俺たちに、興味津々な視線を送ってくる。

「柚希ちゃん、君、やっぱり目立ち過ぎだよ」

「松浦さんが学祭であんな写真を展示するからですよ」

うーん、それはそれで一理あるかも。

「もし、ホモカップルだと思われてたら、私が女役だと考えるひともいるんでしょうか？」

「……………たぶん全員、そうだよ」

なんで俺と柚希で、俺が女役とかがあり得るんだよ。発想が異常すぎる。

「はあ……………。早く、碧さんのことが全校に知れ渡ってほしいです。学生課の掲示板に貼りだすとか、できないんですか？」

「できないだろ、そりゃ……………」

碧とつきあっただけあって、柚希もたいがい天然だ。

第十六話

柚希の修業時代（後書き）

以前からずっと思ってるんですけど、この程度でもキーワードに、読む人によってはほんのりBL風味…なんてことを書くべきなんでしょうか？

柚希が性別不明みたいなキャラなので、この程度はしょっちゅうあります。

拒絶反応のある方がいらっしやったら、ごめんなさい。

第十七話

凜が柚希に宣戦布告

区の図書館に着いた。が、そう都合よく凜に会えるわけもない。何時に凜がここに来るか、知っているわけではないのだ。迎えに来た時間から逆算して、可能性があるかな、と予想したに過ぎない。だいたい、会えるとか会えないとかが、そもそもおかしい。斜め向かいの家に住んでいるのだから、いつだって会える。俺はなにを望んでいるのだろう。

駐車場から柚希と歩いて移動する。図書館の入り口に差しかけたとき、馴染み深い声が飛んできた。

「惣介くん」

振り返ると、凜が手を振りながら駆け寄ってきた。諦めかけていたから、可愛い姿を見ることができて素直に嬉しい。

「今からバレエ？」

「うん。惣介くんは…あっ……」

柚希に気がついて、凜が表情を硬くさせた。

「こんにちは。瀬戸柚希です」

「え、えつと、五年三組、九番、庄野凜です」

どっちでもいい情報まで紹介してもらったが「近所の子なんだ」と説明すると、柚希はにっこり微笑んだ。

凜は上目使いに柚希を見て口ごもる。

「…写真の、綺麗なお姉さん……」

凜の言葉で、俺は初めて思い出した。凜は俺の部屋で、柚希の写真を見たことがあるのだ。だからこのふたりは初対面だけど、凜の方は柚希の顔だけは知ってるのだ。

「あのおとき言っただかな？ 大学の後輩だよ」

凜はこくと頷いた。

「松浦さん、私、先に図書館に入ってます」

「ああ」

「あ、あの……」

凜の声に、柚希が振り返り首を傾げた。

「五年後は負けないんだから！」

そう啖呵を切ると、凜はピューッと文化ホールに向かって駆け出してしまった。

柚希は呆然と凜を見送っていたが、俺に尋ねた。

「意味が全然わからなかったんですけど、通訳してもらえますか？」

「いや、俺にもなにがなんだか……」

負けないってなんだ？

しばらく黙考していた柚希が、口を開いた。

「えーっと、さっきの凜ちゃんがかかるみ割り人形で中国を踊る子で
すよね？」

頭が……そう、シニヨンだったから、柚希もすぐわかったらしい。

「ああ」

「もしかして小学生の許嫁って、凜ちゃんですか？」

なんでそんなことがわかるんだと思ったけど、隠してもしょうがないので肯定した。

「なるほど。わかりました」

「は？」

「今度、凜ちゃんに会ったら、ちゃんと教えてあげてください」

「教えるって、なにを？」

「私が男だということと、恋人がいることを」

「は？　なんで？」

「なんでって、松浦さん、鈍すぎますよ」

「へ？」

さつきから俺は、間抜けな声しか発していない。実際、柚希がなにをわかったのか、なぜ男だと教えろと言うのか、さっぱり理解できなかつたのだ。

第十八話

第二回 大学写真部応援企画

就活にはのんびり構えていた俺だが、さすがにそろそろまじめに動き始めないとやばいかなと思いついて始めた。

ゼミが終わって帰宅するつもりで大学の駐車場に向かって歩いていったとき、携帯からメールの着信音が鳴った。

『部室に、副部長宛ての封筒が届いてますよ』

メールの送信者は碧だ。今日は部室に寄る予定はなかった。少し迷ったが、封筒の中身も気になる。

俺は部室に立ち寄ることにして、踵を返した。

部室はいつもと変わらないメンバーが、いつも通りに過ごしていた。

テーブルの端にA4サイズの封筒が置かれてあった。

「これ？」

「はい」

碧がこくこく頷いた。

手紙だと思っていたので、首を傾げた。

宛先がM大写真部 松浦惣介様で、差出人が亜東出版社の沢波さんだ。学祭の取材に来て、俺が写した袖希の写真を気に入ってくれたひとである。

なにを送ってくれたのか、心当たりがないまま開封する。

茶封筒から出てきたのは、亜東出版発行の雑誌だった。地元情報

にページを多く割いている。パラパラと捲ってみた印象では、十代後半から二十代女性が読者のターゲットかな。

付箋が二カ所に付いている。最初の付箋のページに、M大の学祭が取り上げられていた。

「へへ、載せてくれたんだ。あ、名画のこともちゃんと載ってるぞ、佐々木」

「ほんとっすね」

佐々木も感慨深そうに雑誌を覗き込んでいた。

雑誌に載ることなど想像もしてなかったから、ちょっと感動してしまう。

「こっちの付箋はなんなの？」

「さくらがページを捲る。」

「第二回 大学写真部応援企画？ なにこれ？」

記事を読んでもみると、要するに、写真作品の募集だ。応募できるのは大学の写真部のみで、テーマはカップル。モデルは同じキャンパスの学生、撮影場所はキャンパス内であれば屋内屋外は問わない、とのことだ。

「去年もこんなのがあったんだ。知らなかったな。さくらちゃん、君、出してみたら？」

さくらは学祭でもカップルの写真を出品したから、テーマが重なっていた。

「ひとつの写真部から出せる写真は一枚だけなんですわ。うーん、M大写真部の看板を背負うことになるんだ。重いなあ……あ、賞金出るんだ。すごい。優勝したら十万円だって。準優勝でも五万円だよ」

「ほんとに？ あたし、魚眼レンズ欲しい」

碧がはしゃいだ声を上げた。そういえばこないだから魚眼レンズが欲しいから、春休みにバイトすると言ってたな。

記事を読んでみる。去年の出品校は九校だけだった。第一回だから告知不足もあったんだろうけど、雑誌自体も関東限定で販売しているみたいだ。大学の写真部に限定されてるし、応募はそれほど増えないだろう。競争率を考えると、この賞金は手が届きそうな気がする。

「あたしが撮る。絶対優勝する」

碧が鼻息も荒く、拳を握りしめた。

「碧、あんた、ほとんど人物、撮らないじゃん。大丈夫なの？」

さくらの心配そうな声に、碧は不敵に笑った。

「モデルがよければどうにかなる」

碧が柚希を熱く見つめる。

「……私ですか？」

柚希が目を丸くして自分を指差した。

「他にだれがいるのよ」

碧より先にさくらが返事をしていた。

「だって、カップルなんでしょ？ 碧さんが撮影に回ったら、カップルにならないじゃないですか」

「そう、つまりいー、相手の男が必要なんだよね……」

碧の視線は、佐々木と俺を行き来した。ちよつと、待て。なんか嫌な予感がするぞ。

「無難な副部長か、大穴狙いで佐々木くんか……。なんかどつちも微妙だなー」

「うわー、やっぱり。」

「碧さん、まさか松浦さんか佐々木さんでカップルに仕立て上げるつもりですか？」

「だって、他にいないんだもん」

「だから、カップルは男女じゃなきゃ……」

「男女カップルに限るとは、どこにも書いてないよ」

さくらが頼杖を突いて、雑誌に視線を落としたまま告げる。

「わざわざ書くまでもないからですよ。詐欺で訴えられますよ」

「どっちがいいかな。副部長の方が確実に票は取れそうだけど、佐々木くんもインパクトは出るんだよね。美女と野獣ってタイトルにしたらウケるかな」

「碧さんっ!」

柚希は悲鳴をあげんばかりである。

「……お前、やっぱおっかねーわ。魚眼レンズのために彼氏を男に売る気かよ」

佐々木が呆れて非難の視線を碧に向ける。野獣に対するコメントは特にないらしい。

「なにわけのわかんないこと言ってるの。写真撮るだけじゃん」

「……………そうか？」

「冷静に考えてよ、瀬戸さん。あたしと瀬戸さんの組み合わせで、カップルに見えるはずないんだから。ここは建設的に魚眼レンズに近づかなきゃ」

碧がさくら化してる。邪悪だ。

「……………なら、こうしましょう。夏休みのバイト代がまだ残ってますから、それで私が魚眼レンズを購入します。碧さんとは同じメーカーですし、使うときはお貸しします」

「駄目」

「……………」

「魚眼レンズって、個性強すぎるレンズでしょ。だから個人で買うより、写真部が購入してみんなで使う方がいいよ。これから入ってくる後輩も使えるんだし」

碧の説は間違っていない。

が、しかし、優勝すると決まったわけではない。そもそも、応募するかどうかもわからないのに、碧の脳ミソは魚眼レンズまっしぐらだ。

仮に、優勝賞金をゲットしたとしても、使い道は部員で話し合うことになる。よしんば、魚眼レンズで意見がまとまったとしても、ほとんどの部員が使っているのはニコンだ。キャノン組は、俺と碧そして柚希の三人だけ。

碧の野望が叶う確率は、ほぼゼロだろうな。

「おーっす、久しぶりー」

部室の扉が開いて、入ってきたのは、篠崎部長だった。

「部長！ 会いたかった、会いたかったー」

碧の熱烈歓迎ぶりに部長はきよんとした。間の悪いとき来るひとだ。俺と佐々木は助かったけど。

「よかったあ、三択になった」

……助かったと思ったけど、即座に候補から落ちたわけではない

らしい。がっかりだ。

「なに、いったい？」

俺は雑誌を見せて簡単に説明した。

「へー、面白そうだな」

柚希と相手役以外は、確かに面白いんだけどさ……。

「とりあえず碧ちゃん、沢波さんにお礼ついでにこのこと訊いてみるから、それから決めよう。だいたい、モデルはキャンパスの学生なんだよ。写真部に限らなくていいんだから」

「あ、そっか」

はー、疲れた……。

部長には、最悪の場合、モデル役の可能性もあります、と告げた。

「いいよ。面白いじゃないか」

「……………そうですか？」

この状況で、相手の彼女役は柚希の可能性が高いんだけど。

「絶世の美女にしか見えない、彼女持ちの美少年の恋人役なんて、この先の人生でも経験できそうにないだろ。やれるものならやってみたいよ」

「……………」

ああ、立派なひとだったんだな。

四月から、俺がこのひとの跡を継いで、部長になるのか。とてもじゃないが、肝っ玉が違うよ。

第十八話

第二回

大学写真部応援企画（後書き）

第十九話

家もつと遠かったらいいのに

家に帰ってから、仕事かと思っただけど、沢波さんに電話してみたら、あっさり繋がった。

「雑誌、わざわざ送っていただいてありがとうございます」

『今日あたり届くと思ってたの。名画のとこ、もうちょっとスペース取りたかったんだけど、通らなくて小さくなっちゃったわ。ごめんね』

「いえ、とんでもないです」

『写真部応援企画、読んでくれた？』

「読みました」

『どう？ 参加してみない？』

「実は、後輩で、はりきってる子がひとりいるんですよ」

『本当？ よかった。去年、閑古鳥が鳴いちゃったから、今年は賞金も増やしたのよ』

「あの、カップルってどういうコンセプトなんですか？」

『あんまり詳しく話すと、依怙^{えいひいき}鼻^{びな}肩^{かた}になっちゃうから、ちょっとだけ教えるわね。本当はミスキャンパスの写真を送ってもらおうかと

思ったのよ。読者にとっては知りたい情報でしょ？ でも、それじゃありきたりだし、カップルも面白いかなって。高校生読者も多いし、受験したい大学の裏側もちょっと覗いたら楽しいでしょ」

となると、背景もある程度大学の雰囲気を出した方がいいんだな。とはいえ、写真部同士で競うんだから、スナップ写真では話にならないし、案外難しいな。

「あの……カップルは男女じゃなきゃ駄目ですよね？」

『はあ？』

「いえ、すいません。なんでもないです」

我ながら馬鹿な質問だ。冷や汗が出る。

『あ、そういうえば、就職活動はどうしてるの？』

「まだ、説明会に参加してる程度です」

『本当にうち、受けない？ 私、人事じゃないから何もしてあげられないけど、現場で取材したり記事書いている人間にとっては、松浦くんみたいな子は是非、来てほしいのよね』

「ありがとうございます。ただ、あの写真はモデルが……」

『確かにモデルの子は綺麗だったけど、それだけじゃないのよ。M大の写真部はエネルギーを感じる。その部をM大祭では実質、松浦くんがまとめてたんでしょ。そこが一番の魅力なのよ』

「……………」

『それにね、モデルの容姿抜きにしても、写真は魅力的だったわよ』

「……………」ありがとうございます。真剣に考えます。出版業界はやりがいのある仕事だと思うんで」

『ぜひね。なにかわからないことがあったら、いつでも相談して』

「はい」

電話を切って、息をついた。なんだか、力が抜けた。

自分に対する評価が、思っていた以上に高かったことは、照れくさくも嬉しかった。人事のひとじゃないから、内定の期待ができない分、気楽に喜べた。

「出版社か……………」

紙の媒体は今後、厳しさを増していくだろう。それでも、紙を捲って文字を読む心地よさは、なくなりはない。俺自身、電子書籍に手を出してみたが、やはり紙の本に戻ってしまった。

写真にかかわる可能性があるのも、魅力は大きい。

「受けようかな」

送ってもらった雑誌を眺めながら呟いた。女性読者対象の雑誌だから、内容は正直、頭に入っていない。けれど、ページの構成や写真の配置なんかを見る姿勢が、夕方とは違ってきたのを自覚する。

「やったー、できたよ」

一階から女の子の声がかすかに聞こえて、はっとした。

「え？ 凜ちゃん？」

俺は立ち上がって、慌てて一階に駆け降りた。

「凜ちゃん、来てたんだ」

「うん。雄介くんに宿題みてもらったの」

「最近の小学生も、ややこしい宿題してるよな」

そろそろ教えられる限界かも、などと雄介は情けないことを口走っている。

いくらなんでも限界ってことはないはずだけど、俺や雄介はゆとり教育世代だし、思わず弱音も出てしまう。

大学に行ってからもサッカーを続けている雄介は、俺より体格がいい。身長は一七六の俺とそれほど変わらないが、体重は六、七キ口重くてがっしりしている。弟のくせに、まったく可愛くない。

凜がコートを拾い上げていた。

「もう帰るの？」

「うん。宿題終わったから」

「送っていくよ」

「お向かいなの？」

「もう暗いから」

玄関を出れば、凧の家はもう見えている。外は凍てつくような寒さだ。

「惣介くん、あの、こないだのお姉さん……」

「柚希ちゃん？ 図書館で会った？」

「うん。柚希さん、怒ってた？」

「怒ってないよ」

「惣介くんは？」

「怒ってないよ」

「……………」

「凧ちゃん、なんであ那个时候、あんなこと言ったの？」

俺は、訊いてからしまったと思った。

あれから……図書館の前で凧に会ったときから、俺なりに考えた。凧が柚希に啖呵を切った理由も、バレエの迎えに行ったときに、少し頬に触っただけで過剰に反応したことも。

本当は、薄々、気づいてる。凧の気持ちに。でも、そんなはずないとも思っていた。

凜は小学生で、俺は大学生で、年は十歳も離れていて。

だから、俺がこんな気持ちになるのもおかしいし、凜が俺に好意を寄せていたとしても、それは近所のお兄さんに対する憧れではない。

あ那时的凜の行動をつきとめてどうするんだ。

「あたし……」

「ごめん、いまの質問はなしにして」

「あの……」

「そうじゃなくて、柚希ちゃんが凜ちゃんに伝えろって言うてたんだ」

「え？」

「あのひと、男なんだよ」

「ええ？」

凜が驚いて言葉を失っている。図書館で会ったとき、柚希の服装はスカートではなかった。ジーンズにダウンのコートだったのに、やっぱり小学生の目にも、女の子に見えるんだな。まあ、髪も長し肩幅も細いし、当たり前か。

「それに、彼女がいるから」

信じられないような、ほっとしたような顔で凜が見あげてくる。

「ほ、ほんとに?」

すがりついてきそうな様子が、胸についた。

「ああ。あ、そうだ。凜ちゃん、くるみ割り人形の舞台、俺も観に行くから」

「え、なんで?」

「柚希ちゃんの友達が出るんだって。それで、俺も凜ちゃんを観に行くことにしたんだ。客席から応援してるし、頑張るんだぞ」

「うん……。あの、惣介くん、ありがとう」

凜の頭をなでてから、笑顔の凜に手を振った。家がもつと遠かったらいいのに、そんなことを思ってしまうほど、あっという間に凜は家の中に消えていった。

指に絡まった凜のやわらかな髪の毛の感触が、名残惜しく感じた。

あといくつ、この寒い冬を過ごしたら、凜は大人になるんだろう。俺はまた、馬鹿なことを考えていた。

本当に、どうかしてる。

第十九話

家がもつと遠かつたらいいのに（後書き）

この話、一部保存に失敗していたみたいで、書いたはずの部分が抜けていました。

更新直前に書き足しましたが、不安な事態です。

年末で、時間が足りなくなってきました。

年賀状がまだ、手つかずです（×―×）

第二十話

林原の就活事情

『惣介、いま暇？　うちに来られない？』

電話も内容も唐突だった。リビングの時計を見ると八時半。テレビでは金曜日のバラエティー番組が流れている。

林原は時々、前触れもなくこんな電話をしてくる。いきなりだけど、林原なりに俺が行けそうな時間を予想してかけて来てるんだろ
うな。

「モデル？」

あれから連絡がなかったから、てっきり仕上がったと思ってたけど、また行き詰ったのかな。

『絵は仕上がったよ。今回、自分でも気分よく描けたし搬入前に見せておきたくてさ』

「そうか。じゃ、いまからちよつと行くよ」

俺も大概つきあいがいいよな。

でも、俺みたいな自宅組は一人暮らしやルームシェアしてる友達のとこに行くのは、ちよつとした気晴らしになるんだ。

お袋に林原のことを話して家を出ようとしたら、玄関先で呼び止められた。

「林原くんのところに行くなら、これ、持って行きなさい」

紙袋に箱が二つ入っている。コーヒーと缶詰の詰め合わせかな。

「お歳暮にもらったけど、うちはあまり食べないし。林原くんのところは男の子多いから、だれか食べるでしょ」

「わかった」

「あ、それより惣介、あんた、凜ちゃんのパレエ、観に行くんだって？」

玄関に腰を下ろしてスニーカーを履いていると、お袋が訊いていた。

「ああ、そうだけど」

「凜ちゃんのお母さん、喜んでたわよ。それでこれ、預かってきたから」

手渡されたのは写真部の部室で見たのと同じパンフレットだった。どうやら、来てくれる人に、出演者が渡すものらしい。俺はパンフレットを手に、しばらく考えた。スニーカーを履いてしまったので、二階の部屋まで戻るのは面倒だ。

俺は、パンフレットを紙袋に突っこんだ。車に乗せておけばいいと思ったのだ。

「じゃ、行ってくる」

「林原くんによろしくね」

俺は紙袋を掴んで頷いた。

「これ…か。………凄いな………」

林原の絵を見た途端、俺は背中がざわめいた。いいか悪いかなんて、全然わからない。ただ、重力から解放された、夢を見ているような世界に引き込まれる感覚に襲われる。

最後に見たときと、まるで違う。こんなに変わると思わなかったから、驚いた。

「…俺は、好きだよ」

「この絵が？」

「他に、なんの話をしてるんだよ」

「あんまり熱っぽく言うから、愛の告白かと思った」

「あのなあ、ひとがたまに褒めてんのに、茶化すなよ」

「悪い、悪い。いや、褒めてもらえて本当に嬉しいよ。サンキョ」

「褒めるって言うより、感動してる。途中を見てるから、余計に込み上げるのかな」

「照れくさいって。とりあえず座れよ。コーヒー飲んでいく時間くらいあるんだろ」

「ああ。あ、そうだ、これ、お袋から。お前がいらなきゃ、他のやつに分けるって」

「うわあ、助かるよ。お袋さんによろしく言ってくれ。あれ？本みたいなのが入ってるぞ。これも俺がもらっ分なのか？」

紙袋を覗き込んでいた林原が、パンフレットを引っ張り出した。

「え？ あ、違う。それは俺のだ」

林原からパンフレットを返してもらって、俺は頭を掻いた。危なかった。

車で出すのを忘れていたのだ。

「くるみ割り人形？ あ、そうか。もうすぐクリスマスだもんな」

「え？ 林原、お前、知ってるの？」

「くるみ割り人形か？ そりゃ、知ってるよ。常識だろ」

まじか。林原でも知ってるのに、俺は知らなかったなんてショックだ。

「クララが夢の世界に入っていくときは、周りの物がどんどん大きくなっていくんだ。その演出がすごいんだよ。本当はクララが小さくなるんだけど、そんなことできないだろ。演出家や舞台監督の見せ場なんだぜ」

「観たことあるのか？」

「いや、実はテレビの特番で見た」

「なんだ」

「でもオレ、舞台美術に興味あるし」

「へえ、なんで？」

「就職先、映画会社か舞台美術に行きたいんだ」

林原の口から就職のことを訊いたのは初めてだったから、少し驚いた。

「就職って…：そうか、同じ学年だもんな」

「なんだよ。オレが就職なんて変？」

「いや。でも、こんな絵を見た直後だし、会社に就職とか言われると、勿体ない気がして」

「この程度の絵なんか、美大の連中ならいくらでも描いてるよ」

「そうなのか？」

「ああ。美大も油絵、彫刻、日本画はつぶしが利かないから、就職も大変なんだ」

考えたら、美大の卒業生が全員、画家や彫刻家になるはずないもんな。

「みんな、どうすんの?」

「教師、目指すやつが多いな」

「お前は? 教師は考えないのか?」

林原も教員免許は取っていた。教育実習の話を知ったことがある。

「無理、無理。ガラじゃないし」

言われてみればそうかもしれない。堅苦しい規格の中で力を発揮するタイプじゃないし。

「それより、なんでくるみ割り人形の本、持ち歩いてるんだ?」

「これ、本じゃなくて、パンフレットなんだ」

俺は、近所の子がバレエを習っていること、同じ舞台に後輩の友人が出演すること、観に行くことにしたこと、ここに来るときパンフレットを渡されたことを、簡単に話した。

「なるほどね。な、それちょっと見せて」

林原はパンフレットを受け取ると、食い入るように見つめた。

俺は、凜の名前が載っているとこ以外は、どのページを見てもちんぷんかんぷんだった。さすが、舞台美術を目指しているだけあるなと感心した。

「あ、凄い。これ秦山真弥が舞台監督なんだ」

「だれ？ 有名なひと？」

「最近、注目されてる若手の舞台監督なんだ。へえ、バレエも手掛けるのか。ふうん……」

林原は何度も唸り声を上げている。

「なあ惣介、これ、オレみたいなのが行っても観られるの？」

「大丈夫だろ。俺だって立場は一緒だし」

「じゃ、行く」

「まじで？ クリスマスイブだぞ？ バレエ教室の発表会だぞ」

「わかってるよ。オレはいま、現物をひとつでも多く観たいんだ。もし舞台美術の仕事をすることになったら、バレエ教室の発表会だつてあるはずだし」

そうか。マスコミが取り上げるような、有名な舞台の仕事ばかりじゃないのは、当然なんだ。むしろ、こういう小さな舞台の仕事の方が多いのかもしれない。

林原の話では、これから映画はCGやデジタル処理が主流になるだろうとのことだ。そして舞台は、アナログが根強く残るのではないか、と考えているらしい。映画会社か舞台美術で迷っている林原は、IT会社と出版社で迷っている俺に似ている。

「バレエ教室の発表会なら、たいしたことはできないはずなんだ。制限された中でどう演出するのか興味あるんだよ」

舞台監督や演出家の力量を図るには、こじんまりした舞台ならではの見どころもあるのかな。

「本当に行くのか？」

「行くよ。いいだろ？」

「いいけど、物好きだな。就活の一環ならしかたないのかもしれないけど。じゃあ、どこかで待ち合わせするか？」

「そうだな。そうしてもらえると助かるよ」

「俺もよくわからないから、後輩の子と一緒に行ってもらうつもりなんだ。駅で待ち合わせることになるけど？」

「いいよ」

直前になったら、詳しい時間と場所を連絡することにした。亜衣と柚希も一緒に行くはずだから、四人で合流することになるだろう。

「そっいや、もう、十二月だな」

「ああ？」

なんだろう、いきなり。

「いまでも十二月は献血に行ってるの？」

「ああ、うん、行ってる。今年はまだ行ってないけど」

「わざわざ、お願いのハガキが来るんだろ。珍しい血液型って、ちよっと格好いいよな」

俺の血液はボンベイ型で、少し変わっているんだ。で、十八から献血をしている。年に一度だけだけだ。

「そうか？ 自分がなんかあったら、輸血してもらえなくて死ぬかもしれないんだぞ」

「うーん、そうだよな」

「それに、献血したって無駄になってるだろうしな」

珍しい血液型ということは、人数が少ないということだ。その少ないひとが、事故に遭って輸血が必要な事態になることは、さらに確率が低いつてことだ。

「でも、献血して感謝されるんだろ？ オレなんか普通のB型だから、だれがしても一緒だぜ」

別の血液型になった経験がないから、なにがどう違うかわからないけど、どんな血液型でも感謝はされてるだろう。

珍しい血液型だからと言って、得したこともなければ損したこともない。普通にしていれば、輸血が必要なほどの事故に遭うこともないだろうし。献血の呼びかけに、年に一度は応じているけど、考えてみれば面倒くさい。

たとえば、何十万人にひとりの珍しさなら、気持ちや自覚も違っただんたろうけど、二百人にひとりなら、大学のキャンパスにも一人や二人はいる確率だ。

「でもさ、どこかにいるはずだけど、出会えないだろ。血液型を名札に付けて歩いてるわけじゃないし。意外なひとが同じ血液型だったら、運命の出会いって感じ、しないか？」

「そうかなあ。でもまあ、話は盛り上がるかもな」

たいして仲良くななくても、きっかけがあれば、懇意になれることがある。それが二百人にひとりの確率なら、親近感も湧く気がする。まだそんな経験はないけど。

俺たちはその日、そんなとりとめのない話で、妙に盛り上がった。

第二十一話　くるみ割り人形

クリスマススイブ当日、空は厚い雲に覆われた曇天だった。待ち合わせの駅に着くと、柚希と亜衣はすでに来ていた。俺と林原が近づくと、亜衣が気づいて頭を下げた。

「こんにちは」

「ごめん、待たせた？」

「大丈夫ですよ。じゅうぶん余裕があるので」

開場の時間まで、まだ四十分くらいある。花屋に寄りたいからと訊いてはいた。

「あつ、もしかしたら、惣介の写真のモデルした子？　学祭の」

林原が柚希の顔を見て尋ねた。林原のことはふたりに話してある。美大生で舞台美術に興味があると説明しておいた。俺がモデルをつとめた絵の作者であるとも。

「はい」

「そうか、やっぱり。いや、可愛いなあ。写真映りが特別なのかと思ってたけど」

「あ、そうだ。柚希ちゃん、ごめん。林原には君のこと話してるんだ」

勝手に袖希の性別をばらして悪かったかな。こんな風に直接会うことになるとは思わなかったから、正直、気まずい。

「べつにかまいません。勘違いされたりわざわざ説明したりしなくて済むので、むしろ助かります」

「そっか。ありがとう。それで、亜衣ちゃん、なんで花屋に行くの？」

「出演する友達に、花束の差し入れをするんです」

そういうものなのか。

四人でぞろぞろフラワーショップまで歩いた。駅に隣接しているので、それほど遠くはなかった。

亜衣と袖希が、店員と花を選んでいる。

「金平糖こんぺいとうの精こって衣装がピンクなの。花もピンクがいいかな？」

「うん。赤やオレンジはおかしいよ。ピンクか白でいいんじゃない」

レジ付近には出来上がった花束がいくつも置いてある。みんな、バレエの出演者に送る花なのかな。うーん、右も左もわからないとは、このことだ。

「お聞きしますか？」

別の店員に声をかけられた。

「いやオレたちは……」

林原が慌てて首を横に振ったが、俺は店員に歩み寄った。

「花束をひとつお願いします」

とにかく、どう選べばいいかわからなかったから、亜衣と柚希に教えてもらいながら小さめの花束を作ってもらった。

中国の踊りとやらは、赤い衣装だそうで、オレンジや黄色のバラがベースになった。

考えてみたら、女の子に花束を贈るなんて、生まれて初めてだ。この状況で、凜にあげる花束を『贈る』なんてものに入るかどうかわからないけど。

会館に着いた。受付で花束を預かってもらえるようだ。亜衣に倣って花束にカードを添えて手渡した。

『凜ちゃん、頑張れ。楽しみにしてるよ』

カードにありきたりのメッセージを名前と一緒に書いた。困った。妙に照れくさい。

そんなことをしているうちに、開場の時間になった。

亜衣にこの辺りなら観やすいと思います、と言われて、並んで座った。俺は柚希と林原の間で、柚希の反対隣りには亜衣が座った。

何列か後ろに、カメラマン席がある。さすがにいいカメラだ。型番は古いけど、俺なんかじゃ一生、手にすることはできないだろう。三脚も一流品だ。

それにしても、この距離から写すのか。いくら望遠レンズとはいえ、もう少し近いほうが写しやすくないのかな。

まだ開演まで時間があるので、俺は席を立って動いてみることにした。客席を一通り歩いて空席に座ってみたりして、なんとなくわかった。前から撮ると、見あげる角度になりすぎるのだ。それに、広角レンズを使っても全体を入れるのは難しい。後ろから撮れば舞台のどの場所で踊っていても、カメラに収まるようだ。

もちろん、客席への配慮もあるのだろう。前の真ん中で三脚を立てて撮影されたら、後ろの客は観覧しづらい。

席に戻ってしばらくすると、開演時間になった。

客席が暗くなり、幕が上がった。

凜の最初の踊りは七番目だ。

いま踊っているのは、幼稚園くらいの小さな子どもだ。動きは揃わないし、人数は多い。カメラマンは苦労しているだろうな。それに、舞台のスポットライトは目で見える以上に、カメラには厳しそうだ。止まってくればシャッター速度を遅くして光を取り込めるが、前後左右に動くから難しい。

それに二番目の踊りが始まったときに、ライトの色が青くなった。そのまま写せば顔まで青くなる。踊りによって、ホワイトバランスを変更しないといけないようだ。

大変だな。ここに来なければ、カメラマンが近くにいなければ、こんなふうに舞台を見ることはなかった。なかなか新鮮だ。

凜の最初の踊りは、問題もなく終わった。基準もなにもわからないうが、結構うまいんじゃないだろうか。普段会っているときより背が高く感じるのは、あのトウシューズとやらのせいだろう。

このあと二十くらい踊りが続いて一幕が終わる。休憩をはさんで、二幕がくるみ割り人形だ。

それまでは正直、退屈だ。

最初こそもの珍しさで観ていたけど、だんだん眠くなってきた。

これがまだ、似たような踊りが多いんだよ。さっきも踊ってなかったっけ？ みたいな連続なんだ。

「柚希ちゃん」

小声で隣に話しかける。

「はい？」

「もし俺がくるみ割り人形まで寝てたら、中国のふたつ前で起こしてくれる？」

「わかりました」

「悪いね」

反対隣りを見れば、林原はとっくに眠り込んでいた。一幕に舞台監督の見せ場はないようだ。

一幕は退屈だったが、二幕のくるみ割り人形はなかなか面白かった。

結構、CMなんかで訊いたことがある曲も多くて驚いた。大道具や背景も多くて、林原は身を乗り出すように観ている。

中国の踊りはふたりで踊っていた。凜と同じくらいの背丈の男子だ。

バレエ自体、踊る子はほとんどが女の子だけど、この踊りは男女のペアで踊るらしい。

色違いの衣装に、同じ動き。

なんだか中国の民族人形みたいで可愛い。だけど、可愛くて胸が

きりきり絞られた。凄く似合っている気がして、凜がふさわしい相手といるように思えて、言いようのない気持ちが入み上げた。
舞台の上の凜が、遠い存在に感じられた。

第二十一話　くるみ割り人形（後書き）

くるみ割り人形に関しては、ちょっと怪しいです。

すつとこどつこいだったら、ごめんなさい。

調べられる範囲で調べてはみましたが……。

クリスマスを、柚希と亜衣がバレエで、碧とさくらが映画に行くのは、早い段階で考えていたんですが、林原くんまで参加することになったのは、結構ぎりぎりでした。

今日は、私生活でもクリスマス会で楽しい一日でした。

第二十二話 人肉饅頭屋の一週間

舞台が終わって、俺たちは建物の外に出た。暖房が効いた屋内から出ると、外の寒さに思わず身震いする。俺は慌てて持っていたダウンに袖を通した。

ホールは帰るひとと出演者に面会するひとで、ごった返していた。出演者には子どもも多い。父親らしきひとが、そこかしこで立ちすくんでいるのは、着替えが終わって出てくるのを待っているのだらう。凜の親父さんもいるかもしれない。でも、探すどころじゃなかった。

柚希たちもすぐそばにいた。人混みの中、だれも、はぐれなかったようだ。といっても、柚希たちとは、ここで解散だけだ。

ジーンズのポケットに突っこんでいた携帯が振動した。取り出して開くと、表示はさくらからの電話だった。

「さくらちゃん？」

『副部長、バレエ、終わりました？』

「終わっていま、建物から出たとこ」

『瀬戸さんとそっちで会いました？』

「いま一緒にいるよ」

『あー、よかった。瀬戸さんに電話したんですけど繋がらなくて』

「みんな、マナーモードにしてるから、気がつかないんだよ。柚希ちゃんに代わるうか？」

俺の言葉に反応して、柚希が振り返った。

『いえ、瀬戸さんに伝えてください。碧が気分悪くなって、一緒に食事に行けなくなりました』

どうやら、柚希と碧は待ち合わせる予定だったらしい。

「気分悪くなっちゃって、碧ちゃんは大丈夫なの？」

途端に、柚希が心配そうな顔で覗き込んでくる。なにか言いたそうな様子の柚希に、俺は軽く頷いて制した。

『はい。でも、食欲が全然ないから、寮に帰って寝たいみたい。これから一緒に寮に帰ります』

碧とさくらは、大学の女子寮に入っている。具合の悪くなった碧とさくらが一緒に帰るのは当然だと思っけど…。

「なんでまた？ 映画に行くときは、元気だったんだろ？」

『映画観て気持ち悪くなったって言うてるけど、そんなこと、あるわけないし、ポップコーンにあたったのかも』

ポップコーンは、あたるような食べ物じゃないだろう。

「映画、なに観たの？」

『人肉饅頭屋の一週間です』

じんにくまんじゅうや……タイトルだけで、ホラーでスプラッタな内容がバンバン伝わってくるんだけど……。

「……えっと、確か3Dだったよね」

『はい。凄い迫力でめちゃくちゃ面白かったですよ。血飛沫ちしぶきがこっちに向かってどばーって感じで、もう大興奮の二時間でした。この冬、絶対おすすりめです！ 絶賛放映中！』

さくらよ、悪魔か、お前は……。

俺は、碧の身に降り注いだクリスマススイブの惨劇に、心から同情した。

「とりあえず、柚希ちゃんには伝えるよ」

『はい、お願いしまーす。あ、副部长、メリークリスマス！』

「メリークリスマス……」

なんでこんなに明るいんだ。そんなに映画が、面白かったのか。恐ろしいやつだ。

電話を切って、俺は事の次第を柚希に説明した。

「……要するに『人肉饅頭屋の一週間』という映画を観て、碧さんは気持ち悪くなっただんですね」

頷く俺に、柚希は頭を抱えている。

「こんなことになるなら……」

「合コンに行ってくれてればよかった？」

「……それは嫌です」

嫌なんだ。合コンに行かれたら、碧が他の男とどうかなるかもと心配なんだな。せつかく、たぐいまれな美貌に生まれてきたのに、自信も余裕もないとは気の毒な話だ。

柚希は悲愴な顔で、訴えを続けた。

「小畑さん、本当に人間なんですか？ あんな危険なひとを野放しにしていたら、日本の危機だと思うんですけど」

テロリストじゃないんだから……、と言いかけた言葉を俺は飲み込んだ。この状況でさくらの肩を持つほど馬鹿じゃない。しかし、柚希とさくらは、よほど相性が悪いのかな。

さくらも、悪気がないのはわかるんだが、柚希を不幸に突き落す癖がある。今日のこともあり。部室で胸を触らせたセクハラもしかり。

すぐ隣で、亜衣と林原が肩を震わせて笑いをこらえていた。他人事なら面白い話だもんな。

下手に渦中にいると、全然笑えないのが辛い。

第二十二話 人肉饅頭屋の一週間（後書き）

猟奇的な映画が映画館で3Dとかありえないんですけど、この部分はファンタジーと思って、目を瞑ってくださいませ（笑）

楽しく書けたシーンです。部室以外では珍しいかな。

凜が出てくると、シリアスになって、出てこないとかメディーになるようです。

最近、ジャンルのコメディを恋愛にすべきだったかも、と悩んでいます。

でも、恋愛というほどには、なにもないなあ……。

第二十三話 ジュルックでクリスマス

「これからどうする？」

林原が訊いてきた。

「亜衣ちゃんたちは予定あるの？」

「このあと、さくらさんと碧先輩と合流して、食事する予定だったんです」

「あ、そつか。じゃあ、ふたりになったんだ」

待ち合わせをしていたのは、柚希と碧だけじゃなく、亜衣とさくらもだったのか。それじゃ、部室でおなじみの女子会だろうに。

「だったらさ、オレらとメシ食いに行かない？」

林原の提案に、亜衣と柚希が顔を見合わせた。

「柚希、ジュルックに予約してるんでしょ」

「うん」

「予約？ 食事の？」

「はい。以前、柚希がバイトしてたカフェバーなんです。カクテルやビールの種類が多くて、ご飯も美味しいんですよ」

「へえ、いいね。行こうよ。ちょうど四人だし」

「今日はどこも混んでるもんな。キャンセルしなくていいなら、好都合じゃない？」

「そうですね」

柚希が頷いて、行き先が決定した。

店に着くと、三十代半ばくらいのイケメンが、愛想のいい笑顔で近寄ってきた。

若いときは美少年だったんだろうなあ、と思わせる面差しだ。あまり家庭的な匂いがしないから、独身かもしれない。

「ユズに亜衣ちゃん、いらっしやい。あれ？ 碧ちゃんとさくらちゃん、しばらく見ない間に、雰囲気が変わったね」

俺と林原の方を見て、首を傾げる。んなことないのはわかってるだろうに、面白いひとだ。いたずらっぽい顔で笑ってるから、絶対確信犯だぞ。

林原は「あらいやだ。変わってなんかはないのに、変ねえ」と妙な科しなを作って亜衣を爆笑させている。こういう奴なんだよ。

「不慮のアクシデントで、メンバー変更がありました。大丈夫ですよね？」

柚希がサッカーの監督みたいなことを言う。

「もちろん大丈夫だよ。ゆっくり愉しんでいって」

選手交代は、すんなり認められたようだ。

「メリークリスマス」

乾杯して黒ビールを勢いよく飲むと、ぷはっと思をついた。

「感じのいい店だなあ。教えてもらわなかったら、絶対わからなかった」

林原は上機嫌だ。確かに、エスニックな装飾が施されているけど、波長のずれた物がところどころにあって、面白い店だ。

出てきた料理も変わった味付けのものが多く、見た目も色鮮やかで可愛い。男同士で飲みに行くときは、こんな洒落た店には行かないから、新鮮で嬉しい。見栄えのいい料理のわりに量も多くて料金がリーズナブルなのは、場所が表通りから外れているからのようだ。客席を見渡せば、結構、男性客も多かった。

「しかし、柚希ちゃん、本当に凄いな。惣介の写真のモデルが男だと訊いてたけど、実物見てびっくりした」

林原は凄く凄いと感動している。ここまできると芸術品だよ、と美大生らしい感想まで飛び出したから、柚希も愉しそうに笑った。腫れ物に触れるように扱われるより、気が楽なのかもしれない。

「よく驚かれます。私の場合、成長期の途中でホルモン剤の投与を受けただけ……」

「柚希は本当にひどかったんです。自分に対する嫌悪感で、死んじやうんじやないかと思いました。眠れない、食べられないで。医者もこのままだと、精神的にも肉体的にも、もたないと判断して投与の決断をしたそうです。本来は成長期が終わってからのらしいんですけど」

「へえ……、大変だったんだね」

「いえ」

俺も初めて訊いた。以前、柚希とカラオケに行ったとき、歌声まで女の子だったから驚いたけど、そんな経緯があったのか。

「薬を飲めば、ある程度、男になるのを抑えられると訊いて、救われました」

「見た目以上に、苦しい病気なんだな」

俺は武智を思い出して俯いた。

柚希は自分の性別を受け入れられなかった。成長して、異性を好きになり、男として生きる覚悟を決めた。

武智は、自分の違和感をずっと封じ込めて生きてきた。けれど結局、いままで守ってきたすべてを捨てて、自分を解放した。

同じ病気なのに、経緯も結果もまるで違う。どちらも大変な人生には違いないが。

このふたりがこの先、俺の助けを必要とするなら、ぜひ手を差し伸べたいと思った。

「柚希ちゃん、いまはどうしてんの？ 彼女いるんだろ？」

「いまは服用してません。リハビリ中ですね」

「えっと、嫌悪感とかまだあるの？」

「嫌悪感というより、自分の性別に違和感があるような…。なんかうまく言えないんですけど……」

うーん、わからん。女でいる方が精神的に安定するなら、男に恋愛感情を抱くのが自然な流れだと思うのに、柚希もややこしいよな。ただ俺は、柚希の性同一性障害は、普通と少し違うんじゃないかと思っっている。柚希は女になりたいというより、男でいたくない気持ちが強かった。男性嫌悪症がこじれたんじゃないかな。

訊けば柚希は私生児で、家族は母親だけらしいし。

「ホルモン剤やめて、なんか変化あった？」

「さあ。自覚できるほどは……」

「薬やめたからなのか、碧先輩の影響なのかわかんないけど、色気、出たよね、柚希」

「ああ、わかるよ」

亜衣の発言に、俺も相槌を打った。

「色気？」

柚希が驚いたように、まばたきした。

「前は綺麗なお人形って感じだったけど、人間っぽくなった」

なかなか上手いことを言う。さすが親友だ。

「へえ、面白いな。恋愛で色気か。惣介、お前も見習ったら？」

「俺は普通に恋愛してきたよ」

林原は「そうかあ」と目を泳がせた。

「林原さんは副部長さんと、同じ高校だったんですよね」

「そうだよ」

「副部長さん、高校のときからこんな感じだったんですか？」

「うん、そうなんだよ。変わり映えのしないやつでさ」

なんか失礼な言われようだ。

「まじめできつちり枠内に収めてくるやつなんだ。唯一、変わっているのは、血液型くらいかな」

「血液型？　A B型とか、R H -とかですか？」

「ボンベイ型なんだ」

「そんなのがあるんですか？」

「ボンベイ型にもいろいろあって、俺のはそんなに稀じゃないボンベイなんだ。二百人にひとりくらいだって」

「でも、珍しいですね。事故に遭わないといいですね」

「そうだね」

「副部長さん、高校のとき、彼女とかいたんですか？」

「惣介は結構もてるよ。パンチが足りないけど男前で優しいだろ。でも、恋愛に関しては、横着だな」

「俺のどこが横着なんだよ？」

つきあった相手には、俺なりに丁寧な対応をしてきた。林原も知ってるはずなのに。

「こいつ、自分が引つ張って行かなきゃいけない、年下の可愛い子は駄目なんだよ。つきあうのは年上か『長』が付く同級生なんだ」

「長？」

「クラス委員長、図書委員長……他にもいたかな」

「要するに、しっかり自分を持つてる人がいいんですね」

「ピンポン」

「あーあ、横着……」

亜衣に白い目で見られて、俺は頬を掻いた。林原の指摘に、俺は自分を振り返った。つきあうことは億劫ではないが、相手の気持ち

や状況を考慮して、デートの段取りを考えるのは確かに苦手だ。
それなら、相手のわがままに振り回される方が気楽だった。

「そう言われると、そうかも……」

「自覚ないのかよ。頼りないなあ」

林原は呆れた声で天を仰いだ。

第二十三話 ジュルックでクリスマス（後書き）

今夜はクリスマススイブですね。

私生活ではいつもとそれほど変わらず…というか、年賀状に追われて一日が終わりました。

年末年始は、思うように時間が作れませんが、二十五話までと番外編は年内に更新したいです。

そのあとしばらくお休みします。二十五話が終わった後か、番外編が終わった後に、活動報告でお知らせします。

第二十四話 碧の写真

「それで、柚希ちゃんの彼女って、どんな子？ 気になるなあ。携帯に写真入ってないの？」

林原が興味深げに眼を輝かせている。

「そういえば、写したことないです」

「写真部なの？」

「はあ……」

柚希が気の抜けた返事をした。

「他のカメラで撮ってるの？」

「いえ、一眼レフでも写したこと、ありません」

「人物は撮らないの？」

「練習で撮ることは多いんですけど……」

「だれを撮るわけ？ 彼女を撮らずに」

俺と柚希の視線は、亜衣に集まった。

「亜衣ちゃんばかり写してんの？ 彼女、拗ねない？」

「……よくわかりません」

「そういうセオリー通りの子じゃないんだよ。ちょっと変わっててさ」

あんまりフォローにもなっていないかな。でも、言われてみれば、妙な感じがする。

柚希が碧の写真を撮らないことも、亜衣の写真は数多く撮っていることも。

「碧先輩の写真なら、わたしの携帯にありますよ」

「亜衣ちゃんの？　なんで？」

彼氏の携帯にもない碧の写真が、彼氏の親友の携帯にはあるなんて、俺は不思議に思った。

「以前、写させてもらったんです。学祭の名画に参加してくれるひとを、ブログで募集したときに」

「あ、そっか」

学祭の名画に協力してくれたときのブログだ。俺もそのブログを見たことがある。名画のための撮影会を、亜衣が自分のブログで紹介してくれたのだ。撮影者が柚希と碧であることを、写真つきで紹介していた。

そのとき、亜衣が自分の携帯で撮った写真を、まだデータとして残しているのだろう。

亜衣が携帯を操作して、表示させた写真を林原に見せた。

「あれ？ この子、どこかで見たことある」

「え？ 本当ですか？」

柚希が身を乗り出した。

「うん、もっと子どもっぽい感じだったけど、たぶん同じ子だ。どこだったっけ……」

「M大と美大はそんなに遠くないし、どこかで会ったことくらいあるんじゃないのか？」

もしくは、碧の元カレが美大にいたりして。碧も柚希と出会う前は、恋多き乙女だったから、ちょっとドキドキする。碧自身が積極的ってわけじゃないんだけど、風変りな性格はともかく、可愛い外見をしているし、さくらに振り回されて合コンに行くことが多かったんだよな。

「うーん、そうかなあ……」

すつきりしない様子で首を捻る。俺の顔を見て、あつと声を上げた。

「思い出した。惣介の部屋だ。お前、この子の写真、壁にいっぱい貼ってただろ」

「ああ、なんだ、そっか」

変な予感が外れてほっとした。林原は大学に来てからも、何度か

うちに来たことがある。当然、俺の部屋にもあがり込んでるし。

「……松浦さん、ひとの彼女の写真を、自分の部屋に貼らないでください」

安堵していたら、柚希は不服そうに睨んでくる。

「でも、俺が撮った写真だよ？俺の場合、被写体のほとんどが人物だし。碧ちゃんだけじゃなくて、君の写真も飾ってるけど？」

俺にとって、自分が撮った写真は作品だから、他のひとが恋人の写真を部屋に飾るのは、意味合いが違う。碧の写真も柚希の写真も夕焼けの写真も、同じなんだ。

「そんなことしてるから、許嫁に誤解されるんですよ」

「許嫁？ 惣介、お前、許嫁がいるの？」

「親が勝手に言ってるだけだって。困ってるんだよ」

「それにしたって、許嫁だろ？ どんなひと？」

「凄く可愛い子ですよ」

柚希がしれっと言う。

「へ？ 柚希、会ったことあるの？」

亜衣が驚いている。

「偶然ね。恋敵と勘違いされて『五年後は負けないんだから』って
宣戦布告されちゃった」

「きゃー、可愛いー」

「なに？ 五年後って、年下？」

「小学生なんですよね」

今度は亜衣が暴露した。

「小学生？ つか、写真部公認の許嫁？」

柚希と亜衣がそろって頷く。公認って、飲み会ときに話が伝わっただけなんだけど。

「はあー。熟女好きの息子に小学生の許嫁をあてがうとは。お前の母ちゃん、下手な芸人より面白いことするな」

おいおい、なんなんだよ、それは。
柚希と亜衣は涙を流さんばかりに笑い転げた。俺はとてつもなく大きな溜め息を落とした。

「まあ、とりあえず、婚約おめでとう。結婚式には呼んでくれよ
肩をとんとん叩かれて、俺は眉をひそめた。

「だから、なに訊いてたんだよ。俺は婚約を解消したいんだよ」

「なんで？」

「小学五年生なんだよ！ 生まれたときから知ってる子どもなの」

「五年も経てば、高校生になるじゃん」

「あのなあ……」

「惣介、お前なら、草食通り越して、断食男子で五年や十年、やり過ごせる。頑張れ」

「嫌だよ。修行僧じゃあるまいし……」

そんなことしたら、下半身の使い方もわからなくなりそうだ。

俺がブツブツ不満を口に出していると、携帯の着信音が鳴った。満席で店の中は賑やかだったから他の席のひとは気づかれなかったみたいだけど、マナーモードにしておくべきだったかな。さくらの電話のあと、解除してたんだ。

携帯を開くとメールが届いていた。送信者の名前が表示されていない。

訝しく思いながら、俺はメールの受信ボックスを開いた。

『そうすけ君へ 今日に来てくれてありがとうございました。お花、すぐくうれしかったよ。メールアドレスは、おばさんに教えてもらったよ。りんより』

凜からのメールだ。

携帯のアドレスに登録したのは、携帯番号だけだった。だから、メールアドレスは未登録だったのだ。

ところどころ無意味な絵文字で飾られた、幼いメールだった。それほど携帯を使いこなしていないのが、なんとなく伝わってくる。

ありがとうございました、なんて凜らしくない。たぶん、母親から教わったり進言されながら打ったのだろう。

写真が添付されていた。俺が買って受付で預かってもらった花束を抱えた凜だった。舞台衣装のまま、笑顔を向けていた。

「あれ？　くるみ割り人形の出演者？」

林原に横からメールを覗き見られた。

「ああ」

「そっぴやお前、近所の子が出演するって、花、買ってたよな」

「ああ」

「この写真の子が、花、贈った近所の子？」

「ああ」

「……もしかして、その近所の子が許嫁か？」

「……………」

大雑把なやつなのに、なんでこんなときだけ鋭いんだ。

「大当たりですよ、林原さん」

柚希があっさりばらしてしまった。なんの恨みがあるんだよ。

「え、本当に？」

「きゃー、わたしもどんな許嫁が見たい〜」

林原が俺の携帯を取り上げて、写真を食い入るように見ている。

「林原さん、どんな子ですか？ 可愛い？」

「…可愛い……？ と思うけど……？？？」

歯切れの悪い言葉にじれて、亜衣が携帯を奪い取った。

「うわー、可愛い！ 若いですね〜」

そりゃ、小学生だから……。

「中国に出た子なんだ。先に聞いとけば、もっとちゃんと観たのに、残念〜」

「その写真見て、亜衣ちゃんはどんな顔の子か、わかるの？」

林原に訊かれて、亜衣は「ああ、そっか」と笑った。

「舞台化粧してますもんね。見慣れないとわかりにくいかも」

「宝塚とまではいかないけど、独特の顔に描くんだな。客席から見るときは、全然わからなかった」

「ステージにそのまま立つと、顔がボケるんですよ」

「へえ〜」

俺も感心して返してもらった携帯の写真を見つめた。確かに、客席までは距離があるし、バレエであれ宝塚であれ、表情を伝えるにはそれなりに工夫が必要なんだろう。映画やドラマとは違うんだ。

第二十四話

碧の写真（後書き）

第二十五話　　クリスマスの春

「あーあ、なんかみんな春だなあ。クリスマスなのに」

林原が頬杖をついた。柚希はともかく、俺は春じゃないぞ。

「羨ましいですね」

カクテルを傾けながら、亜衣が頷いた。

「亜衣ちゃんは何？　彼氏いないの？」

いたら、クリスマスイブにこんなとこにいないよな。

「いまはいません」

「オレなんかどう？」

「芸術家の彼女になれるほど、器が大きくないんで……」

亜衣がやんわり断った。相手を立てながら断る高度なテクニックを用いるところから、断り慣れしてる感じだ。

「オレ、陶芸じゃなくて油絵だから、器なんかいらさないんだけど」

わけのわからない理屈で口説いているが、まあ、無理だろうなあ。林原はいい奴だけど、軽い感じに見られるし、亜衣は……そういえば、亜衣はどんなタイプが好みなんだろう。

「林原さんって、面白いひとですね。しっかりきっちりお断りします」

「やんわりお断りしても効果がないと思ったのが、亜衣は切っ捨て始めた。」

「嫌だなあ。そんな露骨に断られると悲しいよ。それじゃあ、亜衣ちゃんの好みってどんなひと？」

「普通のひとです」

「まさか、惣介みたいなの？」

「ひとを普通の代名詞みたいに言うな。」

「副部长さんは成熟したひとがお好きなので、わたしみたいな年下は眼中にないみたいですよ」

「振られたな、惣介。よかった、よかった」

「まったく、なに言ってんだか。」

「柚希が鞆から取り出した自分の携帯を開いていた。時間を確認したかったのか、俺や亜衣が携帯を触っているのを見て思い出したのだろう。」

「あっ」

「メールか着信履歴でもあった？」

「うん。あの、申し訳ないんですけど、先に帰ります」

「ああ、大丈夫だよ。お疲れ様」

サークルじゃないのに、お疲れ様は変だったかな。なんか、癖になってるかも。

「あの…亜衣、女の子ひとりになるけど……」

「あのね、柚希だって男なんだから、もともと女の子ひとりだったんだよ」

どうやら柚希本人も、とっさのときは自分を女の立ち位置にしてしまうようだ。

「あ、そっか。えっと、松浦さん、林原さん、亜衣をよろしくお願ひします」

「まかせといてよ。オレが責任もって家まで送っていくから」

林原が胸を叩くのを見て、柚希は複雑そうな表情になった。

「……できれば松浦さん、お願いします」

林原は信用できないと思ったらしい。まあ、妥当かな。

「わかったよ。君も気をつけてね」

「はい」

「わたしの心配より、このふたりの心配した方がいいんじゃない？
この店がどういう店か忘れたの？」

俺と林原の心配ってなんだ？ この店がどうかしたのか？

「……………松浦さん、林原さん、無事を祈ってます。じゃあ」

「はあ？」

なんかよくわからないことを言って柚希が出て行った。今日の食事は飲み放題のクリスマスコースだったそうで、柚希はきっちり自分の分を置いて行った。

「あれ、絶対、碧先輩からのメールですよ」

「なるほどね」

「柚希が恋を感じるひとつで、碧先輩だけなんですよね」

恋を感じるひとか…………。なかなか文学部らしい表現だ。

「愛情は親でも兄弟でも友達でも感じるけど、恋を感じるのは恋愛相手限定だから、すごく特別なことだと思いますか？」

「言われてみれば、そうだね」

「亜衣ちゃん、オレに恋を感じる予感しない？」

「全然しません」

「おかしいなあ」

おかしいのはお前だ、林原。

しかし、いつになくしつこいな。わりと来るもの拒まず、去る者追わず、って感じだったから珍しい。

「それより、さっき変なこと言っただけだった？」

「変なこと？」

「俺たちの心配がどうか、店がどうか」

「ああ、気がついてませんでした？　ここゲイのお客さん多いんですよ」

「ええ、そうだったの？」

気がつかなかった。辺りをこっそり見渡すと、来たときより男性客が多い。

「今日はクリスマスだから女の子多いけど、普段は時間が遅くなるほどゲイのお客さん増えるんですよ」

「……………」

俺と林原は顔を見合わせて唾を飲み込んだ。

こっそりと店の様子を伺う。どうなんだろう。そんなに露骨な客も見当たらないけどな。女の子同士の客もいるし、男女のカップル

もいる。男同士だからって、ゲイとは限らないはずだし。
亜衣に担がれたんじゃないのかな。そう思っていたら、林原に袖
を引っ張られた。

「あつち、そうじゃないか？」

耳元で囁かれて、俺は視線をカウンター席に向けた。なるほど、
ちよっとそれらしい感じがする。

「亜衣ちゃん、ここってそういう店？」

「べつにゲイバーではないですよ。碧先輩とさくらさんも来ますし。
店長さんがゲイなんで、そういう知人が集まってくるんですよ」

店長って最初、俺たちに声をかけてきた人だよな。服装が他のス
タッフとは違う。かなりの男前なのに、女に興味ないなんて勿体な
い話だ。家庭的な匂いがしなかったのはそういうわけか。

「まあでも、オレらは関係ないよな」

林原が笑い飛ばしていると、亜衣が神妙な口調で呟く。

「ふたりとも、結構いい線いってますよ。特に林原さんは狙われそ
うな気が……」

「ははは、よかったな、林原。モテるみたいだぞ」

「……モテてどうすんだよ……」

「……………」

「……とりあえず、飲んだし食ったし、帰ろうか？」

「そうだな」

俺たちは、乾いた笑いで顔を見合わせて、溜め息をついた。

「そうですね。じゃあ、お開きにしましょう」

「亜衣ちゃん〜、帰る前にメルアド、交換してくれ〜」

「お・こ・と・わ・り」

玉碎の林原は、本気が冗談かさっぱりわからないけど、あからさまに落ち込んだ。

「じゃ、じゃあさ、ブログは見てもいいだろ？ ブログしてるって言うってたじゃん」

亜衣はしばらく考え込んでいたが、諦めたように苦笑した。

「『あいあいのあいある日常』で検索してください」

「わかった。ありがとう」

嬉しそうに笑う顔が、本当に幸せそうだった。

とりあえず林原には、亜衣が恋を感じるひとみだ。

お前が一番、春だよ。

第二十五話　　クリスマスの春（後書き）

副部長視点の本線は、この話が今年最後の更新です。

読んで下さった方、ありがとうございます。

次の更新予定は未定です。すみません。年末年始はなににもできないので。

明日から、5日くらいの予定で、番外編を更新します。

先に帰った袖希の話になります。

予定は活動報告に載せますので、覗いてみてください。

番外編 1

恋を感じるクリスマスイブ（前書き）

番外編はややR15です。お気を付け下さい。

番外編 1

恋を感じるクリスマスイブ

カフェバー、ジュルックをあとにした柚希は、足早に歩きながら、さつき見た携帯をもう一度開いた。

『ちょっと体調がマシになったので外に出ました。瀬戸さんのマンションの近くにある珈琲ショップにいるから、帰るとき通りかかったら覗いてみて』

碧からのメールだ。三十分前に送信されていた。

マナーモードのままにしていたことが悔やまれる。いや、もっと早く携帯をチエックしておけばよかった。

いまから急いでも、珈琲ショップに着くのは三十分後だ。

柚希は携帯の時計を見た。九時十五分。碧の入っている寮は、外出届を出しても門限が十時だと訊いている。もう会えるはずがない。せめて声だけでも聴きたくて、間に合うように行けないことを謝りたくて、碧に電話をした。すると、電波が届かないか、電源を切っていると言声が告げてくる。

嘆いていても事態は変わらない。とにかく急ぐしかなかった。

駅のホームに立っただけでも、なかなか来ない電車に、気持ち焦るばかりだった。

「あ…碧さん……」

珈琲ショップのガラス越しに、文庫本を読む碧の姿を見つけて、柚希は驚いた。

行き違いになるとばかり思っていたから嬉しくて、たったこれだけのことで、胸に温かいものが込み上げる。

店に入って碧に近寄った。

碧が気配に気づいて顔を上げた。くせ毛の髪がふわりと揺れる。思わず触りたくなって困った。

「瀬戸さん、早かったね。もしかして、無理に切り上げさせちゃった？」

「いえ、もうほとんど終わっていましたから……」

急いで歩いてきたせいで、店の暖房が暑い。柚希は来ていたコートを脱いだ。

「なに飲む？ おなかはいっぱいなんですよ？」

「えっと、じゃあ、珈琲を……」

「注文してくる」

店はセルフのカフェだから、注文して自分が席まで持ってこなければならぬ。柚希は会えた途端、碧が離れていくのを寂しく思った。

「碧さん、大丈夫なんですか？ 映画を観て気持ち悪くなったって訊いたんですけど」

向かいの席に腰を下ろして、珈琲に口をつける。

「うん、もう死ぬかと思った。ここよりハンバーガーショップの方が近いの、わかってただけけど、当分、挽肉には近づけないよ。3

Dって凄いんだね」

3Dが凄いのではなくて、観た映画の内容が、猟奇的だったのだ。3Dはそれをさらにパワーアップさせたのだろう。

「そんなに凄い映画だったんですか？」

「うん。あ…なんか、思い出したら……」

胸を抑えて俯く碧の顔色は、見ている間にも青ざめていくので、柚希は慌てて首を振った。

「す、すいませんっ！ 話題を変えましょう。えっと、えっと……」

「瀬戸さんは亜衣ちゃんのご飯、食べてたの？」

「は、はい。松浦さんと美大の林原さんも一緒に」

「美大の林原さん？ ああ、色気のない副部長のヌードをモデルにした物好きなひとか」

なんか色々変更されている気がする。色気がないではなく、頼りない…いや、主張し過ぎない背中ではなかっただろうか。

まあ、どっちでもたいして変わらない。柚希は笑って頷いた。

「ねえ瀬戸さん、一度、家に帰ったの？」

「いえ。どうしてですか？」

「だって、大学で見るのと同じような服装だし」

「？ 服装？」

「バレエ鑑賞でしょ？」

「碧さん、バレエでどんな想像してるんですか？」

「どんなって、普通だよ。ベルサイユ宮殿とか、舞踏会みたいな感じ？」

「は？」

ベルサイユ宮殿や舞踏会を普通と称するひとに、柚希は生まれて初めて会った。

「違うの？」

「松浦さんや林原さんはジーンズでしたよ」

「ええ、ノーネクタイどころか、ジーンズでバレエ観るの？ 追い出されない？」

ホテルのレストランと混同してるのだろうか。

「みんな大抵、普段着ですよ」

「そうなんだ。最低でも結婚式に参列するような恰好じゃないと駄目なんだと思ってた」

踊るのは出演者だけなのに、碧がどうしてそんな勘違いをしたの

か不思議だ。

「もしかして、服装の心配から、一緒に行かないって言ったんですか？」

「それもあるけど、本当にわかんないし、寝ちやうだろっとなあって。あたし、オーケストラでも寝たことあるし」

「松浦さん、正々堂々と寝てましたよ」

「本当？」

「許嫁が出る二つ前になつたら起こしてくれて」

「うわあ、心臓に毛が生えてる」

「でもみんなそんなものですから」

「そうなの？　なんか格式高いイメージだったのに」

「バレエ教室の発表会ですから」

「ふうん、そっかあ」

「やっぱり、無理にでも連れて行けばよかったです」

そしたら、スプラッタ映画で碧が気持ち悪くなることもなかったし、クリスマスイブを一緒に過ごすこともできたのに。

「でも、わかっただけでも行けなかったと思うよ」

袖希が首を傾げていると、碧が苦笑した。

「瀬戸さんの友達が主役で踊ってるのに、寝ちゃったら悪いもん」

「そんなこと、気にしなくていいのに」

碧が文庫本を鞆にしまい込んだ。いつも持ち歩いているより大きなバندوقだった。少し違和感を覚えたけど、目の前にいる碧の姿に疑問も霧散する。

「でも、嬉しいです」

「え？」

「今日はもう、碧さんに会えないと思ってたから」

「会いたかった？」

「凄く」

「一昨日も大学で会ったのに？」

毎日会っていても、別れた瞬間、寂しくなる。いますぐにでも抱きしめたくなる。碧はこんな風にならないのだろうか。

なんだか自分の想いだけが、空回りしているような気がする。

「それでも…、あ、碧さん、もう十時ですよ。寮に帰らなくて、大丈夫なんですか？」

「うん。ちゃんと外泊許可、取ってきたよ。土曜日は取りやすいの」

「外泊って……」

「泊めてくれる？」

「は、はい、もちろん……」

柚希は思わず息を飲んだ。学祭最終日に、碧が泊まりに来たことを思い出したのだ。

あの夜の出来事が、脳裏をよぎる。

すがりつくように背中に廻された細い腕。

口づけと共に伝わった緊張感。

柔らかで温かかった乳房の感触。

思い出すだけで、瞼が震えそうになって落ち着かない。

「瀬戸さん、どうしたの？」

幼い表情で碧が首を傾げていた。このひとは、見あげるような角度のときに、普段より子どもっぽく見える。

伺うような目が、不安げに揺れていた。

「迷惑だった？」

「いえ、そんなこと、ありません」

馬鹿なことを考えていた。碧は食事もできないほど体調が悪いのに。

申し訳なさと恥ずかしさで赤面しそうだ。

「寮って、外泊許可を取るとき、理由とか場所とか訊かれるんですか？」

「友達の家に行きます、で通るよ。運動部の寮はもつと厳しいらしいけど、あたしが入ってるところはアパート代わりだし、規則とかはあんまり厳しくないんだ」

「そうなんですか」

「男子禁制だけどね」

「それはそうでしょうね」

女子寮は男子禁制。だから柚希は入れない。碧とふたりきりになるには、碧が柚希のマンションに来るしかない。柚希が来てくれとは言えないから、毎日のように会っていても、ふたりでゆっくり話すのは久しぶりだった。

「外泊のときも携帯で連絡取れるようにしておけば、うるさく言われないよ」

「携帯と言えば、さっき碧さんに電話したら、繋がらなかったですよ」

「え？ 本当？」

碧は慌てて携帯を開いた。

「あー、充電、切れてる。寮長さんにはれたら怒られるかな。どうしようっ」

「携帯会社同じだし、私の充電器がたぶん使えますよ」

「そうなの？」

「急いで帰りましょう」

「うん」

ふたりで慌ただしくトイレにカップを乗せて、コートに袖を通した。

番外編 1

恋を感じるクリスマスイブ（後書き）

松浦たちと別れたあとの、柚希の話です。

恋を感じるときは三人称だったので、三人称で書いてます。

M大写真部：は、主役が松浦では弱いなあ、と思っていたので、さくらの佐々木の一人称の話も書く予定だったのですが、不器用なせいか、書けませんでした。

それで、気が付けばこんなことに（笑）

街に溢れるイルミネーションとクリスマスソングの中を、碧と歩いた。

ずっとこの日を想像していた。クリスマスに思い入れがあるわけではないけど、とりとめもなく考えていた。

去年まで、自分には縁のないものだったから、碧と過ごすクリスマスを楽しみにしていた。

けれど柚希は友人の舞台を観に行かなければならなかったし、碧は一緒に来てくれなかった。がっかりしていたら、碧はちゃんと自分に会いに来てくれた。

自分ひとりが子どもっぽい我が儘を主張していたような気がして、いたたまれない気持ちになった。

マンションの近くにあるコンビニに差しかけたとき、柚希は足を止めた。

「碧さん」

「なに？」

「食事してないんですよね？」

「うん」

「なにか、食べられそうなもの、ないですか？」

「一食くらい抜いたって、死なないよ」

笑って答えたけど、柚希は心配そうに顔を曇らせた。碧は苦笑して、コンビニの店内に視線を向けた。

「あつ」

「えっ？」

「あ、ううん、ごめん。やっぱりなんか買ってくる。おにぎりくらいなら食べられそうだし。待ってて」

碧はそう言うと、自動ドアの向こうに入ってしまった。

待っててと言われたので、柚希は店の外で待つことにした。昼間は曇り空だったけど、いまは綺麗な星空が見える。明日の朝は、冷えそうだ。

店の中の様子を、ガラス越しに伺う。碧はレジの前にいた。不自然に顔を背けている。どうしたんだろうと思っていたら、レジのすぐ横に肉まんのカースが見えた。

いまの碧には、見るのも怖い食べ物なのだろう。

一緒に入って支払いをすればよかったと後悔した。

店から逃げるように、碧が戻ってきた。

おにぎり以外にも、買い物があったらしい。レジ袋が少し大きかった。

泊まることになったからだろうか。けれど碧は、最初からそのつもりで寮を出たはずだ。鞆も大きい。引っかかるものを感じたけど、荷物や買い物のことを訊くのは躊躇われた。

「ね、瀬戸さん、手、繋いでいい？」

言葉に驚いて、隣を歩く碧の顔を見つめた。イルミネーションの光で、白い頬に赤や緑の明かりが反射していた。

つぶらな瞳が可愛かった。

柚希は微笑むと、黙って碧の手を握った。碧の手は温かかった。伝わった温かさに、自分の手が、冷たく凍えていたことを知った。碧に冷たい思いをさせて、申し訳なかっただろうか。けれど、碧は嬉しそうに笑いかけた。

「クリスマススイブの夜に、女同士で手を繋いで歩いてたら、変に思われるかな」

確かにそうだ。他人が見たら、女同士にしか見えないだろうから。

「そうですね。でも、いまさら離せないのです、急いで帰りましょう」

指先から伝わる体温に、幸せってこういうことかもしれないと思っただ。

凍てつく寒さも忘れてしまうほど、柚希は温かな気分だった。

番外編 2

恋を感じる指先（後書き）

今年最後の更新です。

読んでいただいて、ありがとうございました。
来年も、よろしく願いします。

番外編3

恋を感じるハッピーバースデー

部屋に着いた。柚希はマンションで一人暮らしだから、部屋の中は暗い。

玄関に入るなり、繋いでいた手を引き寄せて、碧を軽く抱きしめた。

「あ、あの……」

戸惑う声が肩口から聞こえて身体を離した。

「すみません」

人目がなくなった途端、我慢できなかった。

玄関先で靴も脱がずに、みっともなさすぎる。謝るのも間違っている気がしたけど、碧は「ううん」とブーツを脱いだ。

「入っていい？」

「はい。あ、部屋の電気点けます」

明るくなった部屋に、碧が入っていく。

碧がここにくるのは三回目。本当はもっと来てほしい。けれど、二度目に来てくれたとき、最後までしてしまったので、部屋に誘うことは露骨に寝たいと言っているようで、誘えなかった。

コートを脱いで、エアコンをつける。忘れないうちに携帯の充電器を出した。

「どうですか？」

「大丈夫。ちゃんと差し込めるよ。ありがとう」

「なにか、飲みますか？」

「うん。なんでもいいよ」

体調のことが心配だった。

おにぎりを買っていたから、緑茶を淹れたかったけど、買い置きがない。コーヒーでは合わないし、紅茶にしようと思った。ティーバッグを手にして、紅茶だと血の色を連想するかもしれないと気づき、また収納棚に戻した。

散々迷った挙句、結局、コーヒーカップに入れたのは、蜂蜜レモンだった。おにぎりに合うかは微妙な事態だ。

リビングで碧は、フォトフレームを見ていた。

薄い透明フィルムに写真を入れて捲れるタイプで、全部に写真を収めると百枚くらいになる。碧はここに来るといつも、そのフォトフレームを見る。最後に来たときから、写真は増えていなかった。

「最近、撮ってないの？」

「ほとんど撮ってません。学祭が終わったら、目標がなくなって」

ソファアに並んで座った。

そばで見ると、碧はまだ顔色が悪い。蜂蜜レモンを飲んで「美味しい」と笑ってくれた。食べられそうなら食べてくれと頼んだら、コンビニで買った昆布のおにぎりを食べ始めた。

碧が食べる姿はやたら可愛い。リスやうさぎを思い起こす。膨らんで、もぐもぐ動く頬にちよっかいを出したくなった。

「撮りたいの、なんかないの？」

「碧さんを撮りたいです」

「あたし？ 物好きだな」

碧のことは、以前から撮りたかった。ちゃんと頼めば碧は写させてくれる。けれどまだ、腕に自信がない。

なまじ、松浦の写真を間近で見ているので、踏み出す勇気がでない。いま撮っても、松浦にはとてもかなわない。

碧にだけは、他のひとに撮ってもらった方がよかったと言われたくなかった。

「そういえば、碧さん」

「なに？」

「松浦さんの被写体になったことあるんですか？」

「へ？ うーん…、ああ、うん、あるよ。なんで？」

「今日、そんな話題になったんです」

「そうなの？」

「松浦さんの部屋に、碧さんの写真が貼られているのを、林原さんが見たって」

「へえ…。でも、副部長は、作品として貼ってるだけだよ」

「それは、そうみたいですけど……」

「あたしより、瀬戸さんの写真の方が飾ってるんじゃない？」

「それも言われました」

「怒ってるの？」

「怒ってません。でも、拗ねてます」

碧は驚いたように目を見開いた。

「ね、瀬戸さんって、焼きもち焼き？」

前に、部室でもそう訊かれた。佐々木に興味を持った碧にやきもきしたときだ。うまく平静を保ったつもりだったのに、いまと同じ質問をされて、凄く動揺した。あのときはごまかせたけど、二度目となると、ごまかすのも難しい。

「…実はそうなんです」

結局、自爆するはめになった。重ね重ね、みっともない。

「ふうん。そうなんだ」

「幻滅しました？」

「なんで？」

「見苦しいところ、見せないように気をつけているんですけど、駄目ですね。すぐ地が出てしまっ」

「嫌じゃないよ。好かれてるから妬いてもらえるんでしょ？ 嬉しいよ」

このひとはどうしてこんなに、自分のすべてを当たり前のように受け入れてくれるんだろう。柚希は碧の髪を、そつと撫でた。

「でも、どうして松浦さんの被写体になっただんですか？」

「瀬戸さんみたいに、ちゃんとしたモデルになったわけじゃないの。カメラ教えてもらっついでに撮られてたんだよ」

「碧さんが一年のときですか？」

「うん」

「……………」

柚希は逡巡した。一眼レフなら自分も松浦から教えてもらった。同じメーカーだからだ。

けれど、部室で何度かわからないことを訊いた程度で、モデルをするような時間などなかった。

松浦の部屋にある碧の写真はどんな写真だろう。凄く気になる。

「碧さん」

「なに？」

「もしかして、去年、松浦さんとつきあったとか？」

「へ？ まさか。そんなことないよ」

「本当に？ 忘れてるんじゃないですか？」

「いくらあたしでも、つきあった相手を忘れてたりしないよ」

「はあ……」

柚希は曖昧に頷いた。碧は嘘をついたりごまかしたりしない。正直で単純な性格だ。けれど、恋人に対する執着心が薄いところがある。

相手も周囲もつきあってる認識なのに、碧ひとりがつきあっているつもりじゃなかった、くらいのことはありそうだ。

「うーん……、あ、そうか。やっぱり、そんなわけですね」

「え？」

「松浦さん、可愛い年下の女の子は駄目らしいから」

「うん。前につきあってた彼女も、八歳くらい年上だったよ」

「松浦の名字のひとは、年上嗜好なんですか？」

らしくもなく、嫌味が口からこぼれた。

だけど、碧の心に唯一残っているひとがいるならそれは、碧が最

初につきあったひとだ。かなり年上だったと漏れ聞いている。

「あたしは、彼氏、年下だよ」

碧がまっすぐ見つめてくる。

名指しされたことは嬉しいが、もうひとつ気がかりがあったことを思い出した。

「…私はいま、碧さんより年下ですか？」

「うん。だって瀬戸さん、一年だもん。現役でしょ？」

「現役です。でも、そうじゃなくて、学年じゃなくて、碧さん、いま十九歳なんですか？ 二十歳なんですか？」

夏生まれの柚希は十九歳だ。碧の誕生日がまだなら、タイミング的に同年である。

「……誕生日？」

「はい。まだ、教えてもらえないんですか？」

碧が十二月生まれなのはわかっている。今日は二十四日。すでに誕生日は過ぎている可能性が高かった。

「いま何時？」

「え…と、十時半くらいです」

「じゃあ、年下だよ」

「……もしかして、今日なんですか？」

「うん」

「お…、おめでとーいございます」

「ありがとう」

まさか今日が誕生日だとは思わなかった。驚きで、言葉も思考もうまく回らない。けれど、松浦が言っていた言葉を思い出した。

『碧ちゃん、子どもの頃から自分の誕生日、嫌いだったって言うたな』

クリスマスイブが誕生日なら、本来、年にふたつ食べられるケーキがひとつしか食べられなくて嫌いだった、ということは充分あり得る。

「どうしてももっと早く、教えてくれなかったんですか？」

「言ったら、友達の舞台、観に行かない、とか言いそうだったし」

それは間違いなく言った。だから碧は言いだせなかったのだ。もし舞台が一日でもずれていたら、教えてくれていたのだろう。教えてもらえなくて、理由がわからなくて、あんなに疑心暗鬼になっていたことが、ようやく払拭された。

「……碧さん、どうしてクリスマス…というか、誕生日のプレゼントはいらなくて言うんですか？」

「あたし、友達から誕生日デートで気ましくなった話を聞いたことがあるんだ」

「誕生日デート？」

「その子、彼氏に、誕生日の日、テーマパークとホテルに連れて行ってもらったんだって」

碧以外、つきあつた経験がないけど、それが、女の子の喜ぶ内容であることは、袖希にもわかる。

「その日、生理だったからお泊り台無しにして、気ましくなつたんだって」

「はあ……」

袖希は頭の中で、状況を想像してみた。正直、中途半端な自分には、男の立場も、女の立場もちゃんとは理解できなかった。

一日ふたりで過ごせたのだから有意義な日だったと思うし、その日以外セックスできないわけじゃない。そんなことで、なぜ気ましくなるのか、よくわからない。

「そういうデートって、お金かかるでしょ。友達はそれが心の負担になるみたいだったの。あたし、瀬戸さんとそういうやりとり、したくないなって。まだお互い、学生だし」

「…そうだったんですか。なんだ、よかった……」

「え？」

「プレゼントは欲しくないって言われて、落ち込んでたんです」

「なんで？」

「あとに残る物をもらうと、別れたあと、処分に困るから欲しくないのかと……」

碧の顔が、泣き出しそうに歪んだ。

その顔を見て、柚希は本当に申し訳ない気がした。自分は勝手に悪い考えに捉われて、いじけていたのに、碧はふたりの関係が悪くなるものを排除するよう、心を砕いてくれていたのだ。

やはり自分は年下で、碧は年上なんだと思った。

柚希は碧に顔を寄せた。碧は顔を背けなかった。

唇を合わせると、碧の腕がすりすりつくように首に巻きついた。

キスが甘いのは、碧がさっき飲んだ蜂蜜レモンのせいだ。

舌に、唇に、愛撫するような接吻をした。官能的なキスはいつも緊張する。そして興奮する。

「碧さん、ちょっと待っててください」

柚希は立ち上がって、寝室のクローゼットから鍵を持って来た。その鍵を、碧の手のひらに乗せた。

「碧さん、これ、持ってきてください」

「鍵？」

「この部屋の合鍵です。いつでも好きなときに来てください」

「なんで？ こんな大事なもの、預かれないよ」

「クリスマスイブだから、私もプレゼントが欲しいんです」

「もらってるの、あたしだよ」

「じゃあ、バースデープレゼント兼用で」

「……いいの？」

「はい」

「返してもらいたくなったら、すぐ言ってくれろ？」

そんな日はきつと来ない。けれどそう告げても、碧は納得しない。根拠のない口約束を、喜んでくれない人だ。

柚希は黙って頷いた。強く抱きしめると、耳元に碧の吐息が掠めた。

気が変になりそうなほど、愛おしかった。

番外編3

恋を感じるハッピーバースデー（後書き）

話はおもいつきし途中だったのに、更新ができなくて申し訳ありませんでした。

結局、お正月明けにクリスマスの話が続いております（。>0<。）
この事態を避けるために、途中停車覚悟で見切り発車したのですが
…。

明日、明後日、番外編を更新します。予定ですが。

番外編 4

恋を感じるバスタイム

「碧さん、お風呂、入ります?」

「うん」

「じゃ、先に入ってください。もう溜まってますから」

「ねえ、ひとりで入るの怖いから、一緒に入って」

「っ!」

「駄目? 嫌?」

「そうじゃなくて、碧さん、忘れてませんか?」

「え? なにを?」

「私は男なんですよ」

「知ってるよ。つきあってるんだから」

「さくらさんと寮のお風呂に入ると、一緒にしてませんか?」

「んー…、あのさ、前から訊いておきたいことがあったの」

「え?」

「瀬戸さん、あたしの身体見ると、自分の身体見られるのと、どつちが嫌なの？」

「は？」

「あたし、性同一性障害って、よくわかんない。本とかネットで読んでみたけど、瀬戸さんにはあまり、当てはまらないし……」

「……そうですね……」

当てはまるのは、性別に違和感があることと、嫌悪感があること。碧と出会って、そういう症状はすいぶん薄れたけど、まだ完全ではない。

もし、自分が性同一性障害なら、碧を好きにならないだろう。淡い好意ではなく性欲を抱くのは、どう考えてもおかしい。

けれど、ひとから男に見えないと言われて、ほっとしている自分がある。もし、男が女装しているようにしか見えないと言われれば、落ち込むだろう。

碧とこんな関係になった今でも、性器は自分の身体の中で、最も忌まわしい部分だ。

「見る、見られるで言えば、自分の身体を見るのが嫌ですね」

「そうなの？　綺麗なのに……」

碧はよくそう言ってくれるけど、服を着れば女にしか見えないラインの身体に、男性器がついてるなんて、滑稽以外のなにものでもない。

「他の女の子の身体を見たいと思う？」

「思いません」

「うーん…、あ、そうだ。こないだ、さくらの胸、触ったじゃない」

「はあ……」

触ったというより、触らされたと言ってほしい。一瞬のことだっただけ、嫌な思い出だ。

「あのとき、なんか感じた？」

「びっくりしました」

「そうじゃなくて、興奮した？」

「しません」

「ふうん。じゃあ、やっぱり、普通の男の子とは違うのかな」

「嫌ですか？」

「ううん。瀬戸さんが普通の男の子だったら、あたしなんか相手にしてもらえなかったよ。きっと、光源氏みたいになってたよ」

「はあ」

柚希はぴんと来なくて頭を掻いた。

「で、お風呂、一緒に入ってくれる？」

「碧さん、私は男としての経験が、まだ一ヶ月くらいしかないんですよ」

「うん」

「だから、そういう上級者向けの話は、まだ無理なんです」

「お風呂に入るのは、上級者なの？」

本当に怖いだけなんだろうか？ 子どもなのか大人なのか、わからない。

今日が二十歳の誕生日だから、それもまたタイムリーだけど。

「別に、お風呂で襲ったりしないのに……」

呟かれた言葉に、柚希はひっくり返りそうになった。

結局、洗面所兼脱衣所の扉の外で、碧の入浴が終わるのを待つことにした。他人が見たら、きつと間抜けな光景だと思うだろう。痴漢に間違われても、文句はいえない。

一緒に入った方が、まだ、まともだったような気がする。こんな場合、普通の男はどうするのだろう。今度、松浦に会ったら訊いてみよう。

松浦もいまひとつ頼りないが、こんなことを訊ける同性の知り合いは他にいない。

碧と交代で、お風呂に入った。手早く済ませて出たら、柚希がさっきまでいた場所で、碧が座り込んで待っていた。

「碧さん、リビングにいなかったんですか？」

「ひとりになるの、怖かったから」

「寒くなかったですか？」

いくらマンションでも。廊下は暖房が届きにくい。

「ちょっと寒かった」

「風邪ひいたら、どうするんですか？」

「じゃあ、温めて」

こんなことを言われたら、ますます抱きたくなる。淡々と甘える言葉を、前触れもなく投げかけられるから、予測もできなくて、胸の鼓動が跳ね上がる。

「あ、いま何時？ まだクリスマスイブ？」

洗濯機の時計を見たら、十一時半を少し過ぎていた。

「まだ、二十四日です」

「ほんと？ よかった。瀬戸さん、これあげる」

碧から箱を手渡された。

「あ……りがとうございます……」

突然だったから、驚いた。クリスマスプレゼントにしては、雑な渡し方だ。

大きさは新書サイズくらい。クリスマスなのに、地味な包装紙で梱包されている。リボンもステッカーもついていないその箱の大きさは、見覚えがある。

数ヶ月前、冗談半分に松浦からモデルの謝礼でもらった避妊具にそっくりだ。その軽さも、振ればカサカサする音も。

「碧さん、これ……？」

「W松浦で揃えてみました」

訊いた途端、袖希は思いっきり吹きだした。

松浦からもらった分は、まだほとんど残っている。それなのに碧が同じものを買ってきたのは、サイズが合わなかったからだ。前に碧が『今度買うとき、もうひとつ大きいサイズにしたら？』と指摘していた。凄く着けにくかったけど、そういうものかと思って使った。

「誘ってくれてるんですか？」

「うん」

「もしかして、来る途中のコンビニで買ったんですか？」

おにぎり以外にも、なにか買っている様子だったことを思い出した。

「うん。コンビニの前で、今夜、瀬戸さんに襲いかかろうと思いつ

いて」

色気も情緒もないお誘いが、可愛くて仕方がない。

「理性が飛びそうなんですけど……」

「ほんと？ 嬉しい」

腕の中に、碧が飛び込んできた。

ああもう、本当に困る。

大切に、優しくしたいのに、今夜は無理かもしれない。

番外編 4

恋を感じるバスタイム（後書き）

つきあうまでは、大変な思いをしたこの二人ですが、現在、蜜月のバカップルです。

柚希は性別が曖昧なキャラなんですが、ポケッツコミも曖昧です。碧やさくらが相手の時はツッコミですが、松浦や佐々木が相手になるとポケに回ります。

小説は、漫才のネタ帳じゃないんだから、こつという感覚自体がおかしいのかな…とは思いますが、関西の書き手さんに聞いてみたいですね。

書いてるキャラにポケッツコミありますか？（笑）

翌日は日曜日だったから、遅くまでベッドの上でゴロゴロした。

じゃれ合うようなキスを繰り返したり、触り合って過ごした。初めてしたときは、翌朝も行為に至ったけど、今日の碧は、戯れるだけで満足のようだ。

恋人と過ごすクリスマスは、気の利いた店で食事をしたり、どちらかの部屋でケーキを食べたり、プレゼントを渡したり、柚希はそんなイメージを想像していた。

なのに、碧の夕食はコンビニのおにぎりだったし、プレゼント交換は合鍵とコンドームだった。

現実はずっともロマンチックじゃない。

だけど、本当だったら二十四日は亜衣やさくらと食事をして解散するだけだった。碧は体調が悪いのに、会いに来てくれた。

嬉しい。

本当にもう、泣きたくなるくらい、嬉しい。

いちやつきながら感動していたら、碧が袖を引っ張ってきた。

「ね、瀬戸さん、おなか空かない？」

「そういえば、空きましたね。食べに行きましょっか？」

「うん」

「どんなものなら、食べられそっですか？」

「ハンバーグとか、ステーキでなければ大丈夫だよ」

一日近く経つのに、よほど怖い映画だったようだ。さくらはどうなんだろう。

「小畑さんは、怖がってなかったんですか？」

「うん。さくらは、めっちゃくちゃ面白がってた。パート2が出たら絶対、観に行くんだって。3Dはこういう映画でこそ価値があるって言ってた」

見た目以上にマニアな魂の持ち主だったようだ。

学祭の写真展には、可愛い写真を出品していたのに。…騙された……。

和食の店で、朝昼兼用の食事をするようになった。向かい合わせに座って、鍋焼きうどんを注文した。

「碧さん、松浦さんに何枚くらい、写真、撮られたんですか？」

「さあ、訊いたことないし、よくわかんないけど、千とか二千じゃないかな」

「ええ？ どうしてそんなに？」

「副部长、撮りだしたら一気に百枚くらい撮るときあるでしょ。二十回以上はカメラ教えてもらったし、それくらいになって」

言われてみたら、そんな計算になる。撮った写真を全部プリントして飾っているわけではないだろうが、なんとなく面白くない。

だいたい、どうしてそんなに、何回もカメラの操作を教えてもら

ったのだろつ。自分は、三、四回だった。松浦は碧に気があったのではないかと、またぞろ勘ぐりたくなってくる。

「副部长と言えば、瀬戸さんの方が噂になってるよ」

「は？」

「キャンパスで、仲良く歩いているのを見たってひとがいるの。知らない？」

「いえ、身に覚えもないんですが……」

「じゃあ、デマかな」

「いつ頃ですか？」

「十日か二週間くらい前？ 亜衣ちゃんのブログに、書き込みされたよ。大学の図書館から、仲、よさそうに歩いてたって。駐車場に向かったから、もしかやお持ち帰りされたのかもって」

「……………」

松浦に、区の図書館へ送ってもらったときのことだ。そういえば、歩いているとき、じろじろ見られていた気がする。

「…身に覚えはあります」

「そつなの？」

柚希は、図書館に送ってもらったときのことを話した。

「面白いね」

「面白くありません」

柚希は情けない声で反論した。

柚希は、碧と松浦の間に、なにかあるかもと不安になった。碧は、柚希と松浦の怪しい噂をブログで読んだ。

ラブラブのカップルがすることじゃない。

松浦という上級生は、地味に悪意もなく、自分たちの間を引っ掻き回す体質かもしれない。なんて傍迷惑な体質なんだ。

注文していた料理が運ばれてきた。

「この鍋焼きうどん、よく見たら面白いね。魚眼レンズで写したらどうなるのかな」

「あ、碧さん」

「ん？」

碧がうどんをちゅるちゅる吸い込んでいる。可愛い…いや、のんきに見惚れている場合ではない。

「写真部応援企画、本当に参加するんですか？」

「したい」

「カップルがテーマなんですよ」

ずっと引っかかっていた。他の男とのカップル写真を撮りたがっ

ているなんて、あまり好かれていない証拠のようで辛かった。

「あたし、前から瀬戸さんを写したかったんだ。絶対、可愛く撮るからね」

そんな無邪気な笑顔を向けられると、なにも言えなくなる。碧が自分に寄せる好意は、異性に対する情愛と、同性に対する友情が混在している。それは、出会ってからずっと、男だと言えなかった自分のせいだ。だから、怒れないし、文句も言えない。

「…最近、あたしのせいで、おしゃれ番長が手抜きしてるって噂なんだ」

「おしゃれ番長？」

「文学部の女子は、瀬戸さんのことそう呼ぶの」

「はあ…」

自覚があるので、否定はできない。碧に気持ちを寄せるようになって、袖希はスカートを選ぶことが少なくなった。入学した当初、服装は女の子らしいものが多かったから、手抜きしているように見えるのだろう。

「だんだん瀬戸さんが、男の子になっていくんだなって思って…」

店の中が、少しずつ賑やかになってきた。碧は周囲を気にする素振りをした。まだ隣の席は、空席のままだ。

「可愛い女の子に恋しちゃった思い出に、自分で瀬戸さんを撮りた

かったんだ。写真部応援企画はいいきっかけだなって」

「そうだったんですか……」

「魚眼レンズも欲しいけどね」

柚希は苦笑した。

松浦や佐々木とカップリングさせようとする碧の所業に度肝を抜かれたけど、理由を訊けば単純に嬉しい。

自分たちはお互いに、ちゃんと求め合っている。

「わかりました。もしモデルに選ばれたら、女役、引き受けます」

「ほんと？」

「ホルモン剤も止めてますし、いつ髭が生えてくるか、わかりませんから、いまのうちに」

碧は吹き出した。

「こんな会話を笑ってできる日が来るなんて、去年までは考えられなかった。

本当に、碧に出会えてよかった。碧には、どんなに感謝してもしきれない。碧に出会えたことが、生まれてきた性別を恨んできた自分への、最後の贈り物だったのだ。

「碧さん、お願いがあるんです」

「なに？」

「女役、引き受ける代わりに、応援企画の写真、私と碧さんの写真

も撮りたいんです」

「カップルに見えないよ」

「ある程度、見えるように努力します。それに、応募写真にならなくてもいいんで」

「うん、わかった。いいよ。でも、撮影はだれに頼むの？」

「松浦さんに」

「まあ、そうだよな。人物撮るなら、実力は抜け出してるもん」

こんなことを話していても、たぶん応援企画のモデルはしなくて済むだろう。カップルは写真部でなくてもいいのだ。ほかにいくらでも見つかるに違いない。

「ねえねえ、写すとしたら、場所はどこがいいかな」

「大学のシンボルみたいな場所といたら、正門から時計塔を背景ですか？」

「うん。でも冬だし、天気は左右されるよね。風、強い日、多いし」

「いろんな場所で何枚も写して、選べば大丈夫ですよ」

「そうだね。雪、降ったら、外がいいなあ。帽子かマフラーがお揃いって可愛くない？」

「いいですね」

「ベタすぎる?。」

「写真だし、少くらしい演出があった方がいいですよ」

「うん。そうだよね」

あてのない写真の話だったけど、愉しかった。

「あたしさ、彩度、下げて、ノイズ入れたいんだ……」

店にいる間、碧の笑顔は、ずっと可愛くてまぶしかった。

番外編 5

恋を感じる写真（後書き）

番外編はこれで終わりです。

次回から、本編に戻ります。

二、三日に一回くらい更新できるようになったら、再開します。

一月末までには、再開したいです。もし、遅れるようなら、活動報告でお知らせします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777z/>

M大写真部副部長の喧騒

2012年1月6日20時48分発行